
彼の非日常な生活、彼女たちの日常生活

Mikage

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の非日常な生活、彼女たちの日常生活

【Nコード】

N5626L

【作者名】

M i k a g e

【あらすじ】

改訂完了。結構旧バージョンとは違ってはいますが、基本的な路線はこれ以上曲げないでいこうと思います。

そこまで弱くも無いが最強でも無い青年が、異世界に放り出された。周りに勘違いされたり、たまに普通に凄いことをやってのけたり。

あるいは周りの人たちに影響を受け、成長のために努力したり。

そんな感じで進む、彼と彼女たちの物語。

勘違い要素を主にしていくつもりですが、なんだかんだでゆっくりと、しかし確実に主人公は強くなっていきます。周りのチート級に

は及ばないことを承知しつつも、それを言い訳にせずに主人公は努力して行きます。
御付き合いただける方は、どうぞよろしくおねがいします。

重要なお知らせ！

とりあえず改訂完了です。現在第1部最終話までが該当します。色々と変更点があります。なので今までの御話を読んでいただいていた方でも、1話から読み直していただかないと、おそらくは意味不明でしょう。

できるだけ変更点を少なくするつもりだったのですが……申し訳ありません。

少々、改訂前と雰囲気異なっているかもしれないと今までのほうが良かったという意見が出るかもしれないと覚悟はしておりますが、とりあえずはこの路線でいきたいと思っております。

感想や批評お待ちしております。

ぶろろじゅく・始まり始まり。(前書き)

改訂版です。多分に批判があると重いますが、真摯に受け止めていきたいと思えます。

ぶるぶるづく・始まり始まり。

始まりは唐突だ。いや、本当に。

「なんじゃらほい」

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺は部屋でぐうたらしていたと思ったらいつのまにか見知らぬ場所に居た』

な…何を言っているかわからねーと思うが、俺も何をされたかわからなかった…。

頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか幻覚だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

…いや本当、何処だよここ。俺は、つい今の今まで部屋でぐうたらしていた筈なんだが。具体的に言っと、黒歴史を思い出してべ

ツドの上で悶えていた。積年の中二病と真っ向から衝突し敗北。いや、嘘だよ？ それはおいとして　さて、どんな状況だこれ？

突然変化した状況を把握すべく、落ち着け落ち着けと念じながら（効果があるのかはさておき）周りを見渡してみた。無機質な壁。木製のデスク。同じく木製の本棚に、テレビとパソコン。そのような俺の部屋にあった筈のものが、此処には何も無かった。

その代わりにあるのは、古ぼけた石の壁、火が灯って光を放つ松明、そして女の子と、おそらくは兵隊と思われる、武装した敵つい男たち。

………待て待て待て。だいぶ色々とおかしいけど、それでも一番最後のはおかし過ぎるだろ。何時代の人間………というか、その武器本物ですか？

そんな異質な集団が俺を囲んでいた。正確には、俺の隣にいる女の子を囲むように半円状に、だけど。

………あれ？　ここは何処？　君は誰？　俺は星宮銀也だよ。

つと、真っ白になつてる場合じゃない！　一瞬で環境が変わつた………これはドッキリか？　いや、俺の周りにはこんな手の込んだ悪戯をする奴はいない。それにメリットがない。とりあえず、状況確認が先決か。周囲には槍と鎧で武装した兵隊、数は50か60人ほど。そして女の子。ここはとても落ち着いて物事を考えられる環境

じゃないな……。

「ああ、億劫だ……」

その上、なんか武装軍団は敵意バリバリだし。何これ、この女の子が追われてる感じなのか？ それはともかく……切り抜けなきゃならないにしても、人数が問題だな。もしも戦うとして、経験上武器持ち相手ならやれて3人。これはかなり上手くいったの話。それも武器が殴打武器かつリーチも短く、使う人間がそれ用の訓練をしていない場合。今回みたいに槍だの剣だのの使い手で、かつ訓練された本物の兵士なら……1人と1対1でやって勝てたら良い方だろう。っていうか怖い、刃物がこっちに向いてるって超怖い！ 隣の子もめっちゃ怯えてる……って、こんな可愛い子にそんな物騒なものに向けて怯えさせてんじゃねえよ！ いや、そもそも女性に何たることを！

そんな義憤に狩られた俺は、一步前に出て女の子を背中に庇った。俺のその動きに警戒レベルを上げたのか、敵意を向ける全員の視線がきつくなつたのを感じた。
素で泣きそうになった。

怖いものは怖いですよ、ええ。こんな考えでもしていないと、やっついてられない……というか、完全に吞まれそうだ。

「貴様、何者だ！」

「あんたたちこそ誰だよ」

隊長と思わしき男に怒鳴られたが、人に名前を尋ねるときは以下略。

とりあえず圧されたら負けだ、不敵な態度で威圧しろ。状況はまったく分からないけれど、少なくともかなり危険だということはわかる。このままじゃ終わるなら、打開策を探すしかない。その為の

時間を稼ぐには、少しでも「得体の知れない存在」として俺を認識させる必要がある。いろいろ考えるのはその後だ。

「おとなしく、その女をこちらに渡せ！」

「聞けよ人の話」

そして自分の質問が答えられてないのに次の話に行くとか、馬鹿なの？ なんなの？

まあ、俺が何者かなんていうのよりは、彼らにとってこの少女を捕らえる方が大事ということだろう。とはいえこの子を渡したところで俺が無事でいれる保証はないし……何よりちょっとそれはド外道過ぎる気がする。というか震えている可愛い女の子をそんな風に扱えるわけが無い。う、ううん、本当にどうしよう。正直詰んでる気も……。

だめだ、それでは死を待つのみだ。殺気と言うのか、物騒な感じがピリピリと肌を差している。気を取り直し、再び状況確認。今の俺に武器はない。相手は槍に、鎧。補助として剣も持っている。環境は、特に何も無い石の部屋。そして出口は相手の背中側。これだけ見ると本当に詰んだようにしか見えないな……。

だけど、そう。それでも危ない目に遭っている女の子一人守れないなら……俺が武道や格闘技をやってきた意味が無い。それは俺の半生を否定するもので。そんな事を認めるわけにはいかなかった。

思い出せ……『目に見えるものだけが全てとは限らない』。師匠の言葉だ。

(ねね、ちょっとちょっと。言葉通じる?)

(は、はい。なんですか?)

後ろの可愛い子

いや、この状況でさっきから何を、と言

われるかもしれないが、本当に可愛いのだ、この子。服こそ少し汚れているが、ふわふわした綿菓子を連想させる長い茶色の髪と、気品溢れる優しく儂げな風貌。若干潤んだ琥珀色の瞳が俺の心臓をスナイプショット。正直詩織レベルの美少女である。タイプは違うけど、世界にはまだまだ俺の知らない美しいものが眠っているようだ。よきかなよきかな。

それは置いておいて、その子とぼそぼそ会話する。相手はなにやら内輪で話し始めたようで、こちらへの注意が疎かになっているから、会話にはうってつけの機会だ。敵を前にして一体何をしているのやら、見当も付かない。いや、こちらとしては有難いけれど。

(俺たちの背中側の壁って、どう?)

(えっと、石の、普通の壁です)

(ヒビとが入ってたり、色が変わってたりしない?)

(えっと、色が少し変わってて、ヒビも入ってます……)

OK、運が良いことに目に見えるもので希望が見えてきたぞ。可能性が無いわけじゃない。例え無くても、作り出して見せる。かなり賭けになるけど……だからどうした。

(俺が合図したら、その壁に向かって走って)

(え、はい!? わ、わかりました……)

やらないよりはましだしね。とにかく行動しなければ活路は見出せない。成功しなかったら……これは考えないようにしよう。

さて、やってみますか。

足元に落ちていた、拳大の石 この部屋は少し崩れていて、
出口が出来ているわけではないが、壁の破片は落ちている
を武装軍団に気付かれないように拾った。

軍団はいまだ懸賞金か何かの配分を話しているのか、内輪で揉めている。その軍団を尻目に俺は覚悟を決めて、心の中でタイミングを測る。

失敗は許されない。チャンスは一度だけ、その一度をモノにする。もしモノに出来なかつたら……だから考えるなつてば！ 今ほとにかく生き残れ！

(カウントスタート。3……2……1！)

「ゴーーーーー！！」

合図と同時に、石を投擲。狙いは、壁に立てかけてあつた松明。

狙い通りに着弾。そして松明は落下し 兵隊の衣服に着火した。

うあ、え、ちょ、直撃させる気は無かつたよ！？ 物を目の前に落とされると、無意識に一步下がるでしょ！？ それ欲しかつただけなんです、事故だから恨まないで！

「あ、熱い熱い、消してくれえ！」

相手が着ているのは、鎧以外は単なる布の服。見たところ相手に遠距離武器は無かつた。槍の間の長さは確かに脅威だが、この距離ならいける。そもそも武装というのは機動力を落としてしまうものだ。

突然の出来事 俺自身予期しないことも起こつたので、俺も混乱の極致にあつたが に場が騒然となつた瞬間、俺も背中を向けて走り出し、

「ホアタアアアア！」

加速力と全体重を乗せた、ブー・ス・リーの真似の飛蹴りを壁の弱そうな部分に見舞う。崩れる、崩れる！ もしこれで崩れなかったら、どちらにしる詰みだ！

しかし、ここで更なる問題が発生した。

予想以上に壁が脆く（ぶっっちゃけハリボテ、紙レベルの固さだった。元々緊急脱出用のフェイクだったのだろうか）、衝突では勢いを殺してもらえなかった俺はそのまま壁を突き抜け、新たに現れた隠し通路とおぼしき通路の壁と情熱的なキスを交わしそうになる。

ファーストキスが壁と言うのはごめん被りたいので、あわてて体勢を立て直そうとして、壁の下においてあった桶を盛大に蹴飛ばしてしまった。その桶の中にはなんか入っているようだったので、必死に女の子に中身を掛けないようにあがく。

動け、動け俺の足いイ！ 空中でバタバタする人間、という珍しいものがそこに現れた。幽霊の正体見たり枯れ尾花、不審者の正体見たり自分自身。けど笑わないで欲しい。必死なんだ、うん。

なんとかその努力が実ったのか、女の子にはその液体は掛からなかった。そしてその液体は、盛大に今まで俺たちがいた部屋に飛び込んで

部屋の内部を、一気に燃え広がった炎が占めた。

.....どろどろ、こつなつた？

S i d e : ソフィア

逃げ切れなかった。絶望の中、私に向けられる殺意が実体を持つたような槍の穂先を見詰める。戦う力を持たない私は、必死に逃げて、逃げて、逃げ続けました。それでもその努力は無駄で、ついに出口の無い部屋に追い詰められてしまいました。兵隊に追い詰められた私は、まさしく絶体絶命。しれず、涙がこぼれそうになった。

頭に浮かぶのは、優しい父様と母様、屋敷の使用人、親友の姫様。
(ごめんなさい、私はここで、お別れみたいです。)

そうして、最後は公爵家の者として、誇り高く散らなければならぬと覚悟を決め、槍の穂先から視線を兵達に向けたとき

私は、「彼」が隣にいることに気付きました。

身長は、私よりは高いものの、男性としては平均程度。いや、平

均より低いかもしれない。けれど、夜の闇を凝縮したかのような、深い黒色の髪と瞳。そして、それとは対照的な白い肌。

この状況にありながら、不敵に反乱軍を見据える、覇者の雰囲気。その威厳と相反する、穏やかで優しい、木漏れ日のような雰囲気。正直に白状すると、私は生まれて初めて、人に見惚れた。外見が綺麗な方は貴族階級なら大勢いらっしゃいますが……そういうのは何かが違います。

しかしそれも束の間、呆けている私に向かって、彼は指示を出した。素性も知れないのに、不思議と信用できる彼の指示に従った私は、驚くべきものを眼にすることとなります。

裂帛の気合と共に彼が壁に飛蹴りを叩き込む。すると、壁がなんと紙のように破れ、隠し通路であろう通路が出来た。壁を、魔力も使わず破壊するその力。それに驚く私を、更なる驚愕が襲いました。とび蹴りの姿勢のまま、空中で手足を動かして巧みに体勢を整えると、彼は器用にも足で隠し通路に置いてあった桶を引っ掛けて持ち上げ、後ろにいた私に一滴もその中身を掛けることなく、桶と中身を先ほどまでいた部屋に叩き込んだ。

そして次の瞬間、今まで私たちがいた部屋に一気に炎が充満した。

それで私は理解しました、あの桶の中身は油だったのだと。

一瞬で隠し通路を見破り、それを利用できるように壁を壊す。そして、僅かなタイムラグを生じさせることも無く、蹴りの体勢のまま

ま油を部屋に叩き込み、反乱軍の一人に付いていた火種を拡大させ、反乱軍を全て戦闘不能にする。中はほぼ密閉された空間だ、燃え移るのは一瞬だろう。少なくとも、足止めとしては完璧でしょう。なんとという、洞察力と判断力。そして、力と技を兼ね備えた人間なのだろう。果たして、果たして。このような人間が存在したのでしょうか。

私は、まるで御伽噺の中の英雄に出会った気がしたのでした。

そしてその考えは間違いでなかったことを、彼はこの先証明していくこととなる。今にして思えば、これが全ての始まりだったのです。

S i d e : 銀也

結局、あのまま一瞬で火が燃え広がったのか、兵たちは追ってこなかった。その建物を出て、女の子（ソフィアというらしい。うん、名前はヨーロッパ系なのに言葉は通じるんだね。何か不思議だ）に誘導されるまま、俺は何か軍隊の野営地と思しきところに連れて来

られた。いや、さっきの兵士やソフィアの服装といいこんな光景と
いい……何時代だ？ いや、そもそもどこだよこっ。

少し宛がわれたテント（天幕と言っのだろっか）にて待機してい
ると、軽やかな足跡と共に金色の弾丸が飛び込んでソフィアにタッ
クル、もとい抱きついた。

「ああ、ソフィア、無事だったんですね！」

目の前で抱き合うソフィアと、弾丸改め金髪と藍色の目をした美
少女。この子も妙に美少女である。いや落ち着け、妙なのは俺の日
本語だ。しかしビデオカメラが無いのが悔やまれる。携帯……は、
ない。なにしろ部屋でゴロゴロしてたら俺インアンノウンフィール
ド、だったしなあ。

「本当に良かった、良くぞ無事で……」

涙を流す金髪さん。本当に嬉しそうだ。うんうん、良かったねえ。
もらい泣きはしないけど。男の子ですから、涙は見せません。意地
があんだよ、男の子には！ ……誰に言っているんだろう、俺。

「この方に助けをいただいたのです、姫様」

……ほわっつ？ ひ、姫様？ なるほど……この金髪さんはプリ
ンセスらしい。たしかに、なにかすごい気品っぽいものが漂ってい
る気がしないでもない。ソフィアも似た感じだけだ。

「そうですね、あなたが……。私の親友を救ってくださって、あり
がとつございます」

礼を言われても、俺はソフィアに着いていただけだし。むしろ、俺のほうこそ助かった。部屋がこんがり大炎上、エマーゼンシー119コールしたのは偶然だし……………。

「いえ、俺は何もしてません。むしろ、助けられたのは俺の方です。それに、王族の方が、無闇に頭を下げるべきではないと思います」

何かの本で、指導者は頭を下げるなって書いてあった気がする。とりあえず、この言葉への対応でこの子が本当に姫様なのか確かめられるかも……………。

「確かにそうですね。ですが、シエリス・シルヴィア個人としては礼を言わせてください」

決定、この人本物。良い子や……………。俺の中の姫のイメージって、こう、高飛車で、「私のために死ぬる事を光栄に思いなさい愚民ども！」って言ってる感じだったけど。こんな良い子が嘘を言っているわけが無い！

「では、その礼は、受け取っておきますね」

俺、何もしてないけどね。なんとなく、この姫は受け取るまで引き下がらない感じがしたので、一応受け取っておく。しかし、もつとこの姫とソフィアは再会を喜んでもいい気がしたので、俺は適当に野営地の見学の許可を取り、その場を去った。

空気が読める俺、カッコイイぜ。なんてね。

……いや、それはともかく、ここどこだよ？

Side：シエリス

ソフィアが無事に帰ってきた。その知らせを受けた私は、いてもたっても居られず、天幕を飛び出した。そうして見たのは、少々煤や埃に汚れながらも、目だった怪我もないソフィアの姿。反乱軍にソフィアが追われていた、と聞いたときは血の気が引いたが、こうして無事で居てくれた。それが嬉しくて、つついっい落ち着きが無い行動に（王族がああの行動は無いでしょう、私）出てしまった。

そしてひとしきり再会を喜び合ったあと、ソフィアを助けてくれたという、髪や瞳の黒と白い肌のコントラスト、中性的な顔立ちが美しい青年に礼を言った。

「いえ、俺は何もしてません。むしろ、助けられたのは、俺の方です。それに、王族の方が、無闇に頭を下げるべきではないと思います」

頭を下げる私に対して、青年はそう答えた。

明らかに彼が居なければソフィアは無事ではなかったというのに、「自分は何もしていない」という謙虚さ。公爵令嬢であるソフィアを救ったのだから、恩賞を請求することすら可能なのに。

そして、王族である私を、穏やかに諭すような発言。まるで、彼自身が王族であるかのような言葉の重さ。聞いたこともない言葉だったが、その言葉は偉人の書に記されていてもおかしくないほどの

言葉だった。だからだろうか、ひどく自然にその言葉は私の胸に落ちた。

その後しばらく彼と会話をし、彼は行く当てもない人間（というか、ここがどこかも分からないらしい。更に言うなら見たこともない服装はともかくとして、裸足で居る人間は少々何か事情があるでしょうし）らしかつたので、ソフィアも交えて話し合い、彼を保護することに決めた。仮に彼が何者であっても、親友が助けられた礼をしないのは王族としても人間としても許されることではない。

しかし本当に、彼は何者なのでしょう。どこから来てどのような人物で、何を考えているのか。会話をしても時々はつとするような事を言いもするかと思えば、少々常識はずれなことも言う。彼と言う人物がまったく掴めない。まったく分からないことだらけだけれど、それでもただ一つ思った。そしてそれはきつと、ソフィアと同じでしょう。

彼は優しくて、信じられる人なのだ。

もっとも、今はまだ 完全に信じるわけには行きませんが。

ぶろろつぐ・始まり始まり。(後書き)

はじめまして、Mikageと申します。

素人です。処女作です。文才無いです。よって駄文です。

それでも良いという方、どうぞ暇つぶしして行ってくださいませ。

第0・5話：力と現状、存在理由（前書き）

ご指摘があった、銀也君が魔法を覚えるまでと、能力判明の回です。

第0・5話：力と現状、存在理由

ソフィアを助けた次の日、俺は野営地にて彷徨っていた。そう、今俺はソフィアを見失い、当ても無く光を探す旅人と化していた、とでも言えば格好が付くだろうか。実態は単なる迷子。マイマイ。まあ、これはこれで楽しいので、よしとする。軍隊の野営地つぼいものなんてめったに見る機会はないし。今は戦時中なんだとかで、ある物は全部本物らしい。

……………いやしつかし、ここどこなんだろうね？　こんな形態の戦争をする地域がまだ残っていたのだろうか？

彷徨っていると、俺はなにやら怪しげな練習をしているらしき一団を見つけた。

話を聞く限り、どうやら新人研修？　みたいな物のようだ。新米に先達が教える。それはごくごく普通のこと、何も問題も違和感もない。

そう、その教えているものが超常現象で無いのなら。

新人とおぼしき人が目を閉じ集中し始めた数秒後、彼の前の空間が歪んだ。そして徐々に光が発生し始め、最後には30cmほどの球と化した。え、あ、何事！？

「よし、それを解き放つのだ。」

と、先輩らしき人が言うと、彼はその超常現象を開放し、

その光弾は、こちら目掛けて真っ直ぐ飛んできた。

……………え？

まさかの不意打ち。光の弾が現れるというスーパー時空に呆然とし、当然のように心構えが無かった俺が回避できるはずも無く。そのまま弾は俺に直撃し、

粒子となって霧散した。

……………あれ？ 不発弾？ なんだったの今の？ CG……………じゃないよな？

けど何だろう、何か「力」のようなものが俺の体に入ってくるのが分かった。それも含めて一体何事？ 訳が分からない。

混乱する俺そしてこちらを向いてポカンとしている二人。唐突に時間の流れが止まった。そして再び時間を動かしたのは、その二人の一言。

「ま、魔法吸収能力……………!?!」

え、何それ？ いや、魔法って、何言ってるの？

要約すると。

俺は「魔法吸収能力」なるものをもっているらしく、かなり珍しいらしい。なんでも魔道師の天敵だとか。ただ、吸収できる魔法には限界があるらしく、注意が必要とのこと。見切りを間違えれば、魔法のダメージをそのまま直接食らうらしい。

そしてどうやら、俺は莫大な魔力も持ち合わせているらしい。しかしながら

「どうやら、魔法として外部に生成する才能は無いようです……………」

哀れみの視線が痛かった。

そう、俺は、「魔法を外部に生成できない」らしい。

今のところ唯一使えそうなのは、「身体強化」のみ。これは魔力を直接体に、「内側から」作用させるので、俺にも使えるとの事。

ちようど先ほどの魔力弾を撃てるようになるまでが新人さんの課題だったらしく、そのあと先輩さんは俺に付きっ切りで「身体強化」の使い方を教えてくれた。いい人や。

通常魔力を感じるまでにかかなりの月日が掛かるらしいのだが、俺は先ほど「吸収」して魔力が体に入ってくるのを感じていたために、5回ほどの挑戦で魔力を使えるようになり、20回もする頃には「身体強化」を、ある程度の出力でなら自由自在に使えるようになっていた。

そうして収穫を手に入れた俺は、表面上は平然としながら礼を言っ
つてそこを去った。

..... はは、何の冗談だ。魔法？ そんでもって
吸収能力？ どのファンタジーだよ？ あるわけないだろう、そ
んな。。

昨日、刃を向けられて感じた恐怖とは違う感情が、胸の内を占める。眼に見えるもの全てが酷く現実感の無い、夢幻かと思える。笑い飛ばせればどれだけ良かったろう？ おかしなことを言うな、と怒鳴ればどれだけ良かったろう？ しかし昨日の体験と、そして今日の魔法。目の前で起こったことが、実際に体験したことが、

全て真実なのだとはよりも雄弁に語っていた。

「ちくしょう……」

異世界。認めたくないその事実が、俺に押し掛かる。足元がぐらつき、視界が揺らぐ。世界どころか、自分さえ希薄な夢幻に感じる。そのままその重さに抗えず。あるいは、抗おうさえしなかったのか、膝を付きそうになったところで

「ギンヤ、どうしたんですか……?」

その声が、支えてくれた。

「ソフィア……?」

「はい、私ですけど……って、どうしたんですか!？」

「え、何が……?」

「凄く顔色が悪いです……どこか具合が悪いんですか?」

心配そうな表情の中の双眸に涙を浮かべ、ソフィアが崩れそうな俺の身体を抱きとめた。暖かく柔らかい。波打つ茶色の柔らかな髪から、芳しい香りがした。彼女はここにいるのだと、五感全てが認識した。俺にとってこの世界がどれだけ希薄でも。今この瞬間、この少女だけは確かな現実だった。

「ソフィア……」

「はい、なんですか?」

酷く心配そうな顔で、俺を覗き込む少女。ああ全く、俺はこの子に何を言おうとしているのか……。

「ソフィアは、ここにいるんだよね？」

その、あまりにもおかしな問い。何を馬鹿なことを言っている、と一笑に付されてもおかしくないその問いに、ソフィアは何か感じるところがあったのだろうか。クスリとも笑うことなく、真顔で俺を見詰めて、

「はい、私はここに居ますよ」

そう答えてくれた。

そしてそれが

今の俺が一番欲しかった答えだった。

嗚呼。

神様とやらがいるとするなら、何故俺をこの世界に引っ張り込んだ？

何故俺だった。何故いきなり命の危険を味あわせた。何故助けた。何故異世界なのだと認識させた。何故

俺とこの少女を引き合わせたのだ。

話を聞いてしまった。戦時中なのだと。戦なのだと、命を奪い合うのだと。倫理も道徳もその瞬間には無いのだと。

無視すればよかった。俺には関係ないと、陣を出て行ってしまえばよかった。引止めはされないだろう、俺は無関係なのだから。命を賭ける、そんな場所に俺が居る必要は無いのに。

出会ってしまった。出会ってしまったのだ。よりによって、片方の陣営の人間に。戦う力を持たない、優しく、そして決して戦から逃れられない地位の少女に。何かあったときにこの子は暴虐と陵辱の限りを尽くされてもおかしくは無い、そんな存在なのだ。そんな無力で危険な少女が　　その少女こそがよりによって、俺の世界での存在意義になってしまったのだ。その少女こそがよりによって、俺に生の実感を与えてくれたのだ。

吊り橋効果。刷り込み。知っているとも。だけどそれでも、敵も味方も分からぬこの状況で、唯一の実感なんだ。俺はここに居て、この世界が確かなものだとは証明するのは……この少女以外に無いのだ。俺が俺であり続けるには、確かな俺であるためには。

この少女を守り抜かなければならない。この少女の傍に居なければいけない。そのためには戦に赴き、命を掛け続けるしかないのだ。そうやって、この子を守り続けるしかないのだ。

それを理解した俺は、もう何も出来なかった。もう自身の死の危険から目を逸らすことは、この子の危険から目を逸らすことは、俺でなくなることに同義なのだ、悟ってしまったから。

(畜生……………)

分かってしまった。分かってしまったのだ。事実上俺に選択肢は無く、それが茨の道であることを。縋り付くように、助けを求めるように俺はソフィアを強く抱き返し

涙が一滴、頬を伝った。

S i d e : ソフィア

何がなんだか分からない。それが、ギンヤの状態を見た私の正直な感想でした。

顔は青褪め、足元はおぼつかない。その表情は悲壮感に溢れ、ま

るで親と永遠に離別した迷子のよう。昨日見た強く大きなギンヤとは、全くかけ離れた姿。けれども不思議とそれに違和感を感じませんでした。強いギンヤと弱いギンヤ、私はその両方を見たに過ぎない……驚くほど冷静に、私は目の前の光景をそう受け止めました。今にも倒れそうなギンヤを抱きとめる。男性に触れるなど滅多に在りませんし、そういう意味では緊張してもおかしくなかったのですが　　そんな気は欠片も起きませんでした。非常事態だったからでしょうか？　支えなければならぬ、その衝動に突き動かされ、私はギンヤを抱きとめていました。

ギンヤは男性で、しかも服から露出した前腕を見る限り、健康かつ筋肉質な男性です。なのにそのときのギンヤは、酷く軽く感じました。まるでよりどころの無い、ここに存在していないような

そんな不吉な感覚。

「ソフィアは、ここにいるんだよね？」

突如として放たれたその問いに、私は胸が高鳴りました。とはいってもそれは心地よいものではありません。今私はギンヤをここに居ないように感じていたのですから　　ギンヤと私が違う所に居るのなら、ギンヤにとっても私をここに居ないように感じているのかもしれない。俯いたギンヤの表情は、こちらからは分かりません。しかし私の腕と胸の中で感じた、ギンヤの体のかすかな震えを感じたとき、自然と言葉は流れ出ていました。

「はい、私はここに居ますよ」

それは救いになったのだろうか　　そうであれば良いな。その私の言葉を聞いたギンヤは、痛いほどに私を抱き返し。その頬を、透明な涙が伝いました。その、一種弱さの象徴である涙を見て、決してギンヤを情けないと思うことはありませんでした。

今のギンヤが泣くのは、何故か必要とも必然とも感じましたし、
何より 私も原因不明の感情で、涙腺を決壊させていたので
すから。

第0・5話：力と現状、存在理由（後書き）

心情描写ってやっぱり難しいです。

第1話・戦（前書き）

戦闘描写に違和感や、こんなうまくいくはずないだろ、と思われる方がいるかと思われます。申し訳ありません、精進します。

第1話・戦

大気を裂いて飛来した矢が頬を掠めていった。矢が掠めたその部分にだけ、焼けたような痛みが走る。血も出ているようだ……出血程度で済んだことを感謝しなければならぬだろう。それに、この痛みは確かな痛みだ。この痛みすらも　　この世界が確かに存在し、俺が確かにここに居ることの証なのだから。

俺は今戦場に居る。比喻表現でもなんでもなく、文字通りの「戦場」である。少なくとも昨日の午前中までは、ただの普通の学生だった俺が。

しかし、それについて今考えても仕方ない。今生き残ることが最優先課題だ。

ここで死んでしまえば、それでおしまいなのだから。

言い訳も弁解も不要。自分の為に誰かを殺す。生き残りたいから相手を殺す。自分の人生の為に、誰かの人生を終わらせる。だから振り向くことも止まることもない。その全てを背負わなければならない。　　そうやって俺は生きていくと　　そう決めた。

だが、こんな覚悟は、本当に脆い物だった。上辺だけの覚悟でしかなかった。それを俺が思い知るのにはいまま少しの時間を必要とした。そう　　この戦場に敵が居なくなるまで。

S i d e : ソフイア

反乱軍が体勢を立て直し、こちらに攻め込んできました。少しでもこちらの勢いを削ごうとしているのでしょうか？ 姫様いわく、あまり賢い戦法ではないらしいですが……相手の中に負傷兵もいるという報告を小耳に挟んだことによつて、私も理解できました。

現在、王国軍と反乱軍が真っ向から衝突しています。戦う力を持たない私は、陣でお留守番です。そもそも、本来ここに私はいるべき人間ではないのですが、つい戦場に出る姫様が心配で、荷物に隠れて付いてきてしまいました。

その物資が襲われ、そのせいで昨日命を落としかけましたが

図々しいことを承知で言えば、それによつてギンヤと会えたの

も事実です。そのギンヤ、私の命を助けてくれた彼は、戦場に出ています。

まったく助ける義理など無い私を救ってくれた優しい彼は、再び必要の無い危険を冒しています。

そんな彼に対し私が出ることは、ただ祈ることだけです。昨日見たあの強さと、そして相反するような弱さ。後者に関しては少々というかかなり気になっているのですが……。

ただ、不思議と、彼は生きて帰って来てくれる気がします。それはきつと、彼の持つ「魔法吸収能力」のおかげではなく。その身に内包する、膨大な魔力のおかげでもなく。

どこか彼自身が、信じられる雰囲気を持っているのです。だから私は彼の帰還を信じますし、また彼が私たちに害をなす存在ではないとも信じています。

私は彼の過去を知りません。具体的な人柄も、家族構成も、好きなものも嫌いなものも知りません。私はまったく彼について無知です。それなのに、信じられる気がするという理由で信じるなど、馬鹿げた事と言われるかも知れません。あるいは公爵家の者としては軽率だと批判される事もあるでしょう。

しかし、それは彼も同じなのです。彼だって私のことなど、私たちのことなど何も知らないでしょう。それなのに、命を掛けて私たちの為に戦ってくれている。その信頼に対しては、信頼で答えたいんです。公爵家の者としては、権力に携わる人間としては、間違っていると思います。けれどきつと、これは悪いことではない。そう信じています。

正しい選択と良い選択は、必ずしも同じではないはずですから。

S i d e : シェリス

本陣にいて指示を出す私は、常にギンヤの動向を確認させていました。

彼が心配なのもありますが……最大の理由は監視のためです。個人は彼を信じていますが、王女としてはそれでは駄目なのです。そう軽々と、人を懐に入れるわけにはいかない。

裏切り以外の最悪の場合も考えなければなりません……。人は傷つくものです。傷つかない人など居ない。例えどれほど、あらゆる意味で強くても、傷つかない人間などいません。それは彼も同様です。いかに彼が強く、類稀な「魔法吸収能力」を持っていたとしても。

魔法吸収能力とは、文字通り「魔法を吸収する能力」。しかし無敵というわけではなく、「吸収できる魔法には限界がある」のです。彼は、「吸収した魔法を己の魔力に変換できる」のですが、一定以上の魔法は吸収できず、直接ダメージを受けます。

たとえば、彼の能力の限界を100とします。100の魔法は吸収できても、110の魔法は吸収できない。そして、その場合、10のダメージを受けるのではなく、110のダメージをそのまま受けることとなります。

そして彼は、膨大な魔力を持っていますが、魔法はほとんど使えない。できるのは、自身の身体能力を向上させることと、自身の腕と足に魔力を纏うことです。

つまり、その点において、やはり彼も無敵ではない。士気向上の為にわざと陣中にソフィアの1件を広めさせたので

逆に彼

が討たれた場合、士気としてはかなり痛手を被ることになるでしょう。

その彼が……もちろん強いことは分かっているのですが戦場の最前線にいます。

誰に強要されたわけでもなく、ただ私たちや兵士のために。「公爵令嬢を絶体絶命の危機から救い出した英雄と共に戦える」と、兵を鼓舞しながら。

この時、私は久しぶりに、総大将というものの責務に縛られることを煩わしく思いました。それほどまでにこちらのために尽くしてくれる人を、私自身が身を持って助けることが出来ないのですから。そして私は人を疑う、と言う辛さにも慣れなければなりません。

いつか遠くない未来に、国を背負う者として。だからこそ、会って間もない、それこそ彼にとって貸しはあっても借りは無い私たちに對して、命すら賭して戦ってくれる彼を疑うのです。

その責務から目を逸らす訳ではないですが……本当に、ままならないものです。けれど、それでも私はそれを貫く。

私がすべきは良い選択ではなく、正しい選択なのですから。

Side: 銀也

さて、俺は自分の能力で、俺無双が出来るかとも思っていたが…。やっぱりそんなに甘くない。上級の魔法攻撃や物理攻撃に対してはまったく耐性が無いのだから。

とりあえず身体強化で頑張っているが、真剣にさらされたのは初めて。まあ昨日も槍には晒されたけど。なので、基本チキンに戦っている。具体的には、戦うと見せかけて距離を開けたり、意味も無く左右にステップしてみたり。

この俺の行動は、意表をつくという意味で何気なく攪乱には役立っているようだ。良かった良かった。

そうやって自分なりに必死に戦っていると、突然戦場の一角で轟音と悲鳴が聞こえた。ん、何だ？

思わずそちらを見ると、やぐらが聳え立っていた。その上にいたのは、ローブを着た男。外見上は魔法使いだ。その男がなにやらぶつぶつ言って杖を振ると、恐らくは先ほどの轟音の正体である雷が、こちら側の兵士たちに落ちた。

(おいおい、あれはないだろ……)

あれが戦闘用の魔法か、と肝を冷やした。あれは吸収できそうに無い、と俺の理性と本能が同時に警告を発した。理屈で考えても、雷って確か滅茶苦茶な強さのエネルギー持ってるらしいし。だから今でも雷は利用できない……って誰かが言ってたっけ。まあいいや、あれに対抗するにはどうしたらいいんだろう？ とりあえず近くの

兵隊さんに……。

そして俺は、自身の状況に驚愕した。

あれ？

あれ？

あれれ？

中に……じゃなかった、俺の近くに味方が誰もいませんよ？

なにこれ、皆逃げてるの？ 俺は哀れな生贄とされたの？ 哀れな子羊なの？ こんがり焼けた哀れな子羊の肉が出荷されるよ？ 美味しい肉料理になるよ？ ジンギスカンだよ？ 良いの？ それで良いの？

戸惑う俺と、やぐらの上の魔法使いの目が合った。しかし目と目が合った瞬間に恋に落ちる、なんて事はなく。にやり、と男はこちらに向かい笑うと、再び雷を放とうとした。

この場合の目標は、当然俺ですよね……って、やばいやばいやばい。あれは死ぬ。軽く死ぬ。間違いなくジンギスカンにされる。羊肉は大好物だけど、俺が焼肉になる趣味は無い。

（武器！ 武器！ ああえつと、ああもうこれでいいや！）

人生で2回目の命の危険に晒され本気でパニックだった俺は、最後の足掻きとばかりに、足元に落ちていた剣を身体強化してぶん投げた。せめて注意をそれに引き付けて狙いを外せればと思っただが……しか

し相手のほうが速かった。

無慈悲にも魔法は発動。ここまでか、と焼肉になることを覚悟した俺の目に映ったのは、迫り来る死ではなく雷が俺の投げた剣に当たる場面。

そしてその、身体強化によって威力を増した俺の剣は、勢いを殺されること無く相手のやぐらに直撃。

どつという訳かやぐらは崩れ、魔法使いは戦闘不能になった。

……なんで？

さすがにやぐらを壊せる威力は、なかったと思うんだけど。

まあ、助かったから良いか……。

なににせよ、命あつての物種だからね。

そう……敵の命を奪つても、生き残ればよいのだ。

そんな事を俺は、自分の周りにいくつも転がるヒトダツタモノを直視せずに心中で呟いた。

Side…とある王国軍兵士

見たことのない衣服を纏った、俺たちよりも遙かに年下な、姫様と同じ年くらいの少年が、戦場を駆ける。彼は昨日、ライトアーシエント公爵令嬢を絶体絶命の危機から、無傷で救い出した英雄らしい。

その戦いは、見事というほかない。

相手を変幻自在な動きで翻弄し隙を作り、そして味方に討たせる。お膳立てはしておいて、手柄は譲る。なんとも誇り高い姿に、前線の俺たちは勇気付けられた。

そして彼の働きでこちらが勢いづいた矢先に、「特務部隊」の魔法使いが現れた。

奴は雷を放ち、瞬間にこちらの兵士を殺して行く。

戦いが始まる前に、全軍に通達された命令。特務部隊の魔法使いは、普通の人間では勝てない。出てきたら退却せよ。それが、命令で。俺たちは多くの仲間を殺された恨みを抱えながら、撤退した。自身の無力を痛感すると同時に、殺し合いから離れられるという安心感を感じて。

だというのに。

あの、黒髪の少年は、退かなかった。

おい、何をしているんだ！ 上位の魔法使いの強さを知らないわけではないだろう！？

奴らは歩く暴力の塊で、魔法の使えない人間は、魔法使いには絶対に勝てない。それが戦場の、そして世界の常識だ。

死ぬつもりか、やめろ、退いて下さい、と俺も、俺と共に戦っていた兵も叫ぶ。

あの英雄を、こんなところで失うわけではいかない。玉砕しても守り通そうと、俺たちが覚悟を固めたとき。

俺たちは、ありえないものを見た。

彼は俺たちで到底測れる人物ではないのだと、彼は戦場に居た全員に見せ付けた。

雷の魔法を、剣を投げることによって避雷針代わりにして防ぐ。そしてそのまま剣は、やぐらの弱い部分、縄で組んである結び目に衝突。

身体強化によって、かなりの威力を秘めた剣は、その結び目を容易く切断し、結果やぐらは崩れ、魔法使いは戦闘不能になった。

体が震えた。魂が奮えた。あれが英雄かと、戦慄した。その彼の一人舞台に圧倒された俺たちは、しばらくの間、そこから動くことが出来なかった。

特務魔道師を失い、我先に逃げ出す反乱軍。

その背を、英雄は、不敵な笑みを浮かべて見送った。背中を向けた相手に向ける拳はない、とその背中で語って。

S i d e : シェリス

雷が戦場に落ちた。その威力から、私は特務魔道師が出てきたと判断した。

こうなることは予測して、全軍にあらかじめ特務魔道師が出てきたら退却するように伝えてある。

こちらをルーミイが見た。その見つめてくる二つの紅玉に、私は頷いた。近衛隊長のルーミイか、魔道部隊の隊長であるガルフぐらいしか、特務魔道師の相手は出来ない。

だからこそ前線の兵士達を交代させ、彼女達のどちらかを向かわせる手筈を整えていたのに。特務魔道師が乗っていたであろうやぐらは、唐突に一瞬で崩壊した。そして最大戦力を失った反乱軍は、一目散に逃げて行く。

「いったい何が……………?」

ルーミイが眉をひそめる。確かに不可解だ。とにかく状況を把握することが最優先事項だと感じた私は直ぐに、状況を調べさせた。すると、あれをやったのはギンヤだということが判った。それも、聞いたこともない、大胆かつ繊細な戦術で。

最初私たちは、伝令が何を言っているのか理解できなかった。そして気付いたときには、畏怖を抱いていた。

「姫様、我らは、とんでもない人物に出会ったのかもしれない……………」

ルーミイの声が震えていた。私もおそらく声を出せばそうだっただろう。誰が想像できるものか。

魔法使い、それも最上級の魔法使いに、身体強化のみで人間が勝利を収めるなど。

剣を投擲し、やぐらの小さな弱点を貫く。そのようなことが出来る人間がいるなど、想像したことも無かった。

震えそうになる手を、拳を作って握り締めることで制御する。頭の中では、その戦力を歓迎する私と、彼が叛旗を翻した場合の抹消手段を考えなければならぬと叫ぶ私が戦っていた。

そんな私の葛藤をよそに、少ししてこちらに向かってギンヤが歩いてきた。前線の兵と共に、笑いあいながら。その無邪気な笑みは、およそこの戦場には似つかわしくないもので、また同時にあれほどの事を行える戦闘能力を持つ人間とは思えない。

果たしてどれ程の鍛錬と実戦をこなせば、あのようになれるのだろう。私は彼の実力を培わせた、彼の武の経過に思いを馳せた。そして同時に、彼の自由をどうやって縛るかと言うことも、驚くほど冷静に考えはじめていた。

いやー、死ぬかと思っただけ、本当に。

生の実感をかみ締めながら、俺は味方の兵士さんたちと陣地に帰った。

あ、ちなみに戻った俺を待ち受けてるのは、ソフィアのハグでした。

泣きながら、良かった、良かった、と言って抱きついてくる絶世の美少女。柔らかい感触と温かい体温、良い匂いがたまりません。

あー、このためならもう一回戦場に出てもいいかなー、なんて健全な青年である俺は思った。そこ、変態とかいうな。可愛い子に抱きつかれて喜ばない男はいない筈だ！……………と思う。いや、断定は出来ないけどさ。

それにしても周りの視線が生暖かい。ソフィアは俺の胸に顔をうずめたまま未だ泣いているし、個人的にもこの感触を手放すのは惜しい。というわけで、周りからの情報はシャットアウトすることにしました。

とりあえず、今は生の実感と、この感触を堪能しよう。

……………だから。だから止まれよ、俺の体の震え。こんなに震えてちゃ……………ソフィアに気付かれるだろ？

その後、俺は天幕に戻った。ソフィアはシエリス様のところに行っている。良かった。………こんな状態を、見せられるものではない。少なくとも、今はまだ。

「はは、は……」

体が震えている。人を殺した 間接的になら、数え切れないほどに。そして直接にも、俺は他者に手を下したのだ。

鮮血と慟哭が溢れかえっていた。日常の喧嘩など生易しいものではなく、戦は人が獣となる瞬間だった。誰も彼もが生き残るために、自身の攻撃性を剥き出しにして傷つけあっていた。俺は生きたい、お前は死ねと。

「っ……………！」

震える拳。そこに、投げるために握り締めた剣の感触が残っている。そしてその握った剣により、俺は 1人の人生を終わらせた。もうそれなりの時間がその瞬間からは経っているというのに

……その剣を握った感触が拭えない。

あの人に家族は居たのだろうか？ 子供は？ 妻は？ 大切な人たちが……彼が死んだら悲しむ人たちが、一体どれほど居たのだろうか。

（お前が死ぬべきだったんじゃないのか？）

もう一人の俺が、内側から囁いた。

（そもそも、帰る手段だって存在するか分からないのに……お前は生き残る意味があったのか？）

うるさい。

（お前が死んだところで、誰が悲しむんだろうね？ こんな

）

うるさい。

（こんな、ヒトゴロシに……）

うるさい

！

地面に拳を叩き付けた。地面が少し陥没した。また振り下ろす。

何度も。何度も。何度も。何度も。

何度叩いたのか。気付けば拳から血が噴出していた。……それがどうした？ こんなもの、俺が傷つけた人たちの出血量に比べれば。

そんなことを頭の片隅で考えながら、延々と地面を叩き続けた。理由など分らない。ただ衝動と激情のままに　　俺は拳を振り下ろし続けた。新たにこみ上げてきた吐き気を抑えながら。自分の体から、錆びた鉄の臭いが漂ってくるようにも感じるようになってきた。

天幕の中には、拳を叩きつける音だけが響いていた。

……どれだけ経ったのか？　既に拳は両方とも裂け、鮮血がただくと流れ出ていた。

痛みを感じない。痛いはずなのに……痛みが無い。いくら人殺しでも、神経はある筈なのに。意識せずに笑ってしまう。真つ当な心はおるか、ついに神経まで無くなったか？　いよいよ人外染みて来たな……。ああそうだ、もう人間じゃない。人を殺してしまえば、1つの命を背負ってしまえば　　永遠に、解放されることは無い。もうその時点で、人ではいられない。

……虚しい。生の実感を得るために、ソフィアを守るために戦おうとしたのに……得られたものは、俺が今までの俺で亡くなる感覚。人を辞めた感覚。結局、そう　　星宮銀也は死んだのだ。

握りしめた両の拳。これは人を傷つけるためのもの。人を傷つけたもの。流れ出る鮮血は俺の物か。それとも、俺が傷つけた人々の

「ギンヤー！」

天幕の中に、今一番聞きたくない声が響いた。遂に見られてしまったかと思うのと同時に、見られないわけが無いと、俺はどこか冷静に受け止めてもいた。

「ギンヤ、こんな……どうしたんですか!？」

駆け寄って俺の両手にハンカチを当て、必死に止血しようとするソフィア。それでも血は止まらない。止められない。

だってそれは俺の血じゃないから。俺が傷つけた人の血だから。どれだけ拭いても拭っても、それが消えるなんてことは有り得ない。あっではいけない。

「良いよ、ソフィア……」

「良くないです!　なんで、こんな……!」

「良いんだよ、ソフィア」

何故ですか、と睨むような涙目でソフィアが俺を見た。

「それは消えないよ……それは俺が殺した人の流した血だ」

その一言で、聡明な少女は理解してしまった。理解せざるを得なかった。

少年にとっては自分の存在を守るために、少女にとっては少女やその仲間を守るために。理由はどうあれ、結果的に少女とその仲間を助けた目の前の少年は 罪を背負ってしまったのだと。罪を自覚してしまったのだと。

自らが、少年に罪を背負わせてしまったのだと。

それに気付いたソフィアには、出来ることは一つしかなかった。

「ごめん、なさい……」

最初は、掠れるような細かい声。

「……え？」

「ごめん、なさい……………」

「何で…………？」

「ごめん、なさい……………！」

「違う、君が泣く必要なんて無い。これは、俺の ……」

「ごめんなさい ……！！」

ソフィアは泣いた。泣き続けた。目の前の少年への申し訳なさと、泣かない目の前の少年の代わりに泣いた。

どうして、こんなにも優しいのか。どうしてこんなにも強いのか。

彼は、無意識に理解してしまっている。無意識に封じてしまっている。ギンヤは後悔と死者への懺悔の気持ちで、誰よりも泣きたいはずなのに、それを封じてしまっている。

どんなに辛くても、悲しくても、泣きたくても 自分にはその資格が無いと、勘違いしているのだ。

そして、もう一点。彼は生き残るために、そして自分達を守るために戦ったのだ。殺人に快楽を得ているわけでも、好き好んで殺したわけでもない。なのに、自分を許さない。その強さが……ソフィアには酷く気高く、また悲しい強さを感じた。

「ギンヤ……貴方は、後悔していますか？」

「……それは、何に對して？」

「殺したことです」

「そりゃあね……」

「そうですね」

それはそうだろう。

「……では、貴方がその人たちを殺したことを無かったことに出来るとして

その代わり私や姫様、こちらの兵士が死ぬとしたら……

どうですか？」

これは、酷く卑怯な問い。そしてある意味では、論点のすり替え。しかしそれを解った上で、ソフィアはそれを口にした。

「それは……」

ギンヤは言葉に詰まった。それはそうだ、そんな選択肢を突きつけられてしまったら、答えられないだろう。

「きつと、そういうことなんだと思います」

そう言ってソフィアは、悲しげに、しかし暖かく微笑んだ。

「論点のすり替えかもしれません。私は人を殺したことが無いから……貴方の苦悩も、きつと完全に理解することは出来ないんだと思います。ですけど……ですけど唯一つの事は確かに言えます」

ソフィアはその胸に、動けないギンヤを抱き寄せて、

「ありがとうございます。貴方のおかげで、私は今生きています」

そんな言葉を、口にした。

「　　っ」

それは、人殺しに対しての感謝の言葉だった。自分が生き残るために、そして守りたい人を守るためという言い訳によって命を奪った人間に対する　　その身が殺人者であることを全て受け入れた上での、感謝の言葉だった。そんな言葉を掛けられたら、また、その少女の存在を昨日のように実感してしまったら

「　　ッ！！」

銀也の胸に熱いものが込み上げてきた。感謝の言葉と守り通した存在の実感だけで、人を殺したことへの罪悪感や後悔が消えたわけ

ではない。だけど、それは銀也が自らの心に嵌めた枷に輝を入れるには十分な言葉と、存在感だった。

体が震え、涙腺が緩む。泣いてはいけな、そう思いはしても…人間は弱い。決意は揺らいでしまうものだ。

そして銀也の心と体の震えは、それを抱きしめているソフィアにも伝わる。そして人一倍優しく、また繊細で敏感なソフィアがそれに気付かないはずも無く

「泣いてください、ギンヤ」

ソフィアは優しく

また暖かく、止めを刺した。

全ての葛藤が消えたわけではない。全ての後悔や罪悪感が消えたわけではない。きつとまた人を殺す度、俺は悩むだろう。そして苦しんで、無様な姿を晒すだろう。

だけど……そう。

俺は人殺しだ。それは一生消えない罪で、それを背負って生きていかなければならない。それはきつと苦しく辛い道だ。

だけどそれでも。血に汚れた自分の拳でも、罪に塗れた自分でも

誰かの笑顔を守ることは出来るのだろう。

俺は、自分のために人殺しと言う最大の禁忌を犯した、醜悪な人間だ。それは否定しないし、出来ない。けれど

そう、けれど。

綺麗なままで居ようとして、戦うことから、その罪から逃げて

いか。

その結果、失ってしまうよりは、良いのではな

覚悟の内容自体は、戦場に立つ前の脆弱なものと一緒に。誰かを守るためだとか、生き残るためだとか。それ自体は一緒に、けれど

……。

実際に実感した。自分が血に汚れることで、ソフィアを

誰かを守るのだと。そしてそれがどれだけ自分にとって救いになるのかを。それを知ってしまったから。

それを胸に、また立ち上がる。きつとまた悩んで、苦しんで、折れて……進歩なんて無いのかもしれないけど。

そしたらまた、何度でも立ち上がろう。

俺は弱いから。俺たち（人間）は弱いから
ないことなんて、きつと出来ない。

折れ

だけど、折れたらまた立ち直ればいい。膝を付いても、また立ち上がればいい。

不屈とは、決して屈しないこと。俺にはそれは出来ない。俺は何度でも屈するのだろう。

だけどそこで屈したままでは絶対に居ない。屈したら立ち上がってみせる。何度でも、何度でも、何度でも何度でも何度でも何度も繰り返して。

何度でも立ち上がって、また立ち向かって。苦しんで、無様に泣いて。それでも逃げずに立ち向かい、目を逸らさずに正面から罪に挑んで、折れて立ち直って。それを繰り返して

そして必ず守り抜く。そう、それだけは絶対に譲らない。その決意を胸に、俺は戦う。戦って、戦い続ける
守り通す。

だから……だから。

ソフィアには、傷一つつけさせない。

今は泣く少年と。それを抱きしめる少女と。その少年の胸に秘めた決意を……天幕から覗く月明かりだけが見守っていた。

第1話・戦（後書き）

至って普通の人間です、主人公。屈さず曲がらずはできません。それを理解したうえで、進んでいく子です。うまく書けるよう頑張ります。

第2話：要塞にて（前書き）

うづむ、自然に勘違いさせることが難しい……。
文才が欲しい、そして精進が足りない。

第2話：要塞にて

初めての戦闘が終了した後、俺たちは拠点……というか近くの城に移動した。なんでもここは、防衛には最も適した場所なんだとか。内側から開けられない限りは無敵、とは近くの兵隊さん談だ。しかしなぜ皆して俺に敬語を使うのだろう？俺はそんなに敬われることをした気がしないのだが……むしろ年上の人たちに敬語を使われるという感じたことの無い居心地の悪さが地味に辛い。

そして城に入ると直ぐにシエリス様に呼ばれ、近衛隊長のルーミイ、魔道師隊長のガルフさんを紹介された。ルーミイは昨日の戦場に居たらしい。見かけた記憶は無かった。

ルーミイは腰ほどまでの銀髪と赤眼という、超絶クールビューティーな外見で、なんとというか……素晴らしい母性の持ち主だった。俺が見た中では、過去最大か……？

ガルフさんは茶色の髪の、あんな魔道師じゃなくて戦士だろ、という程に屈強な肉体を持つ中年の男性だった。実働部隊のトップは美女とナイスミドル。この国は、美形でないと上には上がれない、といった風潮でもあるのではなからうか。

くっそう、イケメンはもげる！美人は大歓迎だけどね！

Side:ルーミー

私は、かの「英雄」と対面した。

初対面でソフィア様とシエリス様が心を許したという。もっともシエリス様は完全には許していない、というか王女としては警戒しているようだが……なるほど、たしかにこう会ってみると、どこか信頼できてしまう雰囲気を持っている。

しかし、私は近衛隊長。姫様をお守りする最後の盾であり剣だ。もし彼が何か、姫様たちに害を成そうとする存在だったとしたら……。

だから、私はまだ彼を信じてはいけない。例え本人にその気がなくても、大きな力というものは、それだけで危険なのだから。シエリス様も、王女としても個人としても、信じたいというのが正直なお気持ちだろうが……。

「貴方がホシミヤ殿か。お初にお目にかかる。私は近衛隊長の、ルーミー・シエスリンバットだ。ルーミーと呼んでくれ」

「これはご丁寧に。既にご存知らしいですが、私はギンヤ・ホシミヤと申します。」

ギンヤ、とでも気軽に呼んでいただければ」

物腰の柔らかい、礼儀正しい青年。その辺の平民とはまったく違うその気品。

黒い髪と瞳、そして白い肌、ともすれば少女にさえ見えるかもしれない顔立ち。……それは言いすぎか？ 童顔ゆえにそう見えるのかもかもしれない。若干私やシエリス様より年下、ソフィア様と同年くらいと見える。そのようなある意味では弱い　　というか、闘う力を持たない　　ように見える外見と相反するような強大な戦闘力は、昨日見たとおりだ。

その相反する要素を持つ彼が、私にはどこかの御伽噺から抜け出した存在を思わせた。しかし今は、それが反って不気味に思えて、私の警戒心を強めることとなった。

「しかし、ここは何処……というか、要塞か何かですか？」

「まあ、要塞といえはそうだな。ここは地形的に最も防衛に適している場所だ。こちらから打って出ない限りは、まず破られないだろう。無論、油断は禁物だがな」

なるほど、と言ってギンヤは一つ頷いた。あまり情報を与えるわけには行かないのは心苦しいが、仕方が無い。

Side:銀也

ルーミィいわく、ここは安全らしい。ならばやるべき事は一つ。

探 検 で し よ う
!

初めて見るヨーロッパ風の、それも本物の城。テンションあがってきたあーっ……!

「すげえや」

適当にぶらぶらと探索していると、少々異質な一室にたどり着いた。いしつないしつ。……寒い。それはそれとして……ここは宝物庫だろうか。槍に剣、盾に弓。実際に昨日戦場で一杯見た武器とは違う、装飾があつたりとか、刃の煌きが違うものが集まっていた。なんかこの門番さんが、気に入ったものがあつたら持って行って良いと言ってくれた。せっかくなので投擲用の短刀を何本か貰ってみる。本来は剣とか槍とか持っていくのがベストかもしれないが、俺はあまり武器は使えないし、何より人に対して刃物やら鈍器やらを直接叩き込むのは気が引ける。人を殺しておいて今更何を、と自嘲の念もある。ただその点投擲した短刀は、致命傷になりにくいしね。……好き好んで殺したいわけじゃない。

さて、そのためにも練習だ！

……え、ちょ、何故に？

………一つ聞きたいんだ。

俺は何か神様に恨まれているのかな？

………どうして、こうなった？

S i d e : ソフィア

私は、要塞の中を、ギンヤを探して歩いていた。途中でルーミイと合ったので、一緒に談笑しながら歩く。

「ルーミイの目から見て、ギンヤはどうでしたか？」

「凄い、の一言に尽きますね。一見は、普通………とまでは言えないかもしれませんが、戦う人間には見えません。あれほどの実力を持ちながら、その力を巧妙に隠している。いったいどれ程の鍛錬や経験を積みめば、あの境地に達せられるのか………」

ルーミイもそう思いましたか。つい、2人で暗くなる。あのよう

なやましい微笑を浮かべている彼は、力を得るために等価交換の原則に則って何を犠牲にしたのでしょうか。いや、それは詮索するものではない。むしろ今最大の問題は、その力がこちらに向いた場合どうするかだ。

……………いや。

それはルーミィやシェリス様を考えることでしょうか、と自身を叱った。脳裏に昨日苦しんでいたギンヤの姿が浮かぶ。あれほどの苦悩を抱えまでも私たちを守るために戦ってくれた存在を、私はもう疑いません。疑うことは大事なことですけど、私までそんな風に彼を見てしまったら、彼に申し訳ないです。それにきつと昨日のギンヤの姿を見たら、ルーミィもシェリス様も警戒すべき人物ではないことが分かるでしょう。私はもう彼を疑わない。だから少し我侭ですけど、それは私よりはるかに優秀な姫様やルーミィに任せましょう。実際、目の前のルーミィはそのことを考えているのでしょう。そのまま沈黙を2人で保ったまま、宝物庫の前に着いた。

「すみません、ギンヤを見かけませんでしたか？」

「ラ、ライトアーシエントのお嬢様、近衛隊長様！？」

「ああ、そうかしこまらないでくれ」

ルーミィがおじいさんに苦笑する。

「ホシミヤ殿なら、短刀をいくつか持って、投擲の鍛錬をしてくと……………」

既にギンヤの名は全軍に知れ渡っている。宝物庫の番人のおじいさんさえ知っているのだ。

「ふむ。なれば、錬兵場にでもいるかな。ありがとう」

そのあと私達は、練兵場に向かった。

「え……………」

練兵場についた私たちの目の前には、理解不能な光景が広がっていた。それはそうだろう。

私たちが練兵場で見たものは、無表情のギンヤ、そしてその視線の先で倒れ伏す、一人の女性という光景だった。

「ギンヤ、これは……………!?!」

「クロだ」

「え、クロ、ですか……………?」

そのままギンヤは沈黙してしまいました。とはいえこのままでいるわけにもいかないので、ルーミイが警戒しつつ女性に近づく。…いえ、ギンヤを警戒しているのでしょうか？そして女性を介抱しようとしていたルーミイが、何かに気付いた。

「これは、手紙……………?」

訝しげにルーミイが呟く。どうやらこの女性の衣服から、手紙が零れ落ちたらしい。失礼、といってルーミイはその手紙を広げ、

「な……………!?!」

めったに見せない、驚愕の表情を見せた。

「ギンヤ、すまないが、兵を呼んできてくれ。それと、捕縛用の縄も」
「了解」

ギンヤは短く答えると駆けていった。

「ルーミィ、どうしたんですか？」

そう聞いた私に、険しい顔をしたまま、ルーミィは手紙を差し出し、

「え……………？」

私はその内容に、驚くしか出来なかった。

そして同時に私は理解しました、ギンヤの「クロだ」という言葉の意味を。

Side：銀也

ああ、なんて事をしてしまったんだ……………。

自責の念と後悔が俺を責める。しかし全ては遅すぎた。後から悔
いるから後悔なんだよね……………。

気が重いが、状況を説明しよう……………。俺は先ほどまで短刀の投擲

練習をしていた。そして、だいたいの当たるようになって来たことに満足し、つい全力（+身体強化）で放り投げてしまった。

……………そう、これが間違いだった。

その結果は、制御不能のまま明後日の方向に飛んで行く短刀といった形で現れた。その短刀は、太い枝に命中し　その太い枝は衝撃に耐えられず落下して、

「ぎゃっ!?!」

なぜか木陰に隠れていた女性に当たった。

え、あれ、なんでそこに人がいるの!?　うわあ、これはまずい。慌てて女性に駆け寄り寄りうとしたら、

「ギンヤ、これは……………!?!」

背後からソフィアの声。

ああ、終わったな、と俺の中で声がした。傍から見れば、俺はまさに傷害の現行犯だ。そして俺は止せば良いのに、更に不要な

というか、明らかに有害な　一言を口走った。

「黒だ」

何がかつて?　倒れている女性の下着がだよ。いや、完全にスカーツの中が見える角度なんだよね、今の俺の角度。健全な男子としては……………じゃなくて!

いや、何を言っているんだ俺は!?!これで傷害+性犯罪ではないか!?!

そして何も出来ず立ち尽くす俺。やる事成す事全てが裏目に出る気がするので、もう俺は動けない。そんな俺を尻目に、ルーミィが

女性に近づき、なにやら落ちていた手紙を読んで。

「ギンヤ、すまないが、兵を呼んできてくれ。それと、捕縛用の縄も」

「了解」

なんか知らんが、た、助かった……………？ いや、もしかして俺を縛り上げるための縄ですか？ 参ったな、俺は縛るほうが好きなんだが。

Side: シェリス

ルーミィから報告を受けた私は、ついたため息を吐いてしまった。ギンヤが捕えた女性。所持していた手紙から、反乱軍の手の者であることが判明した。

台図と共に、女性が内側から門を開ける。そう易々とことが運んだとは思えないが、そうなればこちらの敗北は確定する。

危うく、私達は要塞の防御力に目を奪われ、取り返しの付かない過ちを犯す所だった。

「ギンヤ、いったい貴方は何者なのですか？」

その疑問を、私は胸中に抱かざるを得なかった。

無論、彼を疑うようになったわけではない。むしろ、さらに信頼

できると思った。

ただ、ソフィアと同年代でありながら、あれほどの頭脳と判断力、戦闘技術を持つ人間。

何かを得るためには、何かを犠牲にしなければならぬ。ならば、彼は力を得るために何を代償としたのだろうか。ただ単に鍛錬を重ねただけ、というのは考えにくい。少なくとも、それなり（おそらくはかなりのだと思いが）の実戦経験を積んでいるだろう。考えても考えても、過去の彼を知らない私には分からない。いや、そのような詮索など必要ない。

「とりあえずは、今出来ることをやらねばなりませんね……………」

そのためには、これでは駄目だ。気分を切り替える意味でも、剣を振ってこよう。

そう思って、私は練兵場に、神剣「シルヴィアエッジ」を持っていった。迷いを剣で切るために。しかし、どうやら練兵場には先客がいたようだ。そう、そこには、ギンヤが一人佇んでいた。

随分と集中しているようだが……………一体何をするのだろうか？ 好奇心に駆られた私は、木の幹に隠れ、様子を伺っていた。

そうして、ギンヤが動いた。

左足を一步踏み出し、半身になる。腰を落とし、右手を腰だめに構える。

そして次の瞬間には、視認すら出来るほどの魔力が、ギンヤの手足に収束する。

（なんて密度なの……………！？）

自分の息を呑む音が、遠く感じられた。そして、ギンヤが動いたと思った瞬間。

空気が破裂するような音と共に、最早光の速度に追従するのではないかと思うほどの右の突きが繰り出された。いや、右の突きだと分かったのは、実際に彼が技を出し終わってからだった。

私を感じたのは、戦慄と畏怖。あれは、どう足掻いても避ける事が、いや、防ぐことさえも出来ない。私はしばらく立ち尽くしていた。

当然だ。防ぐことが出来ない　いや、回避はおろか反応すら出来ない技、そんなものを見せられて戦慄しない武人などいない。なぜならそれは、至高の一撃。武人が目指す究極の高みだからだ。正しく一撃必殺。

再び静寂が訪れた錬兵場に、ギンヤの声が響いた。

「これは、出来れば使いたくないなあ……………」

私の耳に届いたのは、何かを耐えるような、涙声。

驚いて、私はギンヤの顔を見た。

ギンヤは泣いていた。

どうして？

わからない。彼はそもそも「誰かを傷つけること」に対して痛みを感じているのだろうか？　あるいは、あの技が特別なものだったのか。なにせよ　たとえまだ信頼できる人物が分からなくても　彼をあのままにしておくわけにはいかない。

「使う必要はありませんよ」

私がいたことに気付かないほど、彼は集中していたらしい。涙を流したまま、驚いて彼はこちらを見た。

「あなたが、そうまでする必要はありません」

「いや、だめですよ。使わなきゃ、きつと守れない」

守る。そうか、彼にとって（理由は分からないが）、涙を流すほどに使いたくない技を使おうとする理由。果たしてなにを守りたいのかは、まだ判らない。けれど、状況から考えたら、ソフィアや私たちだろう。

優しいというべきか、甘いというべきか。なんにせよ、稀有な存在ではある。出会って間もない私たちの為に命や己の禁忌を掛ける人間など、そうそう居るものではない。

それにしても、守れない、か。私たちは彼にとって「守るべき存在」であって、対等ではない。彼の中ではそうなのだろうけれど

「大丈夫です。私達は、（自分の身や、大切なものくらい）守れます。だから、そんなに、無理しなくてもいいんです」

私たちは、自分の身は自分で守れる。それを勘違いされては困る。ある意味ギンヤが抱いていたのは私たち武人に対する侮辱とも取れる感情だが　私は、理由はわからないけれど、まったく怒りを感じることは無かった。全く、彼がいると理由が分からないことがどんどんと出てきますね。

僅かな静寂が訪れる。そしてしばらくの後、ギンヤは微笑んだ。

「ありがとうございます」

疑いようも無く純粹な感謝の気持ちが入められたその言葉と、何から開放されたような清々しい微笑みに、私は顔が熱くなるのを感じた。

私に向けられる笑顔は……一部の親しい人たちのそれを除けば、打算に満ちたものだ。けれどこのときギンヤが浮かべたのは、幼子のように純粋な笑みだった。

これは……少し反則ですネ……………。

ここまで私にストレートに感情をぶつけてくる人間も、本当に稀ですネ……………。

この時、確かに私は王女であることから解放されていた。

Side: 銀也

いやー、なんとか犯罪者にならずにすんだぜ。危うく異世界来訪2日目でGame Overになる所だった。同じゲームオーバーでも、性犯罪でゲームオーバーになるのは勘弁だ。

そして、どうやらそこまでチートではないにしろ、俺は特殊技能と膨大な魔力を持っているらしい。そうなれば、必殺技を作らねばならないだろう、男の子的常識に基づいて。

左足を一步前に、右手を腰だめ。引き絞られる弓のイメージで、魔力を纏った拳を放つ！

うおおおおおおおおお！

結果的には成功した。凄まじい威力と速さを兼ね備えた、まさしく必殺技。

とんでもない肘の痛みと共に、相手を撃つ。なんとという自爆技。あまりの痛みには涙が流れる。肘が、肘があああああ！！

「これは、出来れば使いたくないなあ……………」

切実に。

「使う必要はありませんよ」

いきなりの背後からの声。その声の正体は、シエリス様だった。うわ、もしかして今の自爆、見られてた？ うわー恥ずかしい。

「あなたが、そうまでする必要はありません」

「いや、だめですよ。使わなきゃ、きつと守れない」

俺の命を。そして彼女を。彼女を取り巻く、彼女の大切な人たちを。

「大丈夫です。私達は、守れます。だから、そんなに、無理しなくてもいいんです。」

それは、俺にとっては衝撃以外の何者でもなかった。

ああ、そうか。

俺一人が守る必要など無かったんだ。そんな単純なことさえ、俺は忘れていた。

ソフィアの事が大切なのは、俺一人じゃない。シエリス様や、さつき一緒に居たことを考えると、ルーミイもまたソフィアを大切に思っているのだろう。そういえば、なんでもシエリス様は「姫騎士」という異名さえ取る強者らしい（兵隊さんから聞いた）。そんな彼女もまた、ソフィアを守ろうとしてくれるのか。

「ありがとうございます」

本当にありがとう。いや、俺が「シエリス様がソフィアを守る」と「について礼を述べるのもおかしな話だけだね。それでも、礼を言いたかったんだ。

……しかし、顔が赤いが、熱でもあるのかな？ はっ、まさかこれがニコポか！？

……………ねーよ。思い上がるな。

第2話：要塞にて（後書き）

止まらない勘違い。けれど不自然さが目立ちますね。

主人公は東洋人ゆえ童顔に見られがち。表情が子供っぽいのです。

シェリスは可愛いものと子供好きと言っ隠れ設定。

第3話…追うものと追われるもの。反乱の真の理由。(前書き)

……思い浮かびません。

第3話…追うものと追われるもの。反乱の真の理由。

今俺は、要塞内の街をソフィアと一緒に歩いている。ソフィアが街に用があるらしく、その同伴としてだ。ちなみに何故俺が同伴者かを説明すると、

シエリス様 「ソフィアといてやれ。今戦時中だし。トチ狂った阿呆がいるかもしれないからお前護衛な」

俺 「把握。けど城内の不穏分子の探索と排除は終わってないの？」

シエリス様 「今やってる。まだ裏切り者が居るかもしれないし。けどまだ完全じゃないからお前盾になれ。傷一つ負わすんじゃねーぞ」

俺 「ああ、彼女を守るのはいいが 別に、一緒に逃げてしまっても構わんのだろう？」

というやりとりがあったからだ。嘘だけど。けど大体そんな感じ。ギャグマンガ……………。

さて、そんなこんなで二人で歩いている。デート……といえなくもないのだろうか？ それはともかくとして、俺は凄い噴水を発見することとなった。噴出している水が、3秒間隔くらいで、赤くなったり青くなったりと、様々に色が変化しているのだ。かなりの色の種類があるが、すべて透明感の有る色なので、きらきらと光を反射して凄く綺麗だ。

「あ、あれはなに？」

「あれは魔晶を使って、水に色を付けているんです。台座に魔晶がはめ込まれていて、それによって色を変えたりしています」

ファンタジーだ。いや、分かってたけどさ。しかし綺麗だな。あ
あいったものを元の世界で作ろうと思うと、どれくらいお金がかか
るのやら。

ちなみに今俺達は公園のベンチ（木製）に座っている。街中は、
今が戦時中だということを忘れてしまいそうなほどに平和だ。周り
の人々も、少し見てみた市場も活気に溢れている。しかし、戦時中
……か。そもそも、どうしてこの戦争が起こったんだ？

「そういえばさ、ソフィア」

「はい、なんですか？」

「どうして、戦争が起こったの………？」

そして話を要約すると、こういうことらしい。

事の発端は、能力も無いのに自尊心だけは高い、某公爵家（ソフ
ィアの、ライトアーシェント家ではない）の人間が、貴族というだ
けで今以上に厚遇されるべきだという考えをぶち上げ、それに少な
くない貴族の人間が団結、彼らの主張を認めようとしないうちに反発。

じゃあ戦争だ！ 今ここ

馬鹿かよ……………。

どういった頭をしているのだろうか？ 個人的には上に立つ人間が優秀なら別に貴族という階級があっても良いと思うけど、無能な貴族とか最悪だろ……………。

ん？

いや。

それはおかしくないか？ 自分達の血統が尊いと思っているからこそ、彼らは傲慢なのだ。

つまり貴族というのは血統を重んじる、と言うことだ。その血統を重んじる彼らが……………「王」という、血統で言うならば最上級の人間に対して反旗を翻すのは……………。自分達の地位の、彼らが思っている正当性を失わせることにならないか？

「ねえソフィア、一つ疑問なんだけど」

「はい、何ですか？」

今の考えを説明。

「ああ、それはですね……………」

なにやら言い淀むソフィア。ううん、これは国家機密と言うことなのか？ 俺はあくまで傭兵みたいなものだし、それに対してソフィアは公爵令嬢。なら俺たちが共有できる情報に限りはあるか。

「ああ、言いにくいなら良いよ？ 守秘義務とかあるんだろうし」「いえ、そう言う訳じゃないんですけど……」

きよろきよろと辺りを見回すソフィア。そんなソフィアに和んでいると（萌えていたのかもしれない）、ソフィアが何かを見つけたらしく、ちよつとこちらへと行って俺の手を引いて歩き出した。

そうして俺たちがたどり着いたのは、少し歩いたところにあった倉庫。積み上げられた木箱と、壁に立てかけられた材木が一杯並んでいる以外は、特に何も無い場所だ。一体ここに何があるのだろうか？

「ここなら大丈夫でしょうか……」

しばらくソフィアはそのまま辺りを見回し、人氣が無いことを確認すると、ちよつとお耳を、と行って傍に寄ってきた。そして俺の耳に手をあて、小声で話し出した。

「口外しちゃだめですよ？ 実は本当の理由……つまり、一部の貴族が血統を無視してまで反乱を起こした理由があるんです。

今、皇帝陛下は病に臥せってらっしゃいます。そして医者の見立てでは、もしかしたら危ういということなんです。そうなると後継者が問題になるんですけど……更に権力を握りたい貴族の一部が、シエリス様はまだ成人していない、だから我らが代わりに……と言って、反乱を起こしたんです。今は更に大きな権力、つまり王権を合法的に手に入れるチャンスなので、その人たちはもう暴走状態なん

です。理性的な思考など出来るはずもありません」

うっはあ……。なんかディープな話だな。皇帝陛下崩御の危機、
んでもって上層部の暴走か……。確かにこれは、人目の付くところ
では話せない内容だな。

「なるほどね……。理解したよ」

なんだかな……。

と、少し暗い　　深刻な沈黙が漂う中、俺は懐かしい生物を
見つけた。こういうところや家の屋根裏に生息する、絵だと妙に可
愛いあれ。そう、ねずみさんです。

そしてそのねずみは隠れようとしているのか……。頭の側を木材と
木材の間に突っ込んでみてもぞもぞしている。妙におかしくて、ソフィ
アにも声を掛けた。

「見てみなよソフィア。ねずみは隠れてるつもりみたいけど、尻
尾が隠れてないよ」

見てよあれ、という意味を込めていう。ああでも、女性はこうい
う生き物は嫌いかな？

だったらソフィアには悪いことをしたかな……。
そんなことを思っていると、後ろから何やら物音がした。反射的
に振り向いた俺の目に飛び込んできたのは、物騒な格好をした男た
ち。お世辞にも堅気の人間には見えない。

「何か用ですか？」

俺には、こんな人たちに付け狙われる覚えがないんだけど……。言

い訳が出来る状況ではなさそうだ。とりあえず警戒のため、デカイ態度で臨んでおく。

「ライトアーシエント家の娘だな。おとなしくその女を渡せば、危害は加えない」

「そう言われて渡したら、俺凄いい道だよな……」

こいつら……不穏分子の残りか？ 随分いるじゃないか、しっかりしてくれシエリス様。しかし、月並みな台詞だな……。はいどうぞお納めください！ とでもやれと？ ふざけんな、俺の存在理由を奪うな。

殺人と言う禁忌を犯してまでも守った俺の存在理由だ、渡しはしない。

（しっかり腕につかまって。いや、むしろ……）

ごめん、非常事態だから。さりげなく俺にしっかりがみついてソフィアを受け渡す、ねえ？ あはは、面白いなそれ。

出来るわけ無いだろ……？ とはいえ、それを正直に言って引くようには見えない。だから闘争するか逃走するかなんだけど……ソフィアをかばった状態で戦うのは避けたい。

よし、逃走決定。

プランは決まった。とりあえず魔力での高速移動で出口まで一直線にいつて、あとは人の多いところに逃げる。それでいこう。警備兵だって存在するのだし……何よりもソフィアが居る。安全第一だ。

「抵抗するなら……！」

「ひっ……」

ソフィアが指示通りしがみついてくる。柔らかい、じゃなくて。

そういう思考回路はシャットアウト。……意外に余裕あるのかな、俺？

「渡さないなら、実力行使だ。」

「行け！」

応、行ってやんよ！

そう気合を入れて魔力を足に込め、飛び出そうとした瞬間。

つるっ

ちよ、床すげえ滑る！

芸人のベタなりアクション張りに後ろ向きにこけそうになった。しかし、すでに俺は止まらない。既にその体勢のまま空中に居たからだ。周囲の景色が流れていく中、せめて後頭部からの転倒は防ごうと、横にいたソフィアを正面から抱きかかえるように、体を強引に横向きにする。

結果、意図せずにドロップキックの体勢で、俺は高速移動する羽目になった。そしてそれがもたらしたものは

グチャッ！

異音と、踵に感じた嫌な感触だった。俺の視線の先では、顔面から血を噴出して倒れていく男の姿。かなりスプラッタだ。吹き出す血はお世辞にも綺麗とは言えず、先ほど見た噴水とは比べるべくもない。まったく意図しない結果を招いてしまったけれど……まあ、一人戦闘不能に出来たから儲けものだ！ ポジティブに考えよう。つと、見てないで逃げないとな。とりあえず、

「走って！」

ソフィアを先に逃がさないといけない。あ、ソフィアって意外に足速いんだ。運動は苦手ってわけじゃないのね。

そしてソフィアが出口から出た事によってそして男たちも我に帰ったのか、我先にと俺（正確にはソフィア）を追って出口に殺到する。やばい、俺も逃げないといけないな。最悪、狭い出口でなら1対1で戦えるし。

そうして、俺も出口から出ようと思った瞬間に、再びそれは起こった。

つるっ

またかよ！ 勘弁してくれ、芸人でもないのに天井なんて！

しかし、今は別に魔力を込めていない上、きっちり地に足が着いていたので、手を振り回すと楽にバランスが取れた。しかし、ここで振り回した手が一本の材木に当たり

ガラガラガラッ！！

轟音を上げて、連鎖的に材木が倒れ始めた。そしてそれは男たちを蹂躪し、ついには倉庫の出入り口をも塞いでしまった。どうやら俺は、図らずも撃退に成功したようだ。

まあ、結果オーライ……か？

まあ、ソフィアも俺も無事だったんだ。それに万一に備えて、まだこの周りに敵が残っていないとも限らない。城に帰るまで警戒を怠ってはならないな。

「早く城まで逃げよう」

S i d e : ソフィア

私は、ギンヤにこの戦争が起こった理由の一部を話しました。正直自分達の国の恥部を語ることになるので、物凄く恥ずかしかったのですが……事情を理解した後のギンヤの様子を見ると、やはり呆れているようです。

まあ、それも当然です。私も父様から話を聞いたときは、開いた口が塞がりませんでした。

本来、貴族は国を守り、民に良い治安や政治を提供する代わりに養ってもらっている立場の人間。所謂非生産階級であり、民の皆さん無くしては存在できない人間です。それを、彼らは……厚かましいにも程があります。

しかし、ギンヤはこの理由では、反乱の起こりが説明できない事に気付いてしまいました。なので、私は本当の理由……というか、今の状態を説明することにしました。

人に聞かれてはならないので、人気のなさそうな場所を探します。すると、ちょうど少し遠くに使われていなさそうな倉庫を発見しました。そこでなら話せるかと思い、ギンヤをそこに連れて行きました。

そして私は、今の状態を説明しました。その直後は、重い沈黙が漂います。無理も無いです、この話はそれだけ深刻な話なのですから。

しばらくして、ギンヤが唐突に口を開きました。しかも口元に笑みまで浮かべて、です。今の話に、そんな笑えるような箇所があったでしょうか……？ しかしギンヤが口にした言葉は、意表を突くものでした。

「見てみなよソフィア。ねずみは隠れてるつもりみたいだけど、尻尾が隠れてないよ」

この状況にはそぐわない、あまりにも意味深な言葉。それについて疑問を投げかけようとすると、後ろから　つまり私たちが入ってきた道に、突如剣や短刀で武装した男たちが現れました。驚いて身を固くする私を尻目に、ギンヤはいつものように余裕の表情です。ネズミ、とはそういうことだったのですか。では、初めからギンヤは、彼らに気付いていた………？

いえ、そういうことなのでしょうね。ただ単に正面からやりあうだけでなく、そういうしたことにも気付けるなんて……本当に凄い人です。

「何か用ですか？」

ギンヤは、あまりにも普段通り。私も最初は恐怖を感じましたが、直ぐに隣に誰がいるのを思い出しました。何せ、私の隣に居るのは特務魔道師すら打ち倒す存在なのですから。そのギンヤが腕を私に差し出しました。意図は分かりませんが……彼の様子を見ている

と、段々と緊張が解けていきました。

「ライトアーシエント家の娘だな。おとなしくその女を渡せば、危害は加えない」

「そう言われて渡したら、俺凄いい道道だね……」

（しっかり腕につかまって。いや、むしろ……）

「ごめん、非常事態だから。さりげなく俺にしっかりしがみついて」

「し、しがみつけ、ですか。つまりギンヤに抱き着くと言うこと。」

「いえ、緊急事態ですものね。仕方ない、そう、仕方ないんです。羞恥心だの憤みだの、そういったことは二の次なのです。」

「私は誰に言い訳しているのでしょうか……？ 不毛ですね。」

「抵抗するなら………！」

「ひっ………」

怖がる振りをして、ギンヤに抱きつきます。実際に怖いですが、しかしそれは刃物が向けられたことによる本能的なもの。恐怖は感じて不安は感じません。それより、前回の戦場でも抱きついてしまったときに思いましたが、ギンヤは着やせするタイプのようです。抱きつくと、意外とがっしりした、筋肉質な身体である事に気付きます。

「わ、私は何を、考えているのでしょうか………？ いけません、こんな時に！」

「渡さないなら、実力行使だ。」

「行け！」

そういつて、男たちが近づこうとして

私は初めて、空を飛んだ。

ギンヤが魔力を足に纏い、一瞬で相手に肉薄。それには当然、くつついていた私も一緒です。

そして、その勢いのまま、ギンヤは飛蹴りを放ちました。ギンヤの踵が唸りを上げて、真ん中で出口を塞いでいた男の顔面にめり込みました。

グチャッ！

果物が潰れたような異音が響き渡り、男は戦闘不能になりました。私は武術のことは良く分かりませんが、あれを受けて立てると思えません。事実、もうその男は立ち上がってきませんでした。

「走って！」

着地直後、ギンヤの指示に従って全力で出口に走ります。私は無事に出口にたどり着きました。そして、ギンヤはどうかと思って振り返ると、ギンヤは出口で1本の材木を手で払ったところでした。何をしているのかと言う疑問は一瞬で崩壊しました。ギンヤが倒した材木が引き金となって、周囲の材木のほぼすべてが崩れ落ちました。そしてその材木が落ちる先は、出口に殺到していた男達の頭上。

「……………あ」

男たちは足を止め、呆然と頭上を見上げることしか出来ず

立ち尽くす男たちの上に、大量の材木が降り注いだ。

ギンヤはこの街を知りません。いつあのような戦術を組み立てる時間があったのか。そんな時間はギンヤが彼らの存在に気付いてから、そしてあの男たちとの会話中、それしかありません。つまり気配に気付いた後、短時間で会話しつつ、あれだけの戦術を組み立てたと言うことになります。

それを成し遂げた人は、速く城まで逃げようか、と警戒しつつも何でもないように言ってきました。

やっぱり、凄いです……。この人に対抗できるのは、隣国のシンシア様か、この国のヴィロウ將軍くらいのものではないでしょうか……………？

第3話…追うものと追われるもの。反乱の真の理由。（後書き）

貴族と言うものには、割と私も偏見持っているかもしれない。
このお話の貴族は、だいたいこんな感じですよ。

第4話：邂逅。策謀家。（前書き）

ソフィア父登場。

第4話：邂逅。策謀家。

あの哀れにも木材に潰された男たちは、ソフィアから報告を受けた兵士たちに捕まって、今は牢屋に居るらしい。ざまあ。ソフィアに害をなそうとした罰だ。

しかし、例の件をソフィアが興奮しながら多くの人に吹聴した結果、なんか最強人間みたいに言われ始めた。

勘弁してくれ。俺は少しだけ特殊な能力があって、それなりに近接戦闘が出来る程度の、極普通の人間だ。

今日も今日とて絶賛戦時中。だが、ソフィアの護衛？ らしきものな俺は休暇である。

いや、そもそも正式にこの帝国軍の人間になった訳ではないが、現時点ではその役目と引き換えに衣食住を提供してもらっているの
で、こうい言う方になる。

こちらに来てから、ゆっくり考える暇が無かったが、今の俺には考えなくてはならない事がある。だから、今日のこの休暇は素直に
有難い。

そうして俺は、宛がわれた部屋で、物思いに耽ることにした。

例えば、この世界について。

魔法と言つものがあること、そして見せてもらった地図により得

た情報。そして、外見がヨーロッパ圏の人間が（今のところ俺が会った中では）全員がこの世界において、日本語が通じていること。と言うより、公用語であること。いや、文字は知らんけど。

これらを一致すると、少なくとも俺の知る世界ではないという答えが導き出される。つまりは、「異世界」。

もう気付いてはいたし、受け入れたつもりではあったが（ソフィアという存在理由も出来たしね）　なかなか改めて考えると重い。

とはいえ、それは騙し騙しやって行くしかない。俺のいた世界で俺がどうなったとか、残した家族や友人のことを考えても仕方が無い。

今すぐ吹っ切ることは出来ないなら、自然に受け入れるまで待つだけだ。

それに何より、俺は一人じゃない。ソフィアが居る。それがこの上ない救いだっただ。

Side：ソフィア

今日は、お父様とお母様が、この要塞に来る日です。きっと、ひどく怒られてしまうんでしょう、うっ……………。

とはいえ、元はと言えば勝手に荷物に紛れて前線に行った私のせい。ギンヤが居なければ、実際私は今、碌な事になっていなかったでしょう。だから、おとなしく怒られることにします。

本当は、凄くイヤですけど……………。

「えっと、お久しぶりです、お父様、お母様……………」
「ああ、ソフィア、無事でよかった…………！」

「気まずい思いを打ち消して、覚悟を決めて会うなりお母様に抱き付かれました。普段はしっかりしている方なのですが…………。それ位、心配させてしまったと言っことでしょう。そして、お母様の後ろから、お父様がいらっしやいました。」

「まずは無事でよかった、ソフィア。だが、私の言いたい事は、わかってるな？」

「はい。勝手な真似をして、申し訳ありませんでした」

「本当にわかったのだな」

「はい…………」

私とお父様は、未だ泣きじゃくるお母様を見ました。これ程までに心配をかけてしまった私は、とんでもない親不孝者です。

「ふむ。本当は罰の一つでもしっかり与えるべきなのだろうが、どうやらしっかり反省したようだ。ソフィア、次は無いからな」

「はい」

もう二度と、こんな勝手な真似はしません。

「それはそうとソフィア、お前を助けてくれたと言う方は…………？」

「そうです、しっかりとお礼をしなければ」

「あ、ギンヤですね。ギンヤなら、多分錬兵場にいるかと思えます」

強大な力を持ちながらも、決して慢心や油断をすることが無い彼は、一日とて鍛錬を欠かしません。いつも彼はこの時間帯に錬兵場で、見たことも無い体術の型などをやっています。

「そうか。ではそこに行くでしょう。会えば良いのだが……………」
そうして。久しぶりに家族3人で並んで歩いて、錬兵場に行きました。

Side：銀也

いつも通りに錬兵場。明日を得るため、生きるため。今日も銀也は頑張ります。おー。

とりあえず、俺が出来ることについて整理しておこう。

近接格闘が少し、特殊能力と膨大な魔力がある。ただし、特殊能力は魔法を吸収して、自身の魔力に還元する能力。つまり、俺は、物理攻撃に関してはいたって普通の人間だ。

とりあえずは、物理攻撃に対する対策を考えることが第一。

次、膨大な魔力。ただし俺が使えるのは「身体強化」のみ。魔力を物質化する術も出来るかもしれないので、それについては修行中だが。「魔法」は使えないと見たほうが良いだろう。

これらを総合すると、俺は「高速移動＋それによって威力を増した一撃による一撃離脱」戦法を取るしかないように感じる。あるいはそれ＋間合いに入ってからからの近接戦闘。それなら遠い間合いからの踏み込みを鍛錬しよう。

「まずは魔力を纏って、と……」

身体強化。このとき込める魔力の分量と移動速度の関係を正確に把握することから始めよう。足に溜めた魔力を、開放。

「つと、行き過ぎたな……」

次は抑え目。

「うっん、今度は距離が足りない……」

中々難しい。しかし、間合いと言うものはとんでもなく大事だ。更に言うなら、今の俺の戦闘スタイルから考えれば、最重要といって差し支えない。何度でもやって、正確さを上げないとな……。ひたすら練習あるのみだ。

そんなことを繰り返しているうちに、ソフィアとその両親と思し

き人たちがこちらに来た。

「ギンヤ！」

「ん、何？ どうしたの？」

「君が、ギンヤ君かね？」

ソフィアに声をかけたら、ソフィアの隣に居た、とんでもなく威厳のある人が話しかけてきた。この雰囲気と状況から推測される答えは……………

「…………ソフィアのお父さんですか？」

娘さんをください。

「ああ、その通りだ。話は聞いているよ。うちの娘が随分と、お世話になったようだ。ありがとう」

頭下げられた。ちょ、止めてくださいそんな、貴方みたいな威厳溢れる人に頭下げられえると、むしろ逆にダメージです。

「ああいえいえ、頭なんか下げないでください。本当、当たり前のことをしただけなので」

「私からもお礼を申し上げます。しかし、なんと行っていいか……………」
「ええと、こちらはお母さんですか。本当に気にしないでください」
「君は謙虚な若者だね……………とはいえ、娘の命を助けられておきながら何も礼をしないなど、我が家の沽券に関わる。何か欲しいものはないかね？」

娘さんをください。

「いえ、特には無いですね」
「そうなのか？」

なんか拍子抜けした顔してるなあ。とはいえ、無いものは無いし。頭に浮かんだことは冗談でも口に出せないし。だからまあ、強いて言うなら……

「それなら一つ、お願いが。ソフィアの護衛をさせて欲しいのですが………」

正式に契約して欲しいなあ。衣食住の確保のために。たとえ正式に認められなくても、俺はソフィアを守るけど。

「そんな事は、こちらからお願いしたいくらいだ。だが、それだけで良いのかね？」

「それだけ、といわれましても。私にはこれが無上の喜びですから衣食住を確保できる、これ人間にとっての最重要事項。更に言うなら、今の俺にとって、ソフィアはこの世界での最重要人物で存在理由だ。依存？ そうなんだろうね、きっと。」

「あらあら………」

はて、なんかお母さんは上品に笑ってるし、ソフィアは顔を赤くしてるし。お父さんはお父さんで、なんか微笑ましいものを見るよな目でこつちを見てるし。いや、どちらかというと、いい拾い物をした、って感じ？

「そうか、そうか。あい分かった。娘をよろしくな、ギンヤ君」

「いえ、こちらこそ」

「私も次の戦に出るために、ここにしばらく滞在する。何かあったら、遠慮なく私の部屋に来たまえ」

「あ、ありがとうございます。」

いい人だ……。こういう人が本当の「貴族」なんだろうなあ。

その後しばらく雑談をして、ソフィアの両親は去っていった。あとは若いお二人で、というよく分からない発言と、紅顔の彫像と化したソフィアを残して。

だ、大丈夫か、ソフィア？

しかし凄い人だったな……。威厳が。あれが人の上に立つ人間なのだろうか。

Side：ソフィア父（ライトアーシエント公爵）

不思議な少年だった。それが私の、彼に対する第一印象。

外見ももちろんだが、あそこまで無欲で清廉な、そして芯の強そうな人物は、久しぶりに見た。あの若さで、という条件が加味されれば、初めて会う人物だった。最近は何も能力も無い男が数多いが、彼ならばソフィアの護衛、あるいは結婚相手としてさえ申し分ある

まい。

今回の反乱で、こちらが勝てば（もちろん絶対に勝つつもりだが）、貴族もそれなりに居なくなる。そうなれば、彼に爵位を与えても全く問題ないだろう。公爵令嬢の救出に成功し、また前線の兵士と共に戦い、攻勢魔法を扱えない身でありながら特務魔道師を葬り去った人物。むしろ爵位が与えられないほうがおかしいくらいだ。

「珍しく上機嫌ですね、あなた」

「む、そうか。いや、そうだろうな。そういうお前こそ」

「それはそうでしょう。大切な一人娘を任せるに値する人物が現れ、そしてその彼自らソフィアを守ると言ってくれたのですから」

「そうだな。彼のような人物がソフィアの近くに、ひいては姫様の周りに必要だ」

欲にまみれ、王家の血筋や公爵家などといった付加価値に目を奪われている輩が、姫様たちの周りには多すぎた。今回の件でかなり居なくなるだろうが……それでも全員が駆逐されたわけではない。

「穢れを吹き飛ばす新風となるか。ギンヤ君、勝手ではあるが、期待させてもらおうよ」

そういって、私は妻と笑い合った。

第4話：邂逅。策謀家。（後書き）

別にソフィアは落ちたわけではありません。照れてるだけです。多分。

公爵にしてみれば、主人公は力があつて（実際はさほどでもない）、娘にご執心な人間。駒としては最適です。

第5話：死に至る模擬戦は最早実戦だと思っ（前書き）

とりあえず、この話で主要人物は出揃ったかな、という感じですが、ちよつと展開が早いかな、とは思っています。

しばらくは主要登場人物が増えない予定（あくまで予定）ですので、大目に見ていただければ幸いです。

第5話：死に至る模擬戦は最早実戦だと思っ

連合、というものがあつたらしい。シエリス様たちのシルヴィア王国と、隣のバリツ皇国からなる二国連合。

その話を聞いたとき、貴族連合（反乱軍ね）と王国の戦乱に乗じて、漁夫の利を狙われないかと俺は思っていたのだが　この二国は心の底から仲が良く、皇国の皇帝は反乱軍決起の報を聞くと即座に皇女に兵を任せ、帝国の応援に向かわせたらしい。

そして今日、そのバリツ皇国の皇女と増援が、この要塞に到着するらしい。らしい、というのは全部ガルフさんからの受け売りだからである。

「しかし、皇女ですか。向こうも子供が二人しかいないのに、そのうちの一人をよく戦地に向かわせる気になりましたね？」

「それはお互い様だ。向こうも2年前に国内でちよつとしたことたがあつた際、シエリス様自ら皇国に向かわれたからな。臣下としては気が気でないが」

そう言つて苦笑するガルフさん。それはそうですよね、万が一にも怪我をしてはいけない人間が戦場に出るんですから。

「まあ、そんなシエリス様だからこそ兵が付いて来るわけだが」

「その辺のバランスの取り具合ですよね」

そんな風に和やかに男2人で会話する。ソフィアはシエリス様&ルーミイとその皇女のお迎えに行ってるが、護衛の俺は留守番なのだ。

しかし、しばらくぶりに男だけでの会話だな、などと考えていると。

「しかし、お前は体を動かしておいたほうが良いぞ？」
「へ？　なんでです？」

いたずらっぽくガルフさんはニヤリと笑い、

「向こうの皇女さまはシェリス様以上に武人の血が強くてな。お前の話をシェリス様やルーミィ、ソフィア様がしないとは考えられない。そうなるか………」
「そう、なると………」

やばい、めっちゃヤナヨカン。

「どう考えても、模擬戦をさせられるだろうよ」

人生終了のお知らせですね、わかります。

「何で、一般人の俺が……………」

いやね、前にも言ったけど、俺扱いが最強人間クラスにされてるんだよね。そしてそれがそのまま向こうの皇女様に伝わって、それを聞いた皇女様の武人の血が燃え尽きるほどヒートして、俺に模擬戦を挑んでくあwse drift gyふじこ1p……………！

落ち着け俺。K O O Lに、いやC O O Lになるんだ。冷静に。冷静に、冷静に、冷静に。

とりあえずプランを考えよう。

1、逃げる。ソフィアに呼ばれたら出て行かざるを得ない。却下。

2、いえ、俺弱いですよ？と、正直に言う。何故か聞く耳を持たれない気がする。

3、諦めて戦う。オウフ

以上、星宮銀也の素敵な考察でした。あれ、その結果俺詰んでね？ 気のせいかな、まともな結果が出ない。ま、まあ、模擬戦だし、戦時中だし、そんな怪我するようなことはしないよね。

しないよね？

うん、当然しないよね。ああびっくりしたなあもう。俺の早とちり、うっかりさん。うぶぶ。

「そんな風に考えていた時期が俺にもありましたぁー！ー！ー！」

着弾。着弾。着弾。轟音。着弾。轟音。着弾……………！

直径50cmクラスの魔法弾が雨霰と飛んでくる。とりあえず、持ち前の身体強化で間髪避けているが、直撃したらあの世に直行しそうだ。吸収しきれないレベルの魔法だし。

「く、流石、あの2人が口を揃えて高く評価するだけのことはある！ 凄まじい速さだな……………！」

なんか皇女様が言ってるけど、轟音でまったく聞こえませんか？
ンナ！

「だが、これならどうだ！」

ちよ、増えてる増えてる、魔力弾増えてるから！

もつらめええ、逝っちゃううううー！

どうしてこうなった、どうしてこうなったああー！？

Side:ルーミー

目の前では、見方によっては一方的な模擬戦が展開している。事実、ソフィア様は心配そうにオロオロするばかりだ。

「少し落ち着きなさい、ソフィア」

苦笑しながらシエリス様が言う。正直、私も同感だ。

「けれど姫様！ あのままではギンヤが………！」

なるほど、武人でないソフィア様にはギンヤが危ないように見えても仕方がないか。

「ご安心ください、ソフィア様。今は、圧されているのはギンヤではありません」

私の言葉に、訳が分からない、とばかりに目を白黒させるソフィア様。

「むしろ焦っているのは、シンシアの方ですね」

ソフィア様が模擬戦から目を離さずに言う。確かに、今のギンヤの姿を見逃すことは武人として許されぬ。

「表情を見てみなさい、ソフィア」

「表情……ですか？ ……………あれ……………」

「気付きましたか？」

「は、はい。確かにシンシア様が焦っているように……………」

そう、今シンシア様は、傍目にも分かるほど焦っていた。それは仕方がないだろう。というか、私もあの立場なら焦りを顔に出さない自信が無い。

「シンシアの攻撃は、全てギンヤに『紙一重で』避けられています」

極限まで攻撃を引きつけ、無駄を削り落とした最小限の動きで回避する。その、「武の極み」とも言える事を、ギンヤはあの数の魔力弾相手にやっている。それもその魔力弾を放っているのは、「バリツ皇国の戦姫」と称されるシンシア様だ。

並大抵ではない……………どころか、正直な心境を吐露すれば、ありえない。余りにも非常識すぎて、実は全て偶然ではないのかとさえ思えてくる。

果たして私は、彼が牙を剥いたとき、一体どれだけの時間が稼げるのか……………。

そのような事が起こらないことを祈るしかなかった。決して姫様を守ることを諦めなどしないが、ただどそれでも、自信は無かった。

S i d e : 銀也

ヤバイヤバイヤバイ。もう何回死んだじいちゃんが見えた事か。まったく皇女様は攻撃の手を休める気配がないし、正直もう俺の体力の限界だ。冗談抜きに、このままではそろそろ死ぬ。理不尽だ。理不尽だぞクソツタレ。ソフィアを守って、とかならともかく……なんで味方に殺されなきゃならん？

……本気で腹が立ってきた。行き過ぎたパニックは、そのまま攻撃性と変化する。今の俺の状態は、まさしくそれだった。俺の中で、一瞬にして強大な敵は憎むべき怨敵と化した。

上等だよ、クソオンナ

！

もうこれ以上逃げていてもジリ貧だ。覚悟を決め（自棄になったとは言わないで）、俺は、込められるだけの魔力を足に込めた。

狙うは、定番の高速突撃。そして標的はあのトリガーハッピー。このけのバーサーカー皇女様。通るかは分からないが……それでも何もしないよりましだし、こっちの射程外と言う安全圏からチマチマやってくる相手の度肝を抜いてやりたい。

全力全開、

ゲキガン・フアー!!!

込める思いは、「少し、頭冷やそうか……!」

そして俺は、光になった。

まあ、結果だけ見るなら。

危うく、光どころかお星様になっちゃったけどね。名字通り星の宮に住む人になっちゃったところだったよ。

……えへへ

S i d e : シェリス

模擬戦は実戦さながらの緊張感に支配される中で続いている。シンシアが撃ち、ギンヤがそれを紙一重で避ける。この二国でも

いや、世界といっても差し支えないだろう 最高クラス
の戦いを、シルヴィアもバリツも関係なく、全員がただ固唾を飲んで見守っている。

瞬きをすれば、その間に終わっているかもしれないほどの戦い。
私達は、例外なく目の前の戦いに吞まれていた。だからこそ、誰も気付かなかった。

既に、闘技場の魔力障壁は壊れて意味を成しておらず。その結果魔力弾は緩やかに、しかし確実に建物自体にダメージを与えていた。そして遂に耐え切れなくなった天井の一部からシンシアの頭上に向かって、巨大な破片が落ちてきていたことに。

ギンヤの雰囲気、突如一変した。明らかに、シンシアに攻撃の意思を発したのだ。今まで回避に徹していたギンヤからの攻撃の意思。それは遊びは終わりだとも言つような意思表示。

そしてそれに気付かぬシンシアではない。直ぐに魔力弾を撃つの

をやめ、剣を構えた。

直後に放たれたのは、引き絞られた矢を あるいは肉食の
猛獣を連想させる、とてつもない突進力と速度を兼ね備えた一撃。

けれどそれは、シンシアの頭上に向かい放たれた。

シンシアの命を刈る断頭台の刃の如く落下する、巨大な石片に向
かって。

……………その後。シンシアを守るために大怪我を負って気絶した
ギンヤは、直ぐに医務室に運び込まれ、治癒魔道師たちによる治療
を受けた。

ギンヤも咄嗟に破片に気付き、失念していたのであろう。ギンヤ
の突撃は諸刃の剣、衝突する相手が人間以上の硬度を持っているな

らば、自分もただでは済まない事を。

あるいは、分かっているやっただのか。そのような行動も彼なら有りうる。

「しばらく、彼を戦には絶対に出さないでおきましょう……………」

彼をまだ失うわけにはいかない。少なくとも今のところソフィアを二度救っているし、何より彼に死なれると兵の士気が下がる。王女としてはそれは避けたかった。

……………そして、まだ誰かに言うわけにはいかないけれど。
個人としても、彼の身体は気がかりだった。

< 2日後。 医務室のベッドにて。 >

S i d e : 銀也

何という格好悪いことをしたのだろう。穴があつたら入りたい。とんでもない強さの羞恥の感情を抱え、俺はベッドで悶えていた。込める魔力の加減を失敗し、まさか皇女の遙か頭上に向かい突撃

ラブハートしてしまうとは。というか冷静に考えれば分かるだろう……そもそも鍛錬時でさえ狙ったところに行くのはそう多くないのに、頭に血が上ってる状態で魔力を込めたら加減が出来ないことくらい。

それはさておき……何故か俺は皇女の命を救ったことになっていくらしい。何度も何度も、何っ度もバリツの人達に感謝された。なんでも降ってきた天井の破片を俺の突撃がブチ壊したとか。

ごめん、それ勘違い。

なんてことも言えず、俺は冷や汗を流しながら苦笑するしかなかった。その冷や汗も、怪我を耐えるように見えたらしく、大げさに心配された。なんだこの連鎖。

その後も俺が目を見ましたことを聞いたソフィアが泣きながら突撃してきたり、ソフィアの両親も、シエリス様やルーミイもなんか凄く心配してくれたりと、色々大騒ぎだった。最後の二人は微妙にクールぶってたけど……割と他者からの心配には、俺敏感なのよ？

シンシア（命の恩人に様など付けて呼ばせるわけにはいかないよ、本人からこう呼ぶように言われた）も丸1日俺につきっきりでいてくれたらしいし。ある意味では彼女が全ての元凶なんだけど……

それでも正直、申し訳ない感情で一杯です。シンシア、意味は『誠実』だったか。確かにあのあとの態度は誠実の一言に尽きる。名は体を表すというが……こちらにもそういう言葉はあるのだろうか？

ソフィアは『知恵』か。頭はいいよね、あの子。時折無鉄砲だけど。シエリス様やルーミイ、ガルフさんはわからない。元になつていく単語がそもそも英語で無い可能性もあるので、知らないだけかもしれないが。

それはともかくとして……。自爆に加え、更に羞恥心を煽るのが……。

「こ、これは黒曜卿、おはようございますー!」

「黒曜卿! もうお怪我はよろしいのですか?」

この「黒曜卿」なる称号。なんでも、俺の髪と瞳の色、それから「邪を打ち破る守護」という黒曜石の石言葉に基づいて、付けられた異名らしい。いや、黒曜石の黒って真っ黒だよ? さすがにそんな髪や瞳の色はしてないと思うんだけど……。

なんというか、ねえ? 俺も男の子、そういうものに憧れていた時代がありました。ナイフに、包帯、ブラックコーヒーに、etc……。けど実際、ここまで背筋が痒くなるものだとは思わなかった。あ、ちなみに今は別に無理してる訳じゃなくてブラックコーヒー大好きです。

度重なる不運と悪意なき口撃によって憂鬱になった俺は、包帯の巻かれた身体を引きずってたどり着いたベランダで空を見上げながら、某執務官の言葉を思い出していた。

「人生、こんなはずじゃなかった事ばかりだ………」

本当に。

第5話：死に至る模擬戦は最早実戦だと思っ（後書き）

個人的にかなり書きたかったお話。楽しく書かせていただきました。感想や批評、大歓迎です。お待ちしております。

第6話・少年と皇女様（前書き）

今回はシンシアメインのお話です。勘違いはありません。

第6話：少年と皇女様

俺の仕事はソフィアの護衛であって、戦場に出ることではない。とはいえ、有事の際には戦場に出なければならぬだろう。そもそもこちらが負けたら護衛も何もない……というか、ソフィアを守るためには戦わないといけないのだから。

しかし、そうなる問題が出てくる。戦争のためには鍛練は必須だが、ソフィアの側にいないといけない俺は、鍛練が出来ないのだ。いないといけないという方には語弊があるが（俺がソフィアが眼に入るところに居たいだけだし）朝には鍛練が出来るが、やはりまとまった時間が欲しい。

そんな要望をライトアーシエントファミリーにしてみた。満場一致で可決された。いや、嬉しいけど、それでいいのだろうか、護衛という契約上。

「構わんよ。君は、君の好きにやるといい。特に今は戦時中だ、契約で君をソフィアに縛り付けるなど、こちらにとっても大きな痛みだ」

「そうです。ギンヤは、ギンヤの思い通りに、動いていいんです」

いや、なんか、ありがとうございます。俺はこの人達に借りを返すまでは、やっぱり死ねないな。いや、借りを返しても死にたくなんてないけどね？

「どう考えてもやり過ぎた」

疲れて動けん……………。

この高速機動、目も回るし。何より精神の疲労が激しい。

（まあ、常にトップギアの車に乗ってるようなものだしなあ……………）

神経を使う。間違っても事故らないようにスピードを出すっていうのは怖いものだね……………。

「しかし、綺麗な空気だよなあ……………」

元の世界とは、空気の綺麗さが段違いだ。もともと、戦場の血の臭いは、元の世界の俺の周りには無かった物だけだ。

そんな風に俺が元の世界との空気の違いを実感していると、

「そんなところに寝ていると、風邪をひいてしまうよ?」

寝転んだ俺の頭側に、シンシアが立っていた。

「こんにちは、シンシア」

「ああ、こんにちは、だな。しかし本当に、そんなところで何を寝転んでいるんだい?」

「少し鍛錬のやり過ぎだね。しばらく動けそうにない」
「……………」

呆れたような顔。しかし美人なので絵になる。輝く豪華な長い赤

茶色の髪、上質の宝石ですら出せないだろう透き通るような翠色の瞳。肌だつて真っ白だし、スタイルだつてかなりのものだ。特定の部位の大きさをルーミイには劣るが、それでも奇跡的なバランスのプロポーシオンだ。美男も美人も、その時点で結構なアドバンテージを持って生まれてきてるよなあ……。世の中は本当に、実に素晴らしいほどに公平だ。その上この人は血筋も武の才能もある。公平すぎて涙が出てくるね。

「しかし、シンシアはどうしたのー？ この辺りには強い人はいないよー？」

「き、君は私を何だと思ってるんだい……！？」

「バーサーカー。狂戦士。戦いに生きるもの。最兵器彼女。人外一歩手前。なんちゃって人間。バグ&チートキャラ。うんうん、バグ&チートって、ラブ&ピースみたいでいい感じだねー」

「私はそんな目で見られていたのか……」

いきなり模擬戦を吹っかけられた恨みを晴らすべく放たれた俺の口撃に落ち込むシンシア。だが甘い、まだだ、まだ終わらんよ！

「まあそれも個性って事で。バトルジャンキーさん」

とどめの一撃。しんしあはくずれおちた！ しかし横文字もきちん通じるのねえ、この世界。ご都合主義万歳。

「まったく、私にここまでズカズカ物を言う人は初めてだよ」

しばらくダメージの回復に努めた後、復活したシンシアは苦笑しながら、俺の頭の側に座った。

「皇女、というだけで同年代の人間も私には一歩引いて接するからね。あるいは、取り入ろうとしてくるか。そのどちらかだった」

「ま、こういつちゃ何だけど、それは皇女の宿命なんじゃない？」

「あ、他人事だと思ってるな」

「いや、実際他人事だし」

「まあそうだね。………まったく、本当に君は」

「けど、だからこそシエリス様ともソフィアとも気が合っんじゃない？ 2人とも、似たような感じだったんでしょ？」

「まあ、ね。ある程度の血筋に生まれた人間は、その人間そのものより、その血筋で接し方を決められてしまうからね……」

「ま、それはそういう家に生まれた宿命って事で。君たちはそういう家に生まれたおかげで、少なくともかなりの生活が保障されているわけだし」

「愚痴を言わせて貰うなら、そんな籠の中の鳥では居たく無かったよ、私は」

「冗談。自分で餌もとらない、餌をとる苦労も知らない雛鳥が何を言ってるのさ？ それに今は空を飛ばうとしたって、君じゃ落ちるだけですぜダンナ。ならいつそ、今はまだ籠の中に居るべきだと思うけどね」

「本当に君は、容赦ないね……！」

顔を引きつらせるシンシア。だって事実ですしー。まあ、俺だって養ってもらっていた立場なのだから、偉そうにSEEKYOUか

ませる人間じゃないんだけどね。覚悟だとか生きる事への真摯さとかは、遥かにこちら側の人間のほうが上だろうし。

「何かシエリスやソフィアと私の扱いに差があり過ぎないかい？」

「シエリス様にはこんな恐れ多いこと言えないし、ソフィアにこんな事言ったら泣いちゃうでしょ」

「私も泣いてしまつかもしれないよ？」

「ハッ」

「鼻で笑うな！」

「やめてよね。シンシアが本気で泣いたら、俺は天変地異の前触れかと思うよ。」

「ええい、不敬罪で本国に連れ帰ってしまおうか……！」

「まったく、わがままな人なあ。せつかく人が今まで出会った事のないタイプの接し方をする人間として居ようとしてあげてるのに」

「え、ギンヤ、君は私のために……？」

「いや、ただ単に面白かったからだけ。はいそこ、剣に手をかけないー」

しばらく剣に手を掛けながらプルプルしていたシンシアだったが、肩を落とすと、俺の隣に寝転んだ。危ない危ない、三枚におろされるどころだった。

「本当に君は、無礼な人間だよ……」

「何、敬って欲しいの？」

「まさか。今更敬われても背筋が寒くなるだけさ」

「君も結構失礼じゃんか」

「私はいいんだ、皇女だからな」

「あ、横暴だ」

正直、ここまで楽に話せる人間はガルフさんについて2人目だ。

なんだかんだでシエリス様とソフィアには気を使うし、ルーミイはまだ俺のことを警戒しているようだし。いや、シエリス様もまだ警戒気味かな。まあそれはそうだろう。ぼっと出の男だし、彼女達の立場を考えれば俺を疑って当然。むしろ全面的に信頼してくれているソフィアのほうが異常といえは異常だ。

「あー、なんか、眠くなってきたなあ……………」

「今日はいい天気だしね。無理もない」

「まあここ連日、天気は良かったけど……………今日は雲ひとつ無いなあ」
「そうだね。本当に良い天気だ……………」

あ、ヤバイ、なんか体が沈む感覚がする。段々体が動かなくなってきた。

寝るな寝るな……………うつん、けど眠い……………寝るな、寝たら死ぬぞ！
死因は凍死ではなく、隣の皇女様の斬撃によるものだ。

……………ま、いいか。別に今何かしなきゃいけないことがある訳じゃないし……………シンシアも寝てる俺をぶった斬ることは無いだろうし……………寝ちやえ。

「うん、俺は寝る。お休み」

「ちょ、ちよっとギンヤ!？」

始めにあつた暗い雰囲気も今はマシになったみたいだし。俺は何も聞こえない。おやすみー。

S i d e : シンシア

横目で眠ってしまったギンヤを見ながら、私はこの少年について
思いを馳せる。

(私が今までの生涯で初めて、「勝てない」と思ってしまった人間)

全ての攻撃が紙一重で避けられ、拳句には命を救われた。彼が大
怪我を負うことの代償として、私は今生かされている。

(皇女の私に対し、一切の遠慮がない人間)

いや、なんだかんだで彼は私にも気を使ってくれているだろう。

正直、今もギンヤに会った最初は、何を話せばよいのか分からな
かった。その原因は、彼に命を救われた負い目だろう。

そんな風に悩んでいるのが馬鹿らしいほど、彼は普通だった。い
や、「普通すぎた」。皇女だとか血筋だとか、違う国の人間だとか
彼は本来なら皆が神経を使う事柄を、まったく気にしていないよう
に見える。少なくとも、表面上は。

(どこか人を惹き付ける魅力も持っているし……)

ここに来て彼は、2週間と経っていないという。だというのに、
ソフィアを二度救い、全軍壊滅、なくても甚大な被害が出たであろ
う局面において、退かずに特務魔道師を一蹴したという武勲を次々
と立て、それを鼻にかけることもない。そして平民の兵士と貴族を
まったく平等に扱う、考えられない感性の持ち主。なるほど、平民
の兵士が口をそろえて「素晴らしい御仁」と評するのも分かる気が
する。

私が今まで見てきたのは、なんとかして己を良く見せようとして
くる貴族の子弟、必要以上に萎縮する人間。そういったものばかり

だった。例外は家族とシエリス達だけだ。そして私がシエリスのよ
うに唯一の王の子供であれば別だが、私にはリンツと言う双子の弟
が居る。王位の継承は男児であるリンツがするので、私を「自身、
あるいは自身の息子に箔をつける格好の結婚相手」というように見
てくる人間が多いのだ。

その中で、まったく飾らず、私に気に入られようとせず己を通
してくるギンヤは、私にはひどく眩しい存在に映った。

先ほどもそうだ。皇女としての立場に愚痴るばかりで、皇女とし
ての立場が与えたものを見ようとしない私に、ギンヤは突きつけた。
「物事の負の側面ばかりを見て嘆く人間」の如何ともし難い愚かさ
を。

こんなことを言うてくる人間は、今まで誰も居なかった。

純粹に興味がある。彼は何を考えている？ 彼は何を視ている？

彼の目に、世界はどう映っている？

それが知りたかった。人間にここまで興味を持ったことは、私に
は今まで無かった事だ。

(シエリスたちを助けるつもりだけで来たが)

存外に、面白い生活が出来そうだ。少なくとも、退屈はしそうに
ない。

そう感じて、知らずに私は微笑んでいた。

そして横で眠っているギンヤを微笑んで見ているシンシアを、シンシアお付のメイド隊の一人が目撃し、「シンシア様にもついに春が……………」と勘違いし感涙に咽び泣くのはまた別の話。

それを伝え聞いたシンシアが白磁の頬を紅潮させて剣を振り回すのも、また別の話。

とりあえず、照れ隠しは穏便にしましょうね、ということだ。

第6話・少年と皇女様（後書き）

等身大のその人を見るって難しいですよね。

第7話・はじめてのおつかい、はじめてのおるすばん(前書き)

とりあえず一応は、銀也君の近接能力発揮の回。
彼も地道に強くはなるんです。

第7話：はじめてのおつかい、はじめてのおるすばん

要塞内のお留守番と治安維持を任せられました。銀也です。

いや、実のところは敵が攻めて来たただけだね？ 先日のお爆によつてまだ体が本調子でないと判断された俺は、シェリス様に留守番を言い渡されました。

それはともかく、今俺は街に居る。理由は服とか色々な日用品の買出しのため。

かなりの量になってしまったので、城まで届けてくれるとの事。まさかこの時代に宅配サービスが存在するとは。いや、世界違つから厳密には過去じゃないけどさ。

「ここはどこだ」

迷った。気を抜くと、すぐこれだ。まあこの世界での「ぎんやくんはじめてのおつかい」だ、この程度は許容範囲だろう。ちなみにあの番組、あの年頃の子供を持つ親は泣きながら見るらしいね。真偽の程は定かじゃないけど。

まあいい、適当に物音を探しながら歩くさ。特に何時までに帰つて来いと言われている訳でもない。護衛としてそれどうなのよとい

う声が聞こえてきそうだが、ソフィア自身にしばらく危ないことはするな、と言われてしまっているの、護衛すらさせてもらえないのさ。鍛錬は「仕方ない人ですね……」って感じだったけど。個人的にはソフィアが傷つけられると俺の精神がその倍は傷つくので、護衛してたいのだが。

「しっかし、何というか……………」

今の俺の状態を考えると、仕事してないのに給料を貰ってる状態だ。偶然シンシアを助けることになった時に謝礼として貰った金もジャラジャラある。金貨がザックザク。使い道がない。どうしようか。もっとお金貯めて何かしようかな。

そんなことを歩きながら考えていると、なにやら物音が聞こえた。物音がするということは、きっと人が居る。やったぜ、この迷路から脱出だ！

そう思って、俺は音のする方向に駆け出した。

Side：城下町のとある少女

私と妹は、ある男に追われていました。

名も知らぬ男。下卑た視線を向けながら、突如路地裏を歩いていった私たちに襲い掛かってきました。

妹はまだ幼く、明らかに男の興味は私に向いている様子。せめて妹だけは守ろうと、妹に衛兵さんと呼んでくるように言い、私は一人で追われることを選択しました。きっと妹が衛兵さんをすぐに呼んできてくれるという希望を頼りに。

しかし、そう上手くはいかず　もともと男と女では、身体能力に差がありますし　もう駄目なようです。ついに私は袋小路に追い詰められ、伸びてくる男の手を絶望しながら見つめるしかなかったのです。

そんな時、男の後ろから誰かが駆けてくる音が聞こえました。衛兵さんか、と私は希望を持ち直したのですが。

そこから出てきたのは、私より一つか二つ年下と思しき少年。今、男は獣欲によって狂っています。更に、男の手にはナイフ。関係ない人を巻き込むわけにはいかないと、大声を上げました。

「来てはダメ！逃げて！」

しかし、現実は無情。むしろ私の声で男に少年の存在を認識させてしまった。自責の念と恐怖に駆られる私から目を逸らして、男は

ナイフを右手にその少年に襲い掛かり。

「え？」

男のナイフを持った腕が少年に防がれると同時に、男は顎に何か打撃を貰ったようです。そのままうめき声も上げず、地面に崩れ落ちました。目の前……というには少々距離がありますが、その少年を私は感嘆の意を持って見詰めました。ナイフを相手に、自分から飛び込むなんて……なんて勇気のある人なのでしょう。下衆が、と男に向かい吐き捨てるように言った少年は、私のほうに来て

「大丈夫ですか？」

と、なんでもなないように声を掛けてくれました。私はそれで、目の前の現実をようやく認識し　助かったのだと思い、泣き崩れました。

そうして泣き止んだ私に少年はハンカチを差し出してくれたり、背中をさすってくれたりと甲斐甲斐しく世話をしてくれました。そして私が落ち着いた後、多くのバタバタという足音が聞こえてきました。衛兵さんが来てくれたようです。そうして妹を先頭に衛兵さんたちが駆け込んできて、目の前の光景に目を点にしました。そん

な衛兵さんたちに少年は、

「あ、これ変質者、というかただの下衆です。牢屋に叩き込んでください」

と言いました。すると、衛兵さんたちは、

「こ、黒曜卿!?!」

「ではこれは、黒曜卿が……………」

啞然とした様子で、男と少年を見比べます。しかし、この少年は「黒曜卿」という、どうやら身分の高いお方だそうです。

「……………ああ、詳しい話は後で。とりあえずこいつ持ってってもらえますか？ 見てると殴りたくなるので……………」

「か、かしこまりました!」

衛兵さんたちは一斉に敬礼し。男を連れて行きました。残ったのは私に抱きつく妹と私、そして「黒曜卿」というお方。その黒曜卿は、私に抱きついて泣く妹を優しくに見つめていました。気のせいでしょうか、その目には涙が光っているように見えました。

見ず知らずの私を助けてくださったことといい、私の無事を泣きながら喜ぶ妹を見て目に涙を浮かべたり。なんだか、凄く優しい方みたいです。

いけない、お礼を言うのを忘れていました。

「あ、ありがとうございます!」

「いや、城内で事件が起きた場合、今は私が責任を持って処理しないといけないので。やるべき事をやっただけですから、そこまで恐

縮されても……」

やはり、治安維持の責任者、ということはかなり地位の高いお方なのでしょう。

しかし、「やるべき事をやった」なんて。貴族の方は、犯罪を解決する代わりに見代わりを求めることも少くないのに、なんと高潔な方なのでしょう。

「で、ですが……」

「まあ、納得いかないのなら、そのお礼は受け取っておきますよ。さて、家まで送ります」

「い、いえ、そこまでして頂く訳には……」
「家に無事送り届けるまでが私の仕事です」

あ、あう。折れてくれそうにありません。

「でしたら、御願います……」

本当にここまでして頂いて、なんとお礼を言ったらいいのか……。

S i d e : 銀也

声の発信源にたどり着くと、そこには何やら怯える少女と、ナイフ片手に息を荒げてその少女を追い詰める男という図。

ええー、もしかして俺、事件現場に遭遇ですか？ えっと、「家政婦は見た！」じゃ、なくて。

「姉さん、事件です！」って、ボケてる場合じゃない！

幸い変質者の注意はこちらに向いている。ついでに敵意とナイフもね！ 街中で危ないもん振り回してんじゃねえよ！ここは路地裏だからいいとか、そういう問題じゃないんだよ！

ナイフが真っ直ぐ俺の顔面目指して突き進んでくる。舐めんな、こちらら道場で散々師範に武器格闘仕込まれてるし、実際に訓練された兵士とも命の取り合いしてんだ。もう今更ごろつきのナイフ如きじゃ緊張すらしないうっての。

ごめんなさい、嘘つきました。流石に恐怖は感じます。

振り回されたナイフではなく、前に飛び込んでそれを持つ腕を左腕で防ぐと同時に、顎に前進した勢いを乗せた右掌底を叩き込んだ。クラヴマガという護身術のバースティングという技術だ。攻防一体は理想だよな。

いい具合に入ったようで、男はうめき声も上げず崩れ落ちた。ひよろひよろして身長が俺と変わらないくらいの男だったので、ウエイト差は明白だった。だからこそ一発で失神させることが出来ただけれど……これが大柄な男だったらこううまくはいかなかっただろう。

あーよかった。格好付けといて負けてたら、俺かっこ悪すぎるわあ。それにこの女性を軽んじるわけではないけど……今のところソフィア以外を守った結果で死ぬつもりはない。

しかし、なんとというか……

「下衆が」

女性を無理矢理手籠めにしようとか、死刑でいいと思う。今回は現行犯だから、冤罪の可能性ゼロだし。

まあなんとか女性が泣き止むのを待っていると、衛兵さんが来たので、引き渡す。

ていうかやめて、「黒曜卿」とかマジ止めて。去り際に「流石黒

曜卿だ……」とか呟いていかないで。泣きそう。っていつかもう既に俺涙目なんだけど。黒歴史を思い出させるな。

「あ、あの……」

んお？ 何か被害者が話しかけてきた。

「あ、ありがとうございます！」

90度に綺麗に曲がったお辞儀をしてくる。腰痛めそうだけど大丈夫かなあ。

「いや、城内で事件が起きた場合、今は私が責任を持って処理しないといけませんから。」

やるべき事を行っただけです、そこまで恐縮されても……」

「で、ですが……」
「まあ、納得いかないのなら、そのお礼は受け取っておきますよ。さて、家まで送ります」

「い、いえ、そこまでして頂く訳には……」

「家に無事送り届けるまでが私の仕事です」

家に帰るまでが遠足です！って訳じゃないけど。いや、俺自身人のいるところに行きたいし。

「でしたら、御願います……」

よっしや、ミッションコンプリート！

そうして何とか城までたどり着いた。長かったぜ……。しかし流石異世界、ただの買出しがナイフ相手の格闘になるなんて。

兵隊の集まっているところに行くと、シエリス様やシンシア達が帰ってきていた。どうやら勝つたらしい。皆無事で良かった。

「あ、ギンヤ。何か変わったことはありませんでしたか？」

いきなり答えにくい質問ですね、シエリス様。迷子になんかなくてません。なつてないっいたらなつてない！

「いえ、特には」

迷子になったことなんて言えるか！

「そう、ですか。ならば良いのですが……」

よし。とにかく話を逸らせ。

「ええ、特にはなかったです。それで、シエリス様達はお疲れでし

よう。あとは城内にいた人間に任せて、ゆっくりお休みください」

「……………そうですね。そうさせて貰います。では、御願いますね。ルーミイたちもゆっくり休んでください」

「かしこまりました」

「そうさせてもらおうよ」

上はガルフさん&ルーミイ、下はシンシアの台詞。しかし、皆して何故苦笑しているのだろう。もしかして、迷子になったこと、ばれてる？

そうして、皆は休みに行った。その背中に、迷子になった事がばれているのではないかという俺の心配の視線を受けながら。

S i d e : シェリス

とくに大きな被害も無く、今回の戦いはこちら側の勝利で終わった。

そして帰還した私達は、城内で何か無かったかを、担当の衛兵か

ら受けた。

「そうですか、そんな事が……」

暴漢が一人の少女を襲う事件があったという。しかしそれは、ギンヤによって被害が出る前に防がれたそうだ。

「報告は以上です」

「わかりました。ご苦労様、下がって良いですよ」

「はっ！」

そうして私達は、当事者であるギンヤに何かあったかを聞いたのだが。

「いえ、特には」

帰ってきたのは「何も起こらなかった」という台詞。はて……ギンヤが暴漢を退治したことを、なぜ隠す必要が？

「そう、ですか。ならば良いのですが……」

しかし、その疑問は、次のギンヤの一言で氷解した。

「ええ、特にはなかったです。それで、シェリス様達はお疲れでしょう。あとは城内にいた人間に任せて、ゆっくりお休みください」

なるほど、そういう事ですか。

ギンヤは疲れているだろう私たちに、余計な心労を与えまいと、己が功績を挙げた事件さえも隠すのですね。私たちに言えば恩賞を与えられるであろう事はわかっていているだろうに……それよりもそれ

を聞くことによって生じる私達の心労を気遣いますか。

「……………そうですね。そうさせて貰います。では、御願いますね。ルーミイたちもゆっくり休んでください」

「かしこまりました」

「そうさせてもらおうよ」

ガルフやルーミイ、シンシアも答えに行き着き私と同じ答えに行き着いたようで、苦笑している。本当に、どうしてこの人はそのまま他者を優先するのでしょうか。そんなことをされたら、王女としてまで彼を懐に入れてしまいたくなるというのに。それが狙いだとしたら、大したものです。

そうして私達は、戦いの疲れを癒しにそれぞれの部屋へと向かった。

背中に、誰よりも優しい少年の、労わりが籠った心配の視線を受けながら。

第7話・はじめてのおつかい、はじめてのおるすばん（後書き）

次は、ソフィアも出しますね。

しかし一応ヒロイン候補なのに。

戦場に出るとソフィアは出番が無いので、日常パートで優先して出さないと……。

第8話・そして、彼は伝説となってしまった（前書き）

……再び思い浮かばない。

第8話：そして、彼は伝説となってしまった

「そろそろ、こちらから攻める時ですね」

とは、軍議でのシエリス様の発言。シンシアとも合流したことだし、そろそろこちらから打って出ようかと言うことらしい。まあ、いつまでもここで守ってばかりでは戦争は決着しないし、いつかはこうなるだろうとは当然思っていたけど……。遂にこの時がやってきてしまった。話は変わるけど、そういえばこの軍、軍師もちゃんというようだ。なんかローブで完璧に顔を隠しているので、顔は見えない。声は女性のものだけど……。まあ、俺とは関わらない方でしょう。どうでもいいや、と視界と思考の外に存在を追いやる。

「それには賛成だな。いい加減、これ以上やつらをのさばらせて置く訳にも行かないだろう」

「しかし、そうになると、どういう部隊編成になるのですか？ 私と

ガルフ隊長が同時に攻撃部隊に入ると、防衛が……」

「その心配はないのではないか？ 何せ、向こうの城は残り二つ。

相手にもうそれ程兵力が残っていない状態で、むざむざ兵力の分散を行うとは考えられないが。各個撃破の可能性を度外視するほど馬鹿ではあるまい」

「私もガルフ殿に賛成だな。とはいえ、自棄になって攻めてくるという可能性は無視できないが」

うん、軍議ですね。白熱して皆まじめに話してる。素晴らしい。

で、なんで俺も参加させられてるの？ しかも誰も疑問に感じてる感じがしないんだけどー。いや、俺ただの護衛よ？ 將軍とかじゃないよ？ 部下率いないよ？ 言ってみれば、ただの一兵卒よ？

よくわかんね。

そして、結局將軍2人残して、全員出撃らしい。当然のごとく、ソフィアはここで留守番。当然のごとく。前科があるので二度言いました。ちなみに俺はソフィアのお父さんの部隊に配属された。死ぬのは怖いけど……まあ、ねえ？ やるべき事はやりますよ。

その前日の夜、ソフィアとの会話。

「……そう……ですか。分かっていた事ですが、ギンヤも戦に出るのですね……」

「ま、それがお仕事だしね。ここが危なくなることはまず無いと思うし、ソフィアはここで待ってて。間違っても、前みたいに荷物に隠れて、とかしちやダメだよ」

「も、もうしません!」

「うん、ならいいんだけど」

前科あるからね。前科あるからね？ 流石に言っておかないといけないだろう。

「気をつけてくださいね。死んじゃったら、泣いちゃいますから」「俺も死ぬつもりは無いよ」

ま、泣いてくれるのは嬉しいけど、泣かせるのは嫌なので。この辺の我が儘さは自分でもどうなのよ、とは思っ。

って、いきなり抱き付かれましたよ！？ 流石ヨーロッパっぽい世界、ボディコンタクトが普通なのですかい？ シャイな日本人、それも思春期まっさかりな男子には刺激が強い。

「無事に、帰ってきてくださいね……」
「ういさー」

当然俺も、そのつもり。

さて、目の前に広がるは、こちらとほぼ同程度の兵力の軍隊。しかしおかしい。相手の全兵力をこの戦いにつき込んだとしても、ここまで兵がいるはずはないのらしいのだが……。

当然みなそれは疑問に思ったらしいが、斥候の報告でその疑問は解消された。

「申し上げますー！」

「来ましたね。して、どという事なのです?」
「そ、それが……………」

「馬鹿な、兵の大半は女子供だと!?!」

シンシアが叫ぶ。正直俺もビックリだ。俺だけじゃない、軍議に参加している全員が同じようだ。

「強制徴兵か…………! 奴らめ、守るべき民を戦いに駆出すとは…………!」

ルーミイが本気で怒っている。いや、それは、この場の全員がそうだった。皆怖いよ。いや、俺も許せないけど、怖いから! 特にシンシア、なんか赤いオーラ出てる! え、眼の錯覚だよね!?! 落ち着いて! バーサク状態は戦場で、敵相手をお願い!

「けど、有効な手ではありませんよね。少なくとも、こちらの戦意を殺ぐという点では成功してますし」

「そんな呑気なことを言っている場合か、ギンヤ。これは人とも思えぬ…………」

「分かってるよ、シンシア。だから最小の被害で戦いを終える方法を模索しようよ。今はとりあえず対策を考えないと」

「そうですね。ここで私たちが頭に血を上らせたとこで、こちら

の被害が増えるだけです。皆も少し落ち着きなさい」

鶴の一声。天の一声？ どちらでもいいけど流石シェリス様、カリスマだなあ。皆一瞬で落ち着いた。個人的にはあの状態のシンシアが落ち着いたのがビツクリ。シェリス様マジパネえっす。

「私は、出来る限り相手の將軍クラスを狙い撃つ作戦で行こうかと考えています。民は戦い方を知りませんし、また戦いを望んでいません。指揮者が倒れば、軍は自然と瓦解するでしょう」

シェリス様が大方針を決定。

「私はその案に全面的に賛成です」

ライトアーシェント公爵が賛成したことを皮切りに、次々と賛成者が続出した。そうして、そのように作戦は決まった。ちなみに最終的には満場一致。団結力が高いといえば良いのか。あるいはワマンというかイエスマンの集まりと危惧すればよいのか。まあ、今回はシェリス様が正しいからだろうね。そこまで心配することもないと思いたい。

そして、戦闘開始直前。馬に乗ったソフィア父と会話。

「ギンヤ君、君に頼みがある」

「はい、なんですか？」

「君は高速機動が得意だったな」

「ええ、まあ」

得意というより、それしか出来ないんです。まあ、それなりに足止めて殴りあいも出来ますけど。

「戦闘開始と同時に、突撃して欲しいのだ」

……………はい？

「もちろん、直ぐに君には退避してもらおうが」

「あ、そうですか」

ならいいけど。いや、良くないか？

「しかし、何故です？」

「民に恐怖心を抱かせるためだ。君の速さを見せ付けければ、少しでも戦意が低下するだろうと思ってな。そうすれば更に、降伏させやすくなると思うのだ」

「なるほど……………そういうことなら了解です。それでは戦闘開始と同時に突撃、後に離脱と言うことで」

その際一般人は傷つけないようにしないと。そうすると、正規兵ばいのが固まってるあそこかな。やれやれ、戦う力を持たない、戦いを避けたい人たちまで駆り出すなんて……………こいつらに権力握らせたらだめだな。そしてこんなやつらに負けようものなら、ソフィアたちが何をされるか……………。

それを想像すると、動悸が早くなる。眩暈と吐き気まで襲ってきた。

いけないいけない、落ち着け落ち着け。嫌な未来は想像しないに限る。そんなことを起こさせないように、俺は戦っているのだから。

そして、静寂と緊張を破るシエリス様の号令が下った。

「全軍突撃！ 狙うは総大将の首唯一つ！」

そして地を揺るがすこちらの兵の雄たけび。さて、んじゃまあ、銀也行きます！

狙いは正規兵の集団、その一点！ 周りに魔道師っぽいのが一杯いるのが気になるけどね！ けど特務魔道師レベルでなきゃ、魔法は吸収できると思うし！ そして直ぐに退避することを忘れちゃダメよ！ よし、行くぜ！

「瞬殺の、ファイナルブ ッドオオオオ！！」

突撃！

うぎああああ、めっちゃ魔法来てるんですけど！ 怖い怖い怖い！
あ、けど吸収出来る。魔力が体にみなぎるぜえ、ヒヤッハー！
って、

あ、加減間違えた。

吸収した魔力、片っ端から加速に使っちゃったあ！ やばい、このままだと兵のど真ん中の奥深くに突っ込むことになる！ 退避できなくなるじゃん！ 減速、減速！ って、やり方わかんねえ！
ええい、制御不可能な突撃って、またこのパターンかよ！？

っていうか、力が最初以外加わらない空中の運動の中で、途中で

物理法則無視して急ブレーキかかるとか、ないですよね……………。

そんな常識を見落としていた俺に下ったのは、「止まらない」という審判。平たく言えば、慣性の逆襲。いやあ、人間物理法則には逆らえませぬー。こうしている間にもほら、敵との距離がぐんぐん縮まって…………

ちょ、待って、イヤアアアアアアアアアア!

グシャア! ドゴオ! バキイイ!! キシャアアア! ギョエ
エエエ!!

様々な異音を響かせて、衝突、衝突。そして薙ぎ倒し吹き飛ばす。この運動エネルギーが消えるまで、人間弾丸と化した俺は止まらない。あ、ちなみに、シンシア戦の反省を生かして、重いけど頑丈でごつい鎧を俺は着ています。真っ黒な。異名どおりに用意しました、って用意してくれたソフィアは誇らしげだったけど…………めっちゃうちゃ目立つね、これ。

ただその注目を集める恥ずかしさを除けば、これはかなり有難い。逃げ足は転じて攻撃力となった。それに、これは服の一部と認識されるようなので（これに限らず、鎧など身に着けるものは全てそうだと思うが）、俺の能力も発揮される。更にいうなら、きちんと重厚さに見合った重さはあるのに、使用者にはその重さがかからないという、トンデモ魔法がかかっているらしい。重ねて言うが、目立

つことを除けばかなり有難い一品だ。

そして突撃により何人か（いや、正直100人単位かもしれない）薙ぎ倒して最後に俺が倒したのは、なにやらやたら羽飾りとか貴金屬をつけた、お前戦う気ないだろと言っつてしまいたい衝動に駆られる人間だった。それを見て俺は随分敵陣深くまで単騎で切り込んでしまったことに気付いた。明らかに、目の前のこれは貴族だ。今回の相手側のような汚い貴族が、相手と剣を交えるような場所にいるわけが無い。つまり俺がいるのは、必然的に敵陣の奥深くということになる。ヤバイ、退避しないと！ 周りも俺を殺そうとして

って、あれ？

なんか皆さん呆けてるし。何々、「フライゼン公爵がやられたあ
！」って、え？

………公爵？

「見、見よ、黒曜卿が総大将を討ち取ったぞ！ 無理矢理戦いに連れてこられた民よ、こちらに君達を害するつもりは無い！ 今なら全員、姫様に剣を向けた罪は不問とする！ 君たちに罪は無い！ 降伏せよ！」

え、ルーミイ？ どういうこと？ なにこれ？ 三行で説明お願い。

俺

総大将

倒しちゃった？

………あ、あれー？ ちょっと呆気なさすぎ………というか、上手く行きすぎでない？

S i d e : ソファイア父

彼には、また負担を掛けてしまうことになるな。胸中でため息をつく。そんな資格は私には無いというのにな。

確かに、彼ならばやれるだろう。単身での突撃とはいえ、彼の実力を持つてすればこなせてしまっただろう。だが。だが、だ。

(娘と同年の少年に、危険を犯させる大人か……………)

なんとという無様さ。そして卑劣さ。その思いから、私はどうやら自嘲の表情をしていたらしい、副官に言われてしまった。

「公爵様、大丈夫です。黒曜卿なら、きっと無事にやり遂げてくれます」

「……………そうだな。私に出来ることは、目を逸らさないことだけだ」
そして。

「全軍突撃！ 狙うは総大将の首唯一つ！」

シエリス様の号令が下った。こちらの兵が雄たけびを上げた直後

少年は、黒い閃光と化した。

最早残像が見えると錯覚するほどの速度で、ギンヤ君が突撃した。向かうは正規兵の集団。なるほど、民を傷つけないためか。卓越し

た思考能力と判断力だな……素晴らしい。

そして、その少年に、魔法弾が雨霞と襲い掛かる。

だが、少年には通らない。その全てを吸収し、

少年は、残像すら残さなくなった。だがしかし、あの勢いでは

「ダメです黒曜卿、深入りしては退避できなくなります！」

副官が絶叫する。私も叫ばずにはいられなかった。

「ダメだギンヤ君、止まれええええええ！」

しかし我らの叫びも虚しく、ギンヤ君は敵と接触し、そのまま数え切れないほどの敵を薙ぎ倒した。結果として、敵陣のかなり深くで彼は孤立することになってしまった。このままでは不味い！

「くっ、全軍突撃！ 黒曜卿を死なせるな！」

ルーミイが叫ぶ。だが言われるまでも無い。命令を下すまでも無く、ほぼ全ての兵は「黒曜卿」を救わんと駆け出していた。

(ギンヤ君、直ぐに行く！ 耐えてくれ！)

そして、突撃した私たちが見たものは、傷ついたギンヤ君ではな
く

今回の反乱の首謀者の一人。そして、こここの敵軍の総大将。その
フライゼン公爵が地面に伸びた無様な姿と、その傍らに悠然と立つ、
ギンヤ君の姿だった。

思い出すのは軍議でのギンヤ君の姿。

(ギンヤ君、君は……………！)

誰よりも相手の卑劣な行為に激怒するだろうと思われた少年が、
軍議の参加者のなかで最も冷静だった。それに少々戸惑いを覚えた
が……しかしそれは、断じて怒っていなかった訳ではなかったのだ。
むしろ、その逆。誰よりも優しい少年は、誰よりも冷たく
心の中で怒っていた。

それはこの現状を見れば分かる。彼は己が敵に囲まれる危険も顧
みず、民を傷つけないために総大将の首だけを狙い。そしてそれを
成し遂げた。そう　　誰も民を傷つけない勝利と言う、絵空事
を現実にしたのけた。

「見、見よ、黒曜卿が総大将を討ち取ったぞ！無理矢理戦いに連れ
てこられた民よ、こちらに君達を害するつもりは無い！　今なら全
員、姫様に剣を向けた罪は不問とする！　君たちに罪は無い！　降
伏せよ！」

流石にルーミイもこれには驚いたのか、声の出だしがどもつていた。無理も無い。何せ、開戦して1分が経過する前に、総大将を討ち取ってしまったのだから。

そして、その降伏勧告に従わないものはいなかった。民は元より、正規兵すらも、そしてなによりほかの貴族達も。分かっていたのだ。これに従わなければ、次に地面に倒れるのは己なのだ。

悠然と佇む「黒曜卿」。彼に雲の切れ間から光が差し込み、その姿を照らす。まるでその姿は、天が彼を祝福するかのようで、それを見た兵士達の士気は上がる一方だ。助かった相手方の民や兵も一緒にあって、歓声を上げている。

この瞬間。間違はなく彼は、この場の支配者だった。

そして我らは。

誰一人として死者を出すことなく、反乱軍をあと一つの城に追い詰めた。

「ギンヤ！」

「ああ、ソフィア……」

興奮した様子でソフィアがこちらに駆けしてきた。あれ、なんでいるの？

「どっつしているのさ!?!? また荷物!?!?」

「ち、違います！ ちゃんと馬車で来ました！」
「あ、ああそう。なら良いんだけど」

速いねしかし。後から聞いた話によると、ソフィアの馬車の御者の人は座席から発せられる「急げ」オーラに震えながら文字通り飛ぶように来たらしい。なんていうか、お疲れ様です。そして自重するソフィア。いくら心配してくれたとはいえ……まあ気持ちはありがたいけど。俺が逆の立場だったら……それでも御者さんや他人に迷惑をかけたりはしない。俺は自分で延々と身体強化を掛けて走ってくるから。移動には便利だよなこれ。

「それはともかく、聞きましたよ！ 民の方々を一人も傷つけずに総大将を討ち取るなんて……凄いです！」

「ああ、うん……」

「？ あまり嬉しくなさそうですね」

「ん？ ああ………」

確かに結果を見れば、おそらく俺は最善に近い結果を出したのだろう。ただ……。

「……俺さ。凄い勢いで突撃したんだよ」

「……はい。敵陣の本当に奥深くまで行っただみたいですね」

「うん。その過程で俺が跳ね飛ばした人たち……具体的な数は分からないけど、結構死んでしまったみたいだ」

「あ………」

一瞬でソフィアの表情が痛ましげなそれに変わる。自分自身ひどくネガティブだと自覚しているし、こんなことをソフィアに言ってしまうのがないのは分かっているけれど……それでも吐き出してし

まった。情けない限りだ。

だけど大丈夫。直視するって決めたから。

「そんな顔しないで。確かに辛いけど……それでも大丈夫だから」
「……………はい」

ああ、俺の馬鹿。こんな顔をさせたくて戦っているわけじゃないのに。

「こーら」

「ひゃっ!？」

ぼふ、とソフィアの頭に手を置く。

「言い出した俺が悪いけどさ。俺はソフィアが笑ってくれるために戦っているんだ。だから、俺としては笑ってくれたほうが嬉しいかな」

「……………はい!」

うん、ちゃんと笑ってくれた。

「あ、皆宴会の準備をしていますね。ギンヤは何か食べたいものありますか？ 材料があまりないので大したもの出来ませんが……作りますよ」

「……………それよりも先に体拭きたいかも。鎧暑かった」

「くすくす……わかりました。じゃあギンヤが体を拭いている間に何か作っておきますね」

「おー、お願い」

この笑顔が、俺が守りたいものだ。

第8話：そして、彼は伝説となってしまった（後書き）

こうして勘違いは加速し、ギンヤ君はさらに自分の首を絞める結果となりました。

軍師は主要人物になりますん。

第9話：最終戦の前の休息（前書き）

もんすたー。もんすたー。

第9話：最終戦の前の休息

戦いというものは、戦闘が終わればそこで終わりというものではない。捕虜の扱い、戦力の補充、兵糧の確認、場内の把握や治安維持、e t c e t c ……。

ひとつの城を落とした俺たちは、そういった戦後処理に追われていた。とはいえ実質ただの一兵卒である俺に、仕事が回ってくるわけではない。仕事に追われるシエリス様たちを尻目に、こちらも仕事の無いらしいシンシアとソフィアと呑気にお茶をしていた。

「しかし、シエリス様たちは忙しそうだね……………」

「そうだな、とはいえ……………今回は民が強制徴兵などということさせられていたからな。幸か不幸か、躍起になって民の支持を集めようとしなくて済むから普通よりは楽なんだよ」

「戦う力を持たない人を戦場に出すなんて、許せません……………」

「そうだねえ。ところで、シンシアは仕事しなくていいの？」

「私は部外者だからね。することは無いよ」

「とかいいつつ反乱に参加した貴族に片っ端から決闘を挑んでボコボコにしているシンシアであった」

「え、え、シンシア様、え!？」

紅茶を嚙りつつ、無言で目をソフィアから逸らすシンシアであった。それはもう自白しているに等しい。

「まあ、気持ちは分かるけどね」

あいつらのせいでどれ程の不要な血が流れたことか。いや、対抗

することを選んだのはこっちだから流血の責任は五分か？

「だ、だろう？」

「けど俺は実行に移さないな」

「というか、ほんとにやってるんですね……」

ま、反乱でシェリス様が悩んでたりとかしたのがシンシアには気に入らないんだろう。正確には、シェリス様をそう悩ませた貴族たちが。そしてバーサーカーシンシア降臨、と。実に分かりやすい構図だ。

「本当にやってるよ。夜な夜な徘徊して、悪い子はいねがー、悪い子はいねがー、って」

「そんな事はしていない！」

な〜ま〜は〜げ〜。こっちにはそついった風習ないのかな？

「まあそれはいいや。それは置いておくとして。

仕事が無い俺たちですが、お茶なんか飲んでていいんだろうか。いや。お茶を貶すわけじゃないけど」

「「何を今更」」

ソフィアがグレた！？

「というか、お茶でも飲もうよー等と言ってきたのは君ではないか」

「いや、だってやること無かったし」

「じゃあ何をしていてもいいじゃないか」

「いやまあそうんだけど、なんとなく罪悪感がない？」

「君にそんな感情があったのか」

「どこぞのバーサーカーとは違うんです」

「「ふっふっふ……………」」

やっている人間としては中々楽しい掛け合いだけど、そろそろ止めようか。ソフィアがオロオロしてるし。

「けどこのお茶美味しいよね」

「それには同意だ」

「あ、ありがとうございます」

嬉しそうなソフィア。さもあらん。これ淹れたの彼女だし。

「こついうの、メイドさんとかがやると思ってた」

「普通はね。けど、ソフィアは普通じゃないから」

「その言い方、なんだか傷つきます……………」

「あ、ああ、すまない。決して悪い意味ではないんだ」

「ああソフィア、かわいそうに。人外の可能性ならナンバーワンな人間に言われたくないよねー」

「待て、それは私のことか」

「ほかに誰が。もう俺の中でシンシアは種族・人間(?)だよ」

「(?)とは何だ、(?)とは!」

「じゃあ、人間(笑)」

「ええい、ここで斬り捨ててやるのか…………! 大体私が人間で無いというのなら、君は何なんだ!」

「いや、普通に「人間」だけど」

「不公平だ! 君も人間の後ろに何か付いて然るべきだ!」

「じゃあ人間(遺伝子組み換えでない)ならどう?」

やめる、シヨッカー、ぶつとばすぞおー! こつちでは通じないだろうネタだから口には出さない。

「イデンシとはそもそも何なんだ……」

ああ、そっか。これも通じないか。

そうだよな、異世界だもんなあ……。そもそも時代を考えると、科学の発展が追いついてないか。けど魔法が発達しているわけだから……ううん。難しい問題だな……。

「お2人とも、仲宜しいんですね……」

いや、弄りがいがあるんだよね。

「いや、弄りがいがあるんだよね」

「声に出てますよ……」

「おっと失敬」

ついやっちゃんだ。

引き続きソフィアについての論評。

「しかしアレだよな、本当にソフィアって公爵令嬢って感じがしない。いや、悪い意味ではなく。気品とかはちゃんと持ってるんだけど、趣味は料理で特技が家事全般、っていうのがね……」

「確かにかなり珍しい、というか私はソフィア以外にそんな貴族を知らないな」

「け、けど、好きなんです……」
「いや、いい事だと思うよ。何とというかね、こっ、癒されるものがある」

戦いにすさんだ心を癒す特效薬ですよ、ええ。料理が好きで家事が得意、っていうのは詩織もそうだったけど。いかん、元の世界を思い出すと泣きそうになるから止めよう。

「つまり君はソフィアを見てニヤつくのかい？ 不審者だな」

「こごぞとばかりにニヤつきながら弄ってくるシンシア。だが甘い……君のほうが決定的な失敗をしているのさ。」

「いやいや、強そうな男性を見つけてはニヤニヤして、更に行動に移すザ・痴女なシンシアに比べたら」

獰猛な笑み + 模擬戦申し込み的な意味で。

「うわ……」

ソフィアがドン引きした。何気にこの子もリアクションがキツイよね。無自覚なところがまた、絶妙な天然モノの腹黒さを醸し出している。実に、実に素晴らしいと思う。

「ち、違うぞソフィア！ ニヤニヤなどしていないし、やっていることは変な事じゃないし、第一強そうな女性だって大好物だ！」

「その発言はさらに過激だから落ち着こうか」

大好物てあなた。そんな獲物を狙うケダモノじゃないんだから。とりあえず見ている分には面白いが、收拾がつかなさそうなので、

そろそろ……

「ほらほら、深呼吸。ひっひっふー、ひっひっふー」

「ひっひっふー、ひっひっふー」

お約束のボケ。

直後に何をやらせる、と顔を真っ赤にして突っかかってきたシンシアをまあまあおちつけ、お茶でもどうぞ、とどろどろどろどろどろひっひっふー、と宥めて。

結局そのあとモダラダラと、3人でゆっくり過ごした。

必死に書類と格闘しているらしいガルフさんの絶叫を聞こえない事にして。

お茶会も終わりシンシアと別れたあと、俺はソフィアに城の中を案内してもらっていた。元々この城にはソフィアもそれなりに出入りしていたらしく、解説を交えながらの案内は、楽しいの一言につきた。

そして夕日が美しく射し、茜色に全てが染まる中。俺とソフィアは、カウナイン屋上にいた。

S i d e : ソフイア

私はギンヤに城内を案内したあと、そのままギンヤを連れてお気に入りの場所に来ました。人目につきにくく、空気も綺麗なここは、私にとって思い出深い場所です。

「しかし、景色が綺麗だね……」

「そうですね。だからここは私のお気に入りのところなんですよ。ギンヤには、そういう場所はないのですか？」

「昔はあったけどね。そこも、ちょっとした争いで無くなってしまったよ」

「あ……」

聞いてはいけないことを聞いてしまっただろうか。ギンヤの顔は、はつきりと悲しみの色を浮かべていた。その表情に、私は胸に鋭い痛みを感じた。

「そんな顔しないでいいよ。別に昔のことだし、今は正直どうとも思っていないから。例えばまだその場所があったとしても、俺は行かないだろうし」

嘘だ。ギンヤのその言葉を、ギンヤの表情は否定している。それは、ひどく悲しげな。それでいて、何かを諦めたような

「まあ、それはいいんだ。本当に気にしないで。しかし、本当に綺麗な所だな……」

そういつてごろりと、ギンヤは仰向けに横になった。その顔は先ほどまでと違い晴れやかで、その表情に理由も分ならず泣きそうになる。

「え、ソフィア、どうしたの!？」

ギンヤが珍しく慌てている。素晴らしく俊敏な動きで立ち上がったことから、それが伺える。

「どうした、って、どうしたんです?」

「いや、だってソフィア泣いてるから……」

あ、あれ? 確かに泣きそうにはなっただけだ。

「き、気にしないでください。別に悲しいとか、どこか痛いとか、そういうのじゃないので」

「……そう。なら、いいんだけど」

「じいごし。ギンヤにハンカチで顔を拭かれました。ありがとうございます。ぜひ寝転んだ。再び寝転んだ。」

「ここまでの光景は初めて見たな……」

「そうなんですか?」

「うん、もっと俺はこう……言うならば灰色の世界で育ったからね。こういう綺麗さは、初めてだよ」

灰色の世界、ですか。私には想像もつきません。一体どのような世界なのだろう。そのような世界があるのでしょうか？

しばらく黙って想像してみても、一向に具体的な感じが分かりません。結局想像を諦めてギンヤに質問をしようとしてみましたが、

「あれ、ギンヤ……？」

ギンヤがちつとも動いたりする気配が無い。横になったまま身動きの一つもしない彼を不思議に思っ、私は彼に近づいた。すると、穏やかな寝息が聞こえてきた。なるほど、どうやら……

（眠ってしまったんですね……）

穏やかな寝顔を覗き見る。少なくともその顔に、苦しさや悲しみは無い。なぜか彼が穏やかでいることが嬉しくて、そのまま私も彼の横になり……

（おやすみなさい……）

夕方だというのに、一緒になって眠ってしまった。

S i d e : 銀也

俺はソフィアに案内されたところから見える景色に見とれていた。ススキのような植物が茜色の光に照らされ、ひどく美しい光景になっていた。

「しかし、景色が綺麗だね……」

「そうですね。だからここは私のお気に入りのところなんですよ。ギンヤには、そういう場所はないのですか？」

「昔はあつたけどね。そこも、ちょっとした争いでなくなってしまったよ」

そう、あれは公園。小さい頃俺は、詩織や他の子達と一緒に遊んでいて、お気に入りかつ思い出の場所だった。

だが、その公園も、「子供たちの声がうるさい！」という近所に越してきたイカれたババア……失礼、近所の方の抗議によって取り壊された。

「あ……」

なにやらソフィアが悲しげな顔をした。これはまずい、

「そんな顔しなくていいよ。別に昔のことだし、今は正直どうとも思っていないから。例えまだその場所があったとしても、俺は行かないだろうし」

流石にこの年で公園で遊ぼうとは思わないし。けれどそれでも、取り壊されたことは遺憾、というか確かにその人にとってみれば深刻な騒音だったかもしれないが、子供たちは元気に外で遊ぶのくら

いいじゃないか、と思う。

そもそもその人が先にいて公園が出来たのではなく、公園の近くに後から移り住んできたのに。こんな大人がいるというのは、正直悲しいものだ。

「まあ、それはいいんだ。本当に気にしないで。しかし、本当に綺麗な所だな……」

そして横になる。なんか昼寝に最適そうな感触と温度である。そんなことを考えつつソフィアを見ると、ソフィアは何故か泣いていた。

「え、ソフィア、どうしたの!？」

我ながら素晴らしく俊敏な動きで立ち上がる。これはあれか、「私のお気に入りの所に寝転んでんじゃねーよクズ」ということか!？

173

「どうした、って、どうしたんです?」

「いや、だってソフィア泣いてるから……」

泣いてることに気付いてなかったのか。

「き、気にしないでください。別に悲しいとか、どこか痛いとか、そういうのじゃないので」

「……そう。なら、いいんだけど」

ああ良かった。ソフィアにクズとか思われてたら首吊れるわ。冗談じゃなしに。とりあえずソフィアの涙をハンカチで拭いて、と。うん、いつもの美人さん。べ、別に、泣いてる顔にキュンキュンなんてしてないんだからね! 泣き顔をいつまでも見つめてると理性

がヤバイ、なんて理由で拭いたわけじゃないんだから！ だめだ、何かをいえば言うほど言い訳にしか聞こえない。

「しかし、本当に綺麗だね。こういう光景は初めて見たな……」

「そうなんですか？」

「うん、もつと俺は灰色の世界で育ったからね。こういう綺麗さは、初めてだよ」

コンクリートばかりの世界だったしなあ。そう考えると、ここはひどく居心地がいい。

しかし眠い。疲れるようなことはした覚えがないんだけど……。

(あ、やべ……)

体が重く、動かなくなる。

そのまま、俺は沈むように眠りに着いた。

Side:ソフィア父

仕事も終わったので、帰ろうと思った私は、ソフィアがよく小さい頃遊んでいた場所に行こうとふと思いたった。なんとなくそこに娘が、そしてその護衛の少年がいる気がしたからだ。

そうしてそこにたどり着くと、そこをガルフ殿が覗き込んできた。

「ガルフ殿、どうかなされたか？」

「おお、これは公爵様。なに、ひどく微笑ましい物を見ましてね」

そう語る彼の表情は、彼の言葉どおり、暖かく微笑んでいた。
まあ公爵様も、といわれたので私もそこを覗き込む。

「ほう、これは……」

なるほど。これは確かに微笑ましい。私も自分の顔が緩むのを感じた。私達の視線の先には、黒い髪と瞳を持つ優しい少年と、私の愛娘。2人寄り添うように、穏やかに眠る姿だった。

ソフィアには立場上、政略結婚の話がつきまとう。確かに公爵令嬢と言う立場から考えるとそれも当然であり、責務であるのかも知れないが……それでもあの子には自由に恋愛や結婚をして欲しい、と思う。これはどうしようもない。そして今までソフィアがあのように男の近くで安らかに眠ることなどなく……それがギンヤ君への信頼を感じさせた。

「本来、彼らはこうあるべきなのでしょうね……」

「そうだな。彼は戦いに出るべき人間ではない。それは分かっているんだが、な……」

「しかし彼の力が無ければ、次の城は落ちますまい。なにせ次の城はあのヴィロウ將軍が……。我らに出来ることは、彼や姫様をお守りすることのみ」

「そうだな。それがきつと」

「

私たち、大人のやるべき事だ。

第9話：最終戦の前の休息（後書き）

なんか最後ソフィア父に死亡フラグが立った気がする。どうしよう。

ちなみに「詩織」というのはギンヤの幼馴染。第三部以降での主要人物になります（予定）。

子供には、寛大でいたいです。躰とは別次元の話で。

第10話前編：決意（前書き）

何とかかんとか書き直してみました。どうやらこれが今の自分の限界のようです。

今回から数話は、とどころどころシリアスというか作者の中二病が発生しています。ご注意ください。

ついでに主人公なんかパワーアップしてますが、根本的な弱点は変わらず存在しています。

第10話前編：決意

反乱軍の城も、残すところあと一つだという。それを落とせば戦いが終わる……というタイミングで、シエリス様と公爵が、シエリス様の父親　　つまり、今病に臥せている皇帝　　から顔を出すように言われたらしい。何でも話したいことがあるとかで、非常収集だ。

ちょうど良い機会なので……という事で俺も行くことになった。ガルフさんとルーミイ、シンシアが残って睨みを聞かせ、公爵ファミリーと俺、シエリス様が謁見に行く。こう改めて見ると、中々にちぐはぐなメンバーな気がする。シンシアも連れて行くべきではなからうか、とかね。権力……というか地位の高さに、こっちの国の城の最高権力者が他国の人間ってというのはどうなんだろう？　ただ戦力的に見た場合、今回のような布陣になるのはどうしようもない気がする。ルーミイがシエリス様の傍を離れることについてはスルーで。

今はそんな感じに複雑な思いとか、皇帝に会う緊張とかを抱えつつ、馬車にゴトゴト揺られています。あ、シエリス様みたく魔法を剣でぶった切る（どうやってんですか本当に。なんでもあの剣に秘密があるらしいけど。ちなみにシンシアは素でできる。どうなっているんだ一体）ことが出来ない俺は、遠距離からの狙撃が怖いので、常にブラックアーマー装備状態です。常在戦場。矢も怖いけど……戦場で感じた、魔法は本当にヤバイと。確かに矢もヘッドショットとか、そうでなくても当たれば死ぬこともあるけど……なんとというか違う。

まあ、達人が放ってくる矢を普通クラスの魔法使いが使う魔法で再現できる感じだろうか？　なんていったらいいのか分からないのでこの辺で打ち切ります。

それはともかく、そんなこんなで鎧着てますが、誰もこれに突っ込んできません。優しいですね。兵士から王女まで、漏れなく優しいですね。いい軍隊だな……。

「ところでギンヤ。こちらの生活には慣れましたか？」

突然のシェリス様からの不意打ち。こちら……ああそうか、一応異国の人間と思われてるんだっけ。異世界といっても信じてくれそうではあるけれど、こっちにパラレルワールドとかの概念が無いなら混乱させてしまいそうだし、真実は言わない。異国から来たというのも嘘ではないしね。我ながらひどい詭弁だな……。

「そうですね……戸惑うことがまだ少々ありますが、今のところは何とかやっていけています」

これは本当。色々な人が良くしてくれていて、今のところ大きな不自由を感じることは無い。細かな所で文化の違いを感じることもあっても、混乱することは無い。

「そうですね、ならば良かった。ギンヤが異国の人間であることは陛下にお伝えしてあるので、今回の謁見では細かな礼儀や必要以上の畏まった態度は不要ですので」

「あ、了解です」

それは有難い。とりあえず目上の凄い偉い人と会う態度で居れば、お咎めを食らうことはないだろう。結構心配してたんだよね、礼儀作法については。少しの失敗が死に繋がる可能性も無きにも在らずみたいだし……まあ、あのシェリス様の父親って言うんならあんまりそういうので即処刑、なんてことにはなら無さそうだけどさ。

「異国か……そういえばギンヤ君、君はどこから来たのだね？」

「あー……それはですね……」

まあこういう流れになることは予想済みだけど……なんて答えよう？ 時間軸とか宇宙だの地球だの、平行世界だのを話したところで理解してもらえないだろうし……どうしよう？ そんな風に悩んでいると、どうも複雑な事情を汲んでくれたらしく……申し訳なさそうに謝られた。

「ああ、すまん。話せないこともあるだろうに、不躰だった」

「ああ……えつと……」

ううん、気にしないでくれと言いたいところだけど……話せない以上、安易にそんな事は無いといったところで信憑性はないだろう。結局俺は、それを受け入れることにした。申し訳ないと思いつつも……それでも話せない。

その後は、当たり障りのない話をした。ソフィアは幼い頃はお転婆だったとか（今も若干残ってるよねと思った。親友が気がかりで戦闘地域に潜り込む辺り）、シエリス様も料理が出来るとか、でもソフィアのほうが上手いとか、公爵と皇帝はかなり仲が良いとか、シエリス様とシンシアは最初はかなり仲が悪くて取っ組み合いの喧嘩ばかりだったとか。人にも歴史有りだなあ……としみじみ感じ

た。ソフィアやシエリス様の昔話暴露大会みたいになってたけど。話のダシにされた本人達は少々お疲れ気味でした。ゆっくり休んで行ってね……。

「しかし、皇帝陛下と仲良し、ですか」

「ああ。光栄なことに、色々と目をかけてもらっているよ」

「そうですか……」

さて、どうしようか？ 現在の最高権力者に助力が請えれば、一人で帰る方法を探すよりは格段と可能性が上がるだろう。しかし……まだソフィアにさえ話していない俺の正体。それをいくらリターンが大きいとはいえ、まだ顔も知らない人間に話すというのは……少々気が引けるな。うん、今のところは保留だ。

「しかし、それがどうかしたのかね？」

「いえ、何でもありません」

ああくそ、もっと考えを纏めてから話せよ、俺。わざわざ怪しがらせてどうするよ。

そんなこんなで、それから数時間馬車に揺られ続けた。

そうして特に何事もなく、早朝に城を出た俺たちは、昼を少し過ぎた辺りで目的地に着いた。今までいた城もかなりの大きさだったが……この城はそれに輪をかけてでかい。さすが王の居城といったところか。また凄いのは大きさだけでなく、城を造っている石も綺麗だ。大理石とは違うのだが……似た雰囲気はある。異世界物品だろうか？ 周りが自然豊かで緑が多いので、その緑色が白い壁に映っていて幻想的だ。

「凄いな……」

ただただ、感嘆の声しか出ない。こんなにも美しい景色が世界にあったのか……そう思わざるをえなかった。決して城下町も汚かつたわけではない。むしろ色々凝ったものがあって、かなり目の保養になった。しかし、ここはそんなレベルではない。

まるでそこだけ世界が違うかのような……絵画の中の世界が実体化したような場所。

空の青さと、植物の深緑と……それらを反射してそびえる、荘厳な白色の城。所々に鳥が留まり、空気さえ浄化されたような空間。完全な自然と人間の調和の一つの形がそこにあった。それはたとえ一度しか目にしなくても 決して忘れないだろう、圧倒的な衝撃だった。

熱いものがこみ上げてきた。何なのだろう……そんなはずは無いのに、ひどく懐かしい気がする。まるで、自分がここにいたことが

あるかのような

「……まさかな」

その懐かしさを、首を振って霧散させた。そんな事があるわけがない。俺はここに来たのは初めてのはずだ。こんな景色を見ようものなら、たとえその時幾つであったとしても俺は忘れないだろう
そんな確信があった。

「……あー、もう、調子狂うなあ………」

まったく、柄じゃない。けど……

「この景色を見れたことと、ソフィアに会えたこと。それだけで

」

この世界に来た理由は……十分かな。

そうしてまた一つ良い思い出を手に入れた俺は、シェリス様たちを追いかけた。

思い出が出来れば出来るほど　　いつか来るかもしれないさ
よならが辛くなるだろうな、と頭の隅で考えつつ。

「第一王女シエリス＝シルヴィア及びライトアーシエント公爵、ご命令に従い参上いたしました」

城に上がった俺たちは、いきなり皇帝の寝室に通された。現在、大きなベッドの側にシエリス様と公爵が跪いている。ベッドには皇帝が寝ており、付き添いで王妃と思われる方が近くに座っている。ここにいないソフィアたちは、呼ばれていないので城内で休憩中。俺？俺は跪くタイミングを逃したので突っ立っています。特に皇帝も何も言っていないしね。一応姿勢を正して敬意は表しているよ？

しかしどういふ状況に見えるのだろうか？病に臥せている王と家族、忠臣。ここまでなら絵画の題材になりそうな情景なのに……その傍らに控える黒い鎧が台無しにしている。つまり俺が不要物。謝罪しながら飛び降りたくなった。

「ああ、ご苦勞。わざわざすまないな……ところで、そちらのものは？」

「はい、こちらのものはギンヤ＝ホシミヤと申すものです。異国の人間ですが、2度もライトアーシエント公爵令嬢を救い、また戦場でも武勲を挙げているものです」

「ほう、そうか」

そう言っつて皇帝は俺の方を見た。怪しげな黒い鎧がいるの、などと思われていたのだろうか……って、

(え……?)

皇帝の顔を正面から見た俺は驚いた。記憶の中の死んだじいちゃ

んと似ていたからだ。

無論髪の色などは違うが……顔立ちは酷似していた。おぼろげな記憶だから、確信を持っているわけではないが……

(つて、落ち着け落ち着け……)

悟られぬように頭を切り替える。他人の空似にそこまで動揺するのもみっともない。改めて皇帝との会話に集中した。

こちらを見詰めるその目には優しい光が宿っていた。そのせいだろうか……この国の最高権力者に見つめられているという状況下で緊張はまったくしなかった。まあ、じいちゃんに似ていたから、と言う理由もあつたのだろうけれど。

「ありがとうな……ギンヤ君、だったか。何か欲しいものはあるかね？　そこまでして貰っておきながら、何もやらないわけにはいかぬ」

「……いえ。お気持ちだけで十分です。強いていうなら……早く元気になってください」

これは紛う事なき本心。俺は今の生活に満足しているし、他人の空似とはいえ、優しくしてくれた祖父に似た人が病で苦しんでいるのは辛かった。

「君は優しい子だな……」

なにか感慨深げに皇帝は呟いた。優しい……いや、俺はそんな上等な人間じゃない。単に、死んだ人間を重ね合わせる的外れな氣遣いをしている勘違い野郎に過ぎないのだ。だからそんな言葉を掛けられると、逆に心苦しい。

「……そんなことはありませんよ」

「そうか。君にとってはそうなのかもしれないな」

年を重ねた人間が全て深みを増すわけではないだろう。だが

皇帝と言う立場に立ち、そしてその中で私欲に溺れることなく政治を行ってきた人間。その人間であるこの人の目は、深い。こちらをじっと見つめる優しい瞳には、吸い込まれそうな雰囲気があった。

「だがねギンヤ君、所詮人と言うものは他者が規定するものなんだ。君がどれ程自分の事を卑下しようとも、君は優しい人間なのだ。少なくとも私にとってはな。たとえ君が自身の利の為に行動を起こしたとして、その結果誰かが救われたのなら 動機がどうあれ、君は善人なのだよ」

「……哲学的な話ですね」

本当の自分などなく、あるのはただ他人からの評価のみ。なるほど、納得できる部分はある。

「ところでな。自分の中で、本当に自分であるものと言うのは意外に少ないのだよ。自分と思っているものの殆どは、他者からの受け売りであり、また影響によるものだ。言ってみれば人は、ほぼ誰かから受け継いだ何かで出来ているわけだな」

「あなた、そのあたりで……」

「ん？ おお、すまん。つい説教くさく……というより、下らない持論を語ってしまったな。私も偉そうなことを言える人間ではないというのに」

王妃に遮られ、皇帝は苦笑しながら言った。

「いえ、その、何と言うか……。生意気なことを言えば、私もその考えは正しいと思います」

この考えは心に留めておこう。何故かそう思った。

「さて、話を戻して……。君のその謙虚さは美德だが、こちらの文化では、恩を受けて返さぬのは家全体の名折れとなってしまうのだ。だからどうだろう、こちらの顔を立てると思って、何か欲してはくれんかね？」

「……そういうことなら、考えておきます」
「ああ。よろしくな」

そこでこの話は終わった。それを感じたのだろう、シェリス様が本題に入るために口を開いた。

「して陛下、お話があると伺ったのですが……」

「……ああ。お前と公爵、それからギンヤ君も聞いてくれるかね？」

え、俺も？

「は、はい。了解しました」

「ありがとう。話と言つのはな、ヴィロウの事だ」

皇帝がその言葉を口にしたとたん、場の空気が重くなった。そして、シェリス様と公爵の表情が、傍目からはつきり分かるほどに強張った。

「……ヴィロウ將軍のことですか」

シェリス様の声が、今まで聞いたことのないほど硬い。おそらくは公爵も口を開けばそうなるのだろう。

「ギンヤ君は知らないだろうが……ウイルス將軍と言つものがある。そして、私はあやつとは親友でもあつてなあ……………」

……随分厄介な話になりそうだ。

「そのウイルスと言つのが……。実は、今反乱軍側に与しているのだ」

予感的中だ。どうやら 今回も、俺は厄介ことに巻き込まれるらしい。

Side: シェリス

「そのウイルスと言つのが……。実は、今反乱軍側に与しているのだ」

その言葉を聞いた瞬間、ギンヤの目が細められた。高密度の

張り詰めた緊張感がギンヤから放たれる。別に、恐ろしいわけではない。恐ろしいわけではないが……形容しがたい気。苛ついているとも取れるし、哀れんでいるようにも感じる。一体何をかは分らない。

「正直、私はもう長くないだろう」

陛下の言葉に、ギンヤは沈黙を持って答えた。私たちも同様だ。

「そして、そうなるとこの国を継ぐのはそのシェリスだ。しかし君も分かるように、シェリスでは若すぎるのだ。無論公爵や他の皆が支えてくれるゆえ、私自身は心配していないのだが……民からはそうは見えぬだろう」

そう。私はまだ20歳。それでも実績があればよいのだが……私には、まだ実績がない。だからこそ今私が反乱を平定したとしても、しばらくは民の不安は消えないだろう。それがおそらくは、確定された未来だ。

「だからだろうか……？ あやつのは真意は分からん。ただ、あやつが権力欲しさに私やシェリスを裏切るとは思わないのだ」

それは私も同感だ。私は陛下と將軍の仲の良さをずっと近くで見してきたし、私自身ヴィロウ將軍にはお世話になった。泣いている私を懸命にあやつとしてくれた姿や、私の剣術の上達を我が事のように喜んでくれた姿は、今なお眼に焼きついている。

「あいつに反乱の意思はない。自身が討ち取られることでシェリスに箔をつけようとしているのか　　それも分からない。だが…

…」

「私は、あやつを死なせたくはない。反乱を起こしたものは処刑

その原則を知らぬわけではない。それを私が破れば、後のシ
エリスやその子孫達が苦勞するのも分かっている。だが」

死なせたくはないのだ。

そういつて、陛下は目を閉じた。その表情は、今までに見たこと
もないような苦惱に歪む表情だった。今まで私にとって陛下は、
完全な王だった。厳罰や法を持ってしか統治できないだろう私とは
違い、陛下はその暖かさで、徳で統治する人間だった。そして私の
記憶には、陛下の悲しむ顔や悩む顔はなかった。それは、陛下が意
図的に私には見せなかったのだろうか？ それは分からないが……
ただ確かなのは、私が陛下の表情を見て息が止まるほどの衝撃を受
けたことだ。

しばし沈黙が部屋に下りた。私も公爵も、驚きからの衝撃で声を
出せない。しかしゆっくりと陛下が頭を上げたことによって、再び
時間が動き始める。

「だから……。だから。ずうずうしい願いとは、百も承知してい
る。浅ましい願いとも分かっている。だがどうだろう公爵、どうか
して、秩序を乱さずヴィロウを助ける、そんな方法がないものだろ
うか……？」

それはひどく都合の良い話だが、それを口に出す人間はいない。
それを口に出している人間が一番それを分かっていることが、この場
の全員に分かっていたからだ。

出来ることなら、それを叶えたい。しかし、そのような方法があ
るのだろうか？

私は公爵を横目で見た。私にはそのようなことを可能にする策が

思いつかないが、公爵ならばどうだろうか？

「……実のところを申し上げますと」

公爵が口を開いた。全員の視線が公爵に注がれる。それに怯む事もなく、百戦錬磨の策謀家は続けた。

「陛下がそうお思いであろうとは、予測しておりました。ですので以前から考えていたのです。」

陛下の意を叶える、その方法を」

………流石ですね。反乱が起こったとき、その反乱を鎮めることで手一杯になっていた私たちとは違い、その時点で既に陛下の意に視線を向けていたとは。」

「確かにあります。方法はあるのです。しかし……」

酷く言いにくそうにする公爵。公爵の視線はまず陛下を見て、そしてギンヤで止まった。何かギンヤにも不利益が生じることでしょうか？

その視線に気付いたのだろう、ギンヤは自身を見詰める公爵に対して静かに先を促した。

「続きを」

「……ああ。さて、私が考えた方法は一つ。秩序を保ちつつヴィロウ將軍を救うため……つまり、今回は合法的に將軍を救わねばならないのです。ここまでではよろしいですか」

全員が頷いた。その反応に公爵も頷き、話を続ける。

「私の策では、ヴィロウ將軍をのみ救うことが出来なければ、秩序を保てません。つまり、ヴィロウ將軍以外の反乱に加担したものを殺さねばならないのです」

空気が、凍った。

「そうでなければならぬのです。ええ、そうでなければ今回の例は悪例として残ることになるでしょう。それは避けねばなりません」

「さて、具体的な方法についてです。まず第一点として、ヴィロウ將軍を生け捕りにします。殺してしまつては話になりませんので、ここは良いのですが……問題は次です。反乱軍の人間を、ヴィロウ將軍以外戦場で討ち取ります。兵士は構いませんが、貴族は皆殺しにするのです。今までに捕らえた貴族も、速やかに処刑しておく必要があります」

その苛烈さに、私は瞬きすら忘れた。苛烈さと言うのは、策の内容は勿論、公爵の雰囲気についてもだ。私の目の前の公爵からは、武人の熱さや殺気とは対極的な、静かな凍気が放たれていた。芯まで凍りつきそうな冷たさ。そしてその冷気が持つ、押し掛かるような重み。これが策謀に生きる人間の……。

「そうして、陛下。陛下は宣言をして、シエリス様に王位を譲られるのです。そしてシエリス様が、自身の皇帝就任に伴い、恩赦を發布します。新皇帝就任の祝いとして、反乱に参加したものの全員を許すと。その際に生き残っているのは兵とヴィロウ將軍だけなので、から、目的は達せられるでしょう。少々無理やりではありますが……やるならばこれしかありません」

「それで、実行にあたり問題は？」

私や陛下が口を挟めなかった、公爵の作り出した空間に、ギンヤはこともなげに一石を投じた。何ともまあ、豪胆な……。

「ヴィロウ將軍を生け捕りにすることだな」

「貴族の皆殺しではなく？」

「そちらはどうにでもなる」

淡々と、短い言葉で会話が進んでいく。

「問題は將軍なのだ。貴族や兵との戦闘は、ルーミイやガルフ殿で何とかなるだろう。シンシア様をこちらの事情につき合わせるわけにはいかん。そうになると、君しかいないのだ、ギンヤ君。將軍を生け捕りにする役割が果たせるのは」

「私ですか」

ギンヤの表情は、鎧で覆われていて見えない。唯一見える漆黒の瞳は、瞼によって隠されている。先ほどまでギンヤから放たれていた緊張感はなりを潜めている。しかしいつもの穏やかなギンヤに戻った訳ではない。今のギンヤは、深いのだ。何と言ってよいのかは分からないが……静かな水面のような。自身の深いところに潜ろうと瞑想しているようだ。事実そうして考え込んでいるのだろう、何と言っても一人であるヴィロウ將軍を生け捕りにしなければならぬのだ。そんなことを出来る人間が、果たして世界に居るのだろうか？

ヴィロウ・グレイガルータ。『シルヴィアの絶対守護將軍』の異名を持つ、常勝不敗の戦士。彼が戦場に出れば、刃向う物を全て斬り捨てる。常識外の膂力で振り回される2m近い大剣が作り出す豪撃は、防御することすら出来ない。剣ごと盾ごと、打ち砕かれるからだ。

そんな人間を相手に、実質の一騎打ち。それも生け捕りにするといふ難題だ。私なら不可能ですと断言するだろう。ルーミィやガルフも、シンシアもだ。それに、こう言っては何だが、ギンヤにそこまですで私たち、陛下の為に戦う理由がない。私たちの側が彼に恩がありこそすれ、全く彼には私たちの為にこれ以上命をかけて戦う理由がないのだ。だから当然、ギンヤは断るだろう。それが当然だと思っ

ているし、ここに居る皆もそうだろう。事実陛下も、ギンヤに縋るような眼を向けてはいるが、どこか諦め気味だ。

そう、断ることが当然だ。それが正しく、また彼が取るべき選択なのだ。

ギンヤの瞼が開く。

……どうして？

何故貴方は、そのように覚悟を決めた瞳をしているのですか。

まるで、それを受け入れるかのように。再び自身の命を危険に晒すことを決めたような瞳で。

ゆっくりと銀也の瞼が開かれ、見えた瞳にあったのは、苛烈な意志。普段の穏やかな光はもうどこを探しても見えず、あるのは纏った鋼のような強い意志だけだった。

そうして、全身に黒い鋼を纏った戦士は、もう戻れぬ 不
退転の誓いを口にした。

「分かりました。結果の保証は出来ませんが……全力を尽くす、それは確かに約束します」

そんな、どこまでもお人よしの約束を。

その後、私たちは御前を辞した。今現在私たちは、ソフィアたちも含めてこちらに来た皆でテーブルを囲んでソフィアの淹れてくれたお茶を飲んでいる。既に陛下の名前で、捕虜の貴族を処刑するように関係各所に通達は放たれた。あとは、私たちが戦場で剣を振るうのみだ。

それは確実に成し遂げるとして……私はどうしても彼に聞きたいことがあった。私はカップを置いて、対面に座るギンヤに話しかけた。

「……ギンヤ、少しよろしいですか」

「はい。なんですか？」

「……貴方には、ここまでする義理も何もないはずです。なのに何故？」

「……義理はないですね、確かに」

だけど、とギンヤは続けた。

「寂しそうですね。辛そうですね、陛下」
「ええ。それはそうですね」

まさか、それが理由だとでも？ それこそまさかだ。

「それでは駄目ですか？」

「駄目とはいいませんが……納得は出来ません」

「ああ、やっぱりそうですね」

ギンヤが苦笑した。自分でも苦しい理由とは分かっているようです。そう思う私に、ギンヤは意外な言葉を口にした。

「腹立たしかったから、というのはどうでしょう？」

「腹立たしかった……ですか？」

何にギンヤは腹を立てているのだろうか？

「勿論、私などには及びも付かない考えがあるのでしよう、そのヴィロウ將軍という人には。それにシエリス様たちと関わってきた時間も私とでは比べ物にならないでしょうし、事実シエリス様たちを大切に思う気持ちもその人の方が何倍も強いと思うんです」

「だけどなんでしょう……。確かに將軍には何か考えがあるのでしようけど、それって立場上、基本的には孤独でしか居られない皇帝陛下を、さらに独りにしてまでも貫かなければいけないものなのでしょうか？」

私は答えられない。いつしか部屋に居る人間全員が動きを止めてギンヤの話に聞き入っていた。

「この国のことを私よりも真剣に考えての行動でしょう。国に仕える武人としては、賞賛されるべき行動、まさに騎士の鏡ですよ。国のこれからのために、自身が反逆者と言う汚名を背負ってでも行動する。文字通り、命をかけて。それって凄いと私は思っています」

「けど、言うなれば…… 勿論反論は出るでしょうけど、それはある意味一定以上の地位がある人間ならできる行動ですよ。將軍の考えの一例として陛下が仰った、名高い人間を倒したという箔をシエリス様に付けたいなら、それはある意味公爵にも出来ることですよ」

公爵がギンヤに向けられた視線に、是と頷いた。

「けど…… 友人はそうじゃない。皇帝と言う孤高の地位にいる人間を、一人の人間として支えられる人間って、とんでもなく稀少…… というより、今回の場合は妻か娘か親友か、しか出来ませんよね。なのに……」

段々とギンヤの口調が熱を帯び、早口になっていく。ギンヤはこういう理由ならどうでしょう、とさっきは言ったが、もう私はこれこそが真実なのだと感じていた。

「それを捨ててまで、今回のこれって取る行動だったのか？ そう考えると、『俺』にはそうと思えないんです。俺はそれに頷けない。その人にしか出来ないことがあって、きっと將軍は本当はそれをしたかった。なのにこういう行動を取った。俺はそれがわからない。理解できない。したいとも思わない。俺よりはるかに人生経験はあるだろうし、考えの深さだって向こうのほうが圧倒的に深いでしょう。だからこんなもの、將軍の決意に比べたら子供の戯言なんですよ。けれど……」

「俺は許せない。皇帝陛下の心を痛ませた將軍を。きっかけを作っ

た反乱軍の上層部を。なにより、今こうして血を流して戦わなければいけないこんな状況が。一部の馬鹿のせいで、こんな風に起こっている戦争が。だから……………」

ギンヤの瞳に涙が溢れ始めた。その姿と、いつか要塞で見たギンヤの姿が重なった。あの時は、自身にとっては何か意味を持つだろう技を放っていたときだった。今回は？ 彼は今、戦争に対して憤っている。激情によって、普段どれだけの怪我をしても流さない涙を流している。

「だから止めたい。こんなくだらない戦争を。だから消したい。こんなくだらない馬鹿共を。だからなんです」

「難しいとは思いますが。だけどそのために、俺にしか出来ないことがあるのなら。俺はそれをする。ほかの誰にも出来ることじゃなくて、俺にしか出来ないことがあるのなら、俺はそれを選びます。甘い考えだろうと思えますし、そう思い通りにいくとは限りません。こんなものはただ、欲しいものが手に入らなくて泣き喚いでる、現実を認められない子供と大差ないのかもしれない。だけど俺は、それでも認めたくないんです。そんな、孤独な人を支えられる人間が、さらに孤独に追い詰めるなんて。だから」

そして涙に濡れた瞳に、今度は憤りではなく決意の火を灯して

「ヴィロウ・グレイガルータは…………俺が止める」

その熱を、口から吐き出した。

Side: 銀也

話を聞いているうちに、俺は自分の心に苛立ちと哀れみが沸き起こるのを感じた。前者は孤独だろう王をさらに追い詰める將軍に。後者は孤独である王に。前者はともかく後者は侮辱かもしれないが……それでも俺には哀れに思えた。

「王は孤独なものである」とは誰の言葉だったか……。確かに今俺の目の前に居る一人の王は、孤独に悩んでいるように見えた。そしてそれは目の前のこの人だけではないのだろう。

シンシア、シエリス様。俺の知る二人の王族。彼女達はとうだろう？ シエリス様はルーミイにある程度心を許しているようだ、幼馴染らしいし。ではシンシアは？ 彼女は、家族以外に心を許せる対等な存在がどれだけ居るのだろうか？

周囲に作り物の笑顔を振り撒き、そのたびに孤独になっていく少女。俺はそんな女の子を一人知っている。

財閥の令嬢。才色兼備。完璧超人。高嶺の花。そんな風に噂されて彼女はぎこちなく笑っていた。幼いのに、甘えたい年頃なのに、友達と遊んでいた年頃なのに……それが出来なくて、心で泣いていた少女を知っている。

だからだろうか？ 俺にとってはそのヴィロウ將軍とやらが、彼女の周りで彼女を孤独に追いやっていた人間と重なった。それが許せなくて……だから、俺は止める決意をした。

そんな理由は、所詮ヴィロウ將軍の覚悟に遠く及ばないのだろうけど……それでもそれは、俺が戦いから逃げる理由にはならないし、してはいけないと思う。

また俺は戦場に立つ。そして人を殺すだろうし、殺されるかもしれ

れない。その恐怖ははまだ根強く俺の心に巣食っている。けれど…。

…。
思い出すのは、あの言葉。天幕の中で自暴自棄になっていた俺に
対してソフィアがくれた、覚悟の源泉。

「ありがとうございました。貴方のおかげで、私は今生きています」

それだけで、俺はまた立てる。というより、それだけが俺の立つ理由。そんな他人に依存した、殺人を犯す事についてその理由を他人に押し付けるような吹けば飛ぶような決意が、今の俺が抱えるものだ。

そしてその屑っぷりを遺憾なく発揮した決意のほかには……幼馴染と皇帝を重ね合わせて感じている、見当はずれな怒りと哀れみ。今の俺にはそれしかない。だけど止めたい。

自分でも呆れるような話だけれど……うん、俺にとってはそれで十分だ。笑えば笑え、それでも俺はやる。きつとそれでいいんだ。

……けれど。

俺は知らなかった。この時はまだ何も知らなかった。そう

え、ヴィロウ將軍、そんなに強いのか？

第10話前編：決意（後書き）

孤独だった少女は、幼馴染の詩織ちゃんのことです。主人公の原点は、そのように「周りで不幸になっている人を助けたい」です。だから彼は鍛え始めた、という裏話があります。

第10話中編：決闘開始（前書き）

中編です。正直勘違い要素少ない上に無理があるかな、とは思いますが、今の自分の精一杯を尽くしたつもりです。

第10話中編：決闘開始

重厚な鎧を身につける。盾すら粉碎するらしいヴィロウ將軍を相手に防御力としては期待できないだろうが……それでも普通の矢などが飛び交うことを考えれば、つけていて損は無いだろう。

(……世界最強の相手)

正直、そんな相手とは思わずに衝動のまま安請け合いしてしまったが……。

(……関係ないな)

これが、こういう状況　孤独な人間が、心を許せる相手にさらに孤独にさせられる……そんな、「過去の彼女」の姿を思い起こさせるような状況でなければ、逃げ出していたかもしれない。だけどそう、今回ばかりはだめだ。ここで逃げ出してしまったら、俺は幼い頃からむしろ退化してしまったことになる。

俺はそんな大層な人間じゃない。どこにでもいる、平凡な人間に過ぎない。

けれどここで逃げ出して、ヴィロウ將軍の行動に反抗できないなら　俺は並み以下になってしまう。停滞はしても、退化はしてはならないんだ。それが力への反抗と言うことなら　尚更。

それに、俺はそんな大層な武道家であったり格闘家であったりする訳じゃないけれど……それでも誇りはある。だから背中を向けたくはない、と言う思いもある。

まあ色々と考えたが、結局俺はこの戦いから逃げたくないんだ。

さて、反乱軍の城もついに残すところあと一つである。いい加減決着をつけよう、とのシエリス様の発言からおそらくは最後である軍議が始まった。

最早俺ですら自分が軍議に参加することに疑問を抱かなくなっている。ただの一兵卒なのにね。

S i d e : シエリス

両軍が向かい合う。遂にこの時が来たのだ。私は周りのものに感づかれぬ様に拳を握り締める。

(私自ら貴方の時を止めて差し上げます、リンツ公爵。そして…)

ヴィロウ。

私の剣の師にして、シルヴィア最強の剣聖。彼が反乱軍に参加しなければならなかったのは、私のせいだ。

私が不甲斐無かったから 彼は反逆者の汚名を被っている。

「怖い顔」

考え込む私を現実に引き戻したのは、隣にいたギンヤの声だった。

「怖い顔、ですか？」

私はそんなにひどい顔をしていたのだろうか。

「ええ。こんな顔」

そう言ってギンヤは、なんとも言葉では言い表せない変な顔をした。

「く、あはは、なんですかその顔 ！」

つい噴出す。ダメです、堪えきれません。なんて顔をするのですか、あなたは！ そうして私は、ひとしきり周りの目も気にせず笑い転げた。

まったく、戦いの前だというのに……。

ギンヤによって強制的に肩の力を抜かされた私は、不思議と落ち着いた心で前方の反乱軍、そしてその先頭の巨体を見ることが出来た。色々と気になることはあるが、全てはこの戦いを終わらせてからだ。

脳裏に、今までの戦いが鮮やかに蘇る。反乱軍によって暴行され、血に塗れた少女。

かけがえのない友を己の手によって殺した兵の慟哭。残された遺族の涙、子供たちの目に灯る復讐の炎。そうして引き起こされる負の連鎖。

それを、もうここで終わらせない。いや、終わらせなければならぬ。

裂帛の気合を込め、指示を叫ぶ。

「全軍、抜刀！」

音と共に引き抜かれる刃。刃。刃。

私とヴィロウが一度声を掛ければ、その白刃は血液と火花で鎮魂歌を奏でる。

この草原が、悲鳴と慟哭の木霊する地獄となる。

その引き金を引くのは、私達だ。だからこそ、その罪は私達のものだ。

その罪を負うことこそが、王族である以前に、将の責務。

双方の軍の間に、触れれば切れるような緊張感が漂う。

兵が一人残らず前傾姿勢になり、今にも爆発しそうな氣勢のまま静止し

「全軍、突撃

！！」

戦闘、開始。

Side: 銀也

戦闘前に気合の入りすぎたシエリス様の顔に「怖い顔」と言っ
てしまい、必死に108ある俺の特技の一つ、顔芸でその場を乗り切
った俺は。

戦場のど真ん中を意味する、最前線にいた。

いや、無論ど真ん中に留まっているわけではない。もう全力で全
力で、一瞬たりとも止まらんとばかりに全力全開、チャーイズエ

ンジェルフルスロットルバーニアだ。最早自分でも何言ってるか分からないが、それ位テンパっているということをお察しください。いや、とりあえずあのヴィロウ將軍とやらと接触しないといけなししね……はは、滅亡への道を着実に歩んでいるね俺。

「うおおおおおおおつおおおお!!」

突撃、離脱、突撃、離脱、旋回、突撃、旋回、離脱、突撃……。

来るな来るな来るな、「死亡」と書かれた旗が大挙して押し寄せてくる幻想なんて見えないぜ

!!

現状の作戦は、とりあえずは様子見の突撃。左翼も右翼も中央もとりにあえず現段階ではこちらが押している。いやいや戦う兵と、王国への忠誠で戦う兵士。士気はこちらのほうが圧倒的に上だな。

「はあっ!!」

俺が居るのは中央であり、将はルーミイだ。巧みな槍捌きで、馬上からの確に敵兵の命を終わらせていく。怒涛の3連突きで、一瞬で3人の命を刈り取ると、今度は薙ぎ払いで群がる相手に対して牽制を行う。そしてルーミイは敵の集まりに馬上から掌を向け

バチィッ!

威力はいつかの特務魔道師の雷ほどではないが、範囲が凶悪になった雷が相手に降り注ぐ。流石に魔道師でない以上、タイムラグなしではいかなかったが……それでもそれを補って余りあるその的確に相手を行動不能に陥れる戦術は、見事と言っしかない。流石は王女直属の親衛隊長。

そして倒れ伏した敵兵を、こちらの騎馬が踏んだり、あるいは歩兵に止めを刺されて逝く。気持ちの良い光景ではないが……これも受容しなければならぬ。

そして、30mほど離れたところからルーミイを狙っていた弓兵は、その標的から放たれた短剣で頭部を打ちぬかれ、絶命した。

「このまま、本格的に押し込むぞ！」

墮ちた弓兵には目もくれず、馬上でルーミイは槍の切っ先を相手に向け、更なる突撃を命令した。

「oooooooooooooooo!!」「」「」

親衛隊長の勇姿に勢いづき、さらにその威圧感と勢いを高めた親衛隊500人が敵陣の中央に切り込んだ。その先頭を、銀の髪を太陽の光に煌かせながら、ルーミイは再び死地の中に飛び込んだ。

『將軍を頼む』

一瞬だけ振り向き、俺に向かってそう言って。
俺はそれに頷いた。

(ああ、わかってるよ。……しかし、そろそろ出てくると思うんだけどな)

ジュワァァア！

右翼では、敵魔道師の飛ばした火炎球が、連続で打ち出される水の塊に相殺された。そして次の瞬間には地面が隆起して敵の足場を崩す。そうしてバランスを崩してたたらを踏んだ敵兵は、片っ端からこちらの兵に切り伏せられていく。あちらに居るのはガルフさんだ。

ガルフさんは、魔力量こそあるものの、威力　　つまり一度に使える魔力の量はさほど多くないらしい。しかしそれを技量で補って戦うスタイルらしい。

そして兵士も兵士で、自分達の隊長の戦い方を熟知しているらしい。まるで予めそう行動しろといわれていたかのように、一切の無駄なく敵兵をその連携で蹂躪していく。

こちらを押し切れると踏んだのか。様子見を止めて、苛烈な魔法攻撃が増えていく。ガルフさん率いる魔道師部隊は、その実力を遺憾なく発揮していた。

しかし、こうしてみるとルーミイもガルフさんも、一人で戦うことが前提である戦闘スタイルをしていない。兵士に手柄を譲るといっうか、極力こちらの損害を少なくして戦うという、堅実な戦い方だ。それに対し

ガガガガガガガガガガ！

爆音に釣られて左翼を見た。人が纏めて吹き飛んでいた。

見なかったことにした。

いや、なんていうか……シンシア凄いな。轟音を上げて襲い掛かる、掠りでもすればその部位がまとめて持っていかれそんな魔力弾を連発している。いつぞやの模擬戦で見せたあれだ。

そうやって圧倒的な魔法を見せたかと思えば

フォン、フォフォ、ブオン！

戦場の血生臭い空気を、眩い銀閃が音を立てて切り裂く。その風切り音に合わせ、たん、たたん、と軽やかな足音が鳴る。鮮血と屍に彩られた荒野の中心で、カーキ色の軍服姿のシンシアは舞うように剣を振るっていた。

たん、たた、たたん！

右に、左に、自在に舞い踊る。それは正しく剣舞であり、そこにあったのは目を見張るほどに流麗な身体操作。軽い音を立てるステップは、それに似つかわしくない爆発的な推進力を生み出している。しかしそこに粗雑さは微塵もなく　　例えるならばそう、強風に舞い散る花びらに近い動き。

流れに抗わない、踊るような　　しかし素早い動き。果たしてこれほどの動きを出せるものが世界に何人いるのだろうか。

クルクル。繰繰。回って回って、再び回って剣を振るう。遠心力を利用した剣戟は、シンシアの華奢な体躯から連想される以上の衝撃を敵にもたらず。更には身体強化までかけているのだ、ヴィロウ將軍のように剣ごと盾ごと切り伏せる、と言うことは出来なくとも、一撃で相手の腕を使い物にならなくするには十分すぎた。

もはやシンシアに襲い掛かる相手は居ない。中央と右翼では激しい激突が続いているのに　　シンシアの居る左翼、その一角では音が消えていた。

ふっ、と鋭く呼気を吐いて、纏めて30人は切り捨てたシンシアは動きを止めた。そして体の動きに合わせて舞っていた、艶やかな赤茶色の髪が揺れを収めた。

「　　来ないのか？」

半身になって右手を伸ばし、剣の切っ先を敵に向けたシンシアが静かに問う。およそ戦場に似つかわしくない可憐な声は、しかし相

手にとっては死神の宣告だった。

動く相手は居ない。動けるわけが無い。全員が理解していたのだ。動けば次に死ぬのは自分だと。

「……まあ、どうでもいいがな」

（戦いたくないのなら戦わなければいい……が、それは兵士だけだ。シルヴィアの国王様のためには、貴族は確実に皆殺しにしないといけないからな）

はあ、と一つ息をゆるゆると吐いたシンシアは、一度その明るい宝石のような翠色の瞳を閉じて、次の瞬間瞼を開けて

「突撃」

自身の率いるバリツの軍団に、静かに命令を下した。

『応』

そしてそれに重苦しく応えて、真紅の分厚い鎧と大振りな武器を手にした、突撃力は世界最強といわれるバリツの重装歩兵軍団が ゆっくりとその歩みを始めた。

左翼。敵の壊滅は

近い。

しかし時を同じくして、中央は大混戦となっていた。

そう

ヴィロウ・グレイガルータ。世界最強の、「シルヴィアの絶対守

護将軍』と呼ばれる男が、シルヴィア本陣に向かって進軍を開始していた。

「ちょ、ルーミイ危ない！」

衝撃の、ファースト リッドオ！

「すまないギンヤ、助かった！」

「シエリス様左イイ！」

デイ トーシヨンアタック！！ ええい、伏字にするのも面倒だ！

「す、すみませんギンヤ！」

ええい、数が多い！ いや、兵数なら互角なんだ。けど。

「くそつたれ、無双しすぎだろあのオッサン ！」

そう、おそらくあそこで人を数人まとめて飛ばしてるオッサンが
ヴィロウ将軍とかいうやつだろう。ああ、厄介な。

オッサンが持つ剣、というかあれは最早剣って大きすぎじゃないけど。それが閃く度に人が数人まとめて吹っ飛んで行く。人をピンポイントか何かと勘違いしているのではなからうか、というハジけっぷりである。っていうかなんだよあの馬鹿力、冗談抜きにゴリラか象かってレベルだ。誰だゴリラに剣術仕込んだのは。サーカスでもやるつもりだったのか？

いや、そんなことはどうでもいい。このままでは確実に中央が瓦解する。シエリス様が剣を取らねばならない状況まで、一瞬で押しこまれたのだ。このままではまずい。

ヴィロウ将軍が出てきた途端、こちらの兵士の戦意がガタ落ちした。それはそうだろう、俺もあんなの見たら戦意を喪失する。俺は使命と見栄、怒りでここに居るに過ぎない。

しかしそんなことは今どうでもよく、大事なのは「もう長くは持たない」という現実だ。異変に気付いたシンシアがこちらに単騎で駆け寄ってくるのが見えたが、来てくれたからといってどうにかなるものではないだろう。根本的な解決にはならない。ええい全く、戦術を個人で破壊するなんてありえないだろ。

だから。俺は、ここで一つ決断をした。

恐怖はある。逃げ出したい気持ちも勿論あるし、心臓の鼓動だつてかつて無いほどに大きくなっている。今俺は必死に落ち着いて見えるように演技しているが、果たしてどこまでごまかしているやら。正直な話……俺は將軍の前に立って自分が勝つビジョンは愚か、生き残る情景すら見えない。

だけど、もう決めたから。もう二度と、誰にも孤独を受容なんてさせないと、笑い合える相手を諦めさせないと。だから

「シエリス様、ルーミィ。いったん退いて、戦列を立て直してください。ここは俺が引き受けます」
「「な!?!」」

俺は、俺に出来ることをする。

Side:シエリス

私は最初、ギンヤが何を言っているか分からなかった。いや、それはルーミィもだろう。呆然とする私たちに、ギンヤは再び言い放った。

「一旦退いて、戦列を立て直してください。防衛線を引き下げましょう。殿は俺が務めます」

それは……確かに、こうなってしまったらそれが最善の策だろう。しかし！

「無茶です、そんな！」

「出来る出来ないじゃない、やるんだよ！」

初めてギンヤの怒鳴り声を聞いた。いや、確かにそう長い付き合いではないが……彼がここまで大きな声を出すとは思わなかった。その驚きに硬直した私たちの後ろから、声が聞こえた。

「姫様。ここは、ギンヤ君の言うとおりにすべきかと」
「公爵まで!？」

手に持つ槍も着ている鎧も土と埃に汚れてはいたが、そこにはいつも通りの威厳を纏った公爵が居た。

「このままでは持ちませぬ。ギンヤ君のいう通り一旦退いて、体勢を立て直すことが最善かと」

言いたいことはわかる、だが

!

「むしろそつちのほう为好都合なんです。ヴィロウ將軍を生け捕りにするには、ね」

淡々とギンヤは語る。そこにはまったく恐怖が見えなかった。
あの戦いぶりを見たはずだ。なのになぜ、そこまで平静でいられるのですか？

「……………わかった。いいんだな、ギンヤ」

ルーミイの言葉にギンヤは頷いた。そして私の方をじっとその深く静かな黒い瞳で見詰めてくる。

ルーミイが決断した。ならば私も、決断しなければならないだろう。

「……………わかりました。ギンヤ、私たちは体勢を立て直すために引きます。ここは任せました」

「ええ、了解です」

その非情な命令を

ギンヤは微笑みすら浮かべて承諾した。

「 よう」

ヴィロウ・グレイガルータは、その一言で動きを止めた。その声に特別な威圧感があったわけではない。むしろ、その逆。

戦場に似つかわしくない静かで穏やかな声が
古今無双の
戦士の動きを止めた。

「ふむ。戦場で、なんとも剛毅なことよ。さて、貴様が音に聞こえた黒曜卿か。姫様達を任せるに値する相手か、判断させてもらうぞ？」

「……なんです？ その娘はやらん！ みたいな発言」

「ふ、はは！ なるほど、心境としてはそれに近いかも知れんな！」

「そんなに大事なら自分で守り通せよ……。それはともかく、俺に剛毅っていうのは似つかわしくないかな」

まったくだ。自身の行く手をただ一人で遮るのは、自身に比べれば酷く小柄な青年。鎧を纏っているので顔は見えないが、声から判断するなら、成人すらしていないだろう。

「して何用かな？　そこをどこかぬと卿も彼らの仲間入りをすることになるが」

ヴィロウの周囲には、敵兵の死体がいくつも重なって転がっていた。それも全てが身体はどこか欠けた部分がある。剣で斬ったというよりは、獣が引きちぎったような遺体の状況だ。

「今までに死後の世界に行って戻ってきた人は居ないから、さぞかし向こうは良い場所なんだろうけど……まだそんなに楽をしていい年じゃないかな」

「何、遠慮することは無いぞ？」

「どっちかっていうと、先に行くべきは貴方だと思っただけですね」

戦闘が止まり、言葉の応酬が行われる。彼らの周囲では、二人が作り上げる空間に入れるようなものは居なかった。自然、二人の声だけが響く。

「ふむ、中々に素敵なお誘いだ、俺にはまだやることがあるのでな。ここで逝くわけには行かぬなあ」

「……やること？」

「いかにも。まあ大声で語ることはないがな」

シエリス・シルヴィアの箔付け。彼は、王女自身に討たれるつもりでいた。

「……………そうですね。ま、大体察しは付きますけどね……」

…」

グイロウが「やることがある」と言ったあたりで、青年の雰囲気が変わった。静かで穏やかな静寂の水面が、全てを焼き尽くす焰と化す、そんな予兆へ。

「それで？ そーれーでー、貴方は究極の自己満足にのっとなって、孤独な人を更に孤独にして死んでいくんですねー。いや、いっそ清らしいまでの俺カツコイイですねー」

がながん。がながん。

言葉の上辺こそ丁寧だが、完全に青年は苛立っている様だった。彼自身、それは見当違いかつ甘ったれた怒りだと理解しているが…
…それでもそれを隠すことなく、ひたすらにブーツの先で地面を打ちつけている。

「それが貴方の誇りでー、それが貴方にとっての満足なんでしょうけどー。それならいっそもしないほうがましな気がしますー。あ、あくまでこれは甘ったれた理想論振りかざす子供の戯言ですけどねー？」

がながん。がながん。

「……………ふう。俺はあまり気の長いほうではない。用件を言え」
「あ、そうですかー？ ごめんなさいね、ついつい時間稼ぎのためにだらだらとくっっちゃべっちゃいましたー」

がながん。がながん。

「んじゃ、用件です。」

そこで暫く寝ているジジイ」

今までブーツを打ち付けて作った引つ掛かりを利用し、前触れも無く一直線に、ギンヤは飛んだ。

Side：駆けつけてきたシンシア

ヒットアンドアウェイ。詰まる所、突撃と回避を繰り返すのがギンヤの戦闘スタイルだと思っていた。しかし、彼はそれだけでは無いということを私は思い知らされた。

圧倒的な破壊力を誇るヴィロウ將軍の剣と、凄まじい量の魔力を使った身体強化で強化したギンヤの拳が交錯する。不意打ち気味で

繰り返されたギンヤの一撃だが、ヴィロウ將軍には意味がなかったようだ。しかし、少し驚いた顔をしていることから察すると、將軍の予想を裏切ったのはその威力だったようだ。

本来パワーでギンヤが將軍に適うわけではない。だが、彼の身体強化が加われれば話は別だ。元々の体重差ゆえにギンヤの方が押されがちだが、確かに彼はあの將軍と正面から渡り合っていた。

ギンヤの左中段回し蹴りを、將軍は剣で防ぎ、そのまま横薙ぎを一閃。ギンヤはしゃがんで避け、そして將軍の次撃を地面を転がることでやり過ごした。

「はあっ！」

その次の瞬間に、私は自身に出せる最速の突きを將軍に撃った。

威力は度外視だ。それは流石に簡単に避けられたが、私が参戦する隙は出来た。將軍から10mほど離れたところに居るギンヤの隣に並ぶ。

そして次の瞬間に隣のギンヤからかけられたのは、予想外の言葉だった。

「ちよ、え、何來てるのさ！？ 危ないから下がって！」

……………は？

一瞬思考が停止した私を誰が責められよう。ギンヤはどうやら一人で將軍の相手をするつもりだったらしい。

「あ、危ないのは君だばか者！ 一人で將軍とやりあうつもりだったのか！？」

「そうだよ。ちょっと色々あって俺はあの人を生け捕りにしないといけないの！ これはシルヴィア側の完全な私的な事情だから、こ

んな火遊びにシンシア巻き込めないんだって！ わかったら下がって！」

「ふざけるな！ そんなことが関係あるか！ シルヴィアだろうがバリツだろうが、私は君たちと共に戦うと決めたのだ！」

「シンシアがそうでも、君が怪我でもしたら国際問題になるの！」

「たわけ、武人の国であるわが国の王が、戦いにおいて怪我をすることや場合によって死ぬことを考えていないとも思ったか！ 私を戦いに派遣した以上、その程度の事は織り込み済みだ！！」

「武人過ぎるだろバリツ！？ 皇女だぞ皇女！？ 気にしろよ！？」

「それが私たちだ！」

「ああもう俺にどうしろとー！？」

ルーミイちよつとこの人連れてってー！ と錯乱気味に叫ぶギンヤだったが、そこで待つてくれるような相手ではなかった。

「ふむ、なにやらそちらで意見の相違があつたようだが……行くぞ？」

その言葉を言い終わるや否や、一直線に今度は將軍がギンヤに向かう。

「ふっ！」

迫り来る將軍に対し、ギンヤは短刀を投げつける。身体強化で底上げされた臂力から投げ出された恐るべき武器を、グラン將軍は片手での薙ぎ払いで吹き飛ばした。そのまま突進した將軍は、勢いよく振りかぶって大剣を打ち下ろした。

しかしそれを、ギンヤは真横に高速移動することによって避けた。

ドガアッ！！

轟音を上げて地面が陥没する。どうやら手加減なしの一撃だったようで、將軍は地面まで大剣を振り下ろした。一瞬硬直した瞬間に、ギンヤが攻撃を打つ。

「ぜっ！」

「しっ！」

ギンヤの右拳と、將軍の大剣が衝突した。硬直は一瞬、ギンヤは後ろではなくまたしても横に移動した。

「はあああっ！！！」

四連撃。左拳右拳左足右足。一発でも当たれば即戦闘不能になるだろう猛攻は、しかし將軍の身体には掠りさえしなかった。その重厚な 巨大な鉄塊と表現してもよいかもしれない 大剣によって全て阻まれる。

ギンヤの纏う鎧と將軍の大剣が衝突するたびに火花が飛び散る。繰り返される一撃一撃が悉く必殺。そしてその戦いを見ていた私には、もう自分がここでできることは無いということが理解できた。ここまで「入り込んで」しまっている以上、私が手出しをすれば邪魔になりかねない。

先ほどまで食い下がっていたのが 馬鹿みたいだ。

自嘲の念が私を襲うが、そうならそうで他にやるべき事がある。私は体勢を立て直すために下がったシエリスたちと合流することにした。左翼の私の兵は大丈夫だろう、副官が優秀だ。

「武運を。ギンヤ」

私は駆け出した。

Side：防衛線を引き下げるために下がって隊列を立て直しているシェリス

ここからでも、両者の戦いはよく見える。そこだけ周囲が空白になっているのだ、よく目立つ。

戦場を舞い続けるは、古今無双と漆黒の若武者。

回避。回避。最初の応酬の後はギンヤは己から攻めることをせず、回避に徹している。それは様子を伺っているようにも、圧倒的な破壊の前に逃げているようにも見えた。

「避けてばかりでは勝てない、それはそうですが……」

むしろ、避けられているだけで、ギンヤの能力の高さが伺える。ヴィロウは、ギンヤと同じくらいの速度で、かつ人を数人まとめて投げ飛ばす豪腕で大剣を振るっているのだ。

「よく避ける。だが、避けてばかりで勝てんぞ　！」

尚も彼の速度が上がっていく。最早私たちには、彼が何をしているのか分からなかった。

回避と離脱を繰り返すギンヤを、将軍が追い、死の刃を振るう。その一撃が地面に撃ち付けられる度に轟音が鳴り響き、大気が震える。地面が陥没し、地震かと錯覚させるほどに大地を揺らす。

『シルヴィアの絶対守護将軍』。他国からは恐怖の、国内からは尊敬と畏怖の的となっている武人の前に、ギンヤはなす術もなく逃げ回っているように見えた。

そして、尚もヴィロウの速度が上がる。ギンヤを疾風とするなら、ヴィロウは閃光だ。このままではいずれ追いつかれるだろう、という事は全員が感じていた。

ギチツ、と布が擦れる音が隣から聞こえた。手袋に包まれたシンシアすでに彼女の拳からは血が滴り落ちている。

横を見れば、公爵は噛み締めすぎた唇から血を流しているし、一見一番普通に見えるルーミイでさえ組んだ腕に爪を立てている。隊列を建て直している間は、私たちはそれが終わるのを待つだけだ。中央まで攻め込んできた相手は、今はガルフが食い止めている。最大要因であったヴィロウがいなければ、十分にこちらでも対応可能なのだ。しかし……………。

なんともまあ、と胸中で苦笑しつつ呆れる。

本来動揺を見せてはならない将たちが、揃いも揃って

(まあ、人のことは言えませんが)

気を抜くと、私も皆と同じように動揺を表に出してしまいそうなのだから。そしてそんな私たちのほうを、ヴィロウは一瞥した。距

離があるのに、すぐ彼が目の前に居るかのよう錯覚する。

しかしそんな一瞬の隙を見せたヴィロウに対し、ギンヤは攻撃を仕掛ける。一瞬すら逃さないその姿勢が、ギンヤが陛下から受けた願いを真剣に叶えようとしているのを、またギンヤの勝利への執念を感じさせる。

ヴィロウの一段と上がった速度に対抗するが如く、ギンヤは速度を更に上げ、ヴィロウと同程度の速さにたどり着いた。火事場の馬鹿力、というやつだろうか。

とにもかくにも、これでなんとかしばらくは持つか、と皆が安堵した矢先。

再び大剣を振るい、ギンヤに接近するヴィロウ。今まではギンヤの速さに追従できる敵がいなかったため、物理攻撃など彼には通じなかった。しかし、ヴィロウが相手なら話は別だ。彼はギンヤの速さに追従できるどころか、下手をすると上回る可能性があるほどの猛者だ。

物理攻撃には、彼は対抗手段を持っていない。その弱点を、見事に突かれた形となった。

一撃一撃がギンヤを掠めそうになるたび、隣のシンシアが動揺するのが分かる。いや、彼女だけではなく、こちらの陣営の将全員がそうだった。

空に暗雲が立ち込め始めた。雨が降るのだろうか？ しかしこのタイミングでの変化は、何かの前兆のような感じがする。

その曇り空は、まるで私たちの心境を代弁するかのようだった。

S i d e : 銀也

拜啓、元の世界のお父様、お母様、親愛なる幼馴染、同じく親愛なる後輩に友人諸君。

俺は今、間違いなく人生最大の命の危機、というかぶっちゃけ詰んだ状況に直面しています。

そりゃあねー。剣術使えるゴリラ相手にするって、どんな状況だよって話だよねー。

「ふむ。戦場で、なんとも剛毅なことよ。さて、貴様が音に聞こえた黒曜卿か。姫様達を任せるに値する相手か、判断させてもらおうぞ？」

「……なんです？ その娘はやらん！ みたいな発言」

「ふ、はは！ なるほど、心境としてはそれに近いかも知れんな！」

「そんなに大事なら守り通せよ……。それはともかく、俺に剛毅っていうのは似つかわしくないかな」

この親ばかりか！ いや、ばか親か？ 俺はいわゆるただの娘の友達的ポジションなだけなのに、モンスターペアレントってレベルじゃねーぞ！

それから会話を少ししているが……だめだ、言葉を交わせ

ば交わすほど苛立ちが募っていく。

……ああ、もういいか。これ以上の時間稼ぎは出来そうに無いし……何よりこれ以上会話をしたら完全に平静を保てなくなる。將軍のほうに俺より覚悟もあって、また正しいのかもしれない。けれど俺はそんなことを……彼のすることを認めたくは無い。だから、

そろそろ、逝き時だろう。

「んじゃ、用件です。」

そこで暫く寝ているジジイ」

震える足も力む拳も爆発しそんな鼓動も全て無視して
は飛び掛った。

俺

ガァンツ！

「ちいっ！」

不意打ち気味で俺は將軍に初撃を加えた。初めから通じるとは思っ
ていなかったが……

(……ここまであっけなく防がれるかね)

少し見せた驚きは、おそらく俺の身体強化の出力にであって、攻
撃そのものではないだろう。今の程度では意表を突くことさえ叶わ
ないということがわかった。

ガギヤァンツ！！

硬質の衝突音が鳴り響く。初撃の右ストレートの後に繰り出した
左ミドルキックと將軍の大剣が交錯した。

(うあっ、重　　！？)

俺の身体強化の出力はかなり強いというのに……それでも目の前
の巨体は揺るぎもしない。大剣を立てるようにして、大剣の腹の部
分で俺の蹴りを受け止めた將軍は、その位置からそのまま俺の首を
分断する横薙ぎを放ってきた。

ブォンツ！！

すんでのところでしゃがんで交わしたが、頭上を通過する大剣と
それが発する風切り音に、背筋に冷たいものが走った。しかし、こ
こでしゃがんだままでは不味い！

頭で考えるよりも生存本能が警鐘を鳴らすほうが速かった。その
衝動にしたがって恥も外聞も無く地面を転がる。そして次の瞬間、
俺はその行動が正解だったことを確信した。

ドゴオンッ！！

これが人間が出せる攻撃なのか。いや、実際にそれをなした人間が目の前に居る。しかし俄かには信じられなかった。なぜなら

(地面が、抉れ　！？)

否、そのようなものではない。そんな生易しいものではない。たった一撃。目の前の存在はたった一撃で　5 m四方の面積の土を、深さにして3 m以上消し飛ばした。

(　ありえない)

思考が止まる。しかし幸運だったのは、身体までは止まらなかったことか。目の前の怪物の前では、一瞬の間が文字どおり命取りとなる。

これは予想以上だな……。

決して油断していた訳でもなければ、希望的観測をしていた訳でもない。この世界での猛者、シンシアを基準にして考えうる限りの難易度を覚悟していたが……随分とその上を行ってくれた。

なんというか、やり辛い。大剣で叩き斬るっていう西洋的な剣術ではあれど、所々日本の剣術みたいな繊細さも兼ね備えてるし……いいところ取りつてずるい、というか、矛盾してる。おかしい。いや、それが最強たる所以なんだろうか？ 反則くさい……っていうか、俺の能力なんて目じゃないチートだ。

シンシアもきちんと追い返したところで……さて、どうしようか？ さっきまでの攻防で把握できたのは、相手が俺の予想以上に規格外だということ。そして正面から愚直に挑んでも勝ち目は薄いということだ。正面から挑んでガチバトルした所で、調理される魚よ

ろしく三枚におろされるか、トマトのように潰されるのがオチだろう。打開する方法を探すために……ここは逃げの一手に徹せざるをえない。

き、機会を伺ってるだけなんだからね!? 別に逃げてるわけじゃないんだから!

……いやまあ、逃げの一手とは言っちゃったけど。

そのちよつと後。

「よく避ける。だが、避けてばかりで勝てんぞ　　!」

正面から行つたつて勝てねえよ馬鹿か!?

いや、ねえ? 地面が陥没するわ、地震おこすわ。剣が発してる風切音も恐怖を掻き立てるのに一役買っている。あんな一撃、掠り

でもしたらその部位が丸ごと持っていかれるだろう。さっきのシンシアズ魔力弾を剣で凌駕するとはこれいかに。

(兎にも角にも　　！)

平静を保ち、無謀な行動はしないようにしなければならない。やけになつて突撃したところで勝機は無い。今はとりあえず打開策を探すために時間を稼がなければならぬ。

とにかく逃げる。逃げる逃げる逃げる、体力の限り逃げる。少なくとも今はまだ、こつちから攻撃できる状況じゃない。突撃したら野球ボールの如く打ち返されてホームランされるに違いない。ホームランで葬らん。今俺うまいこと以下略！

しかしいつまで続くのだろう、これ。どんどん自分の体力が消耗していくのが分かる。

対して將軍の速度は、一向に衰えない。どころか、なんか一段階上がってるんですけど！

あーやばいやばいやばい、追いつかれる！

うああああああああああああああああああ！

なんてね。

既に手は考えてある。一体俺の何が將軍に勝っているか。それは、「速度だけ」だ。そしてそこで勝負することが、俺か勝つために必要なことだ。

ギリギリまで　　文字通りギリギリまで、速度を制限する。全力を出している振りをして全力を出さず、「横に」避ける。極力前後の動きはしない。真っ直ぐ下がるといふのはこの場ではまずい。追い込まれて追い込まれて、本陣まで押し込められたら目も当てられない。幸い將軍も俺との追いかけっこに付き合ってくれてるみたいだしね。

……そこを、利用する。

「ふむ、人望は合格のようだな」

何故か一瞬ちらつとシェリス様たちのほうを見た將軍に対し、俺はやりたくもない攻撃を仕掛ける。いやだって、「あーこいつの相手飽きたなー」って感じられて、本陣に切り込まれたくは無いしね。

ところでさっきの台詞は何だ？ 人望が合格？ 誰も助けに来てくれない俺に対する嫌味ですか？ あれか、皆心配そうにしてくれているのかな。そうなら嬉しいなあ。

……さて、もう少し頑張ろう。もう少しの辛抱だ。きっと。

Side: シンシア

このままでは負ける。それは間違いない。遅かれ早かれ、將軍の振るう死神の刃は、ギンヤの命を刈り取るだろう。

とはいえ、打開策は私には全く無い。どうしろというのだ。見ている他はなく、出来ることは友の死を待つことのみ。

「どうしたどうした、貴様の力を見せてみる！逃げるだけが能ではあるまい」

今もなお、一方的な戦いは続いている。いや、これは戦いと呼べるのだろうか。

(まさかここまでとは

！)

なるほど、シエリスをして「絶対に勝てない」と言わしめるのも納得な実力だ。その速度は閃光の如く。その力は破城槌の如く。

將軍は魔法的な要素を抜かせば、間違いなく世界最強の人物だろう。そしてそれに相對するは、私と同じ年の少年。むろん少年とて、並大抵の人物ではない。いや、間違いなく一流、あるいは超一流の力を持っている。疑いなく、こちら側では最強クラスの人物だろう。だが、その少年すらも、文字通り手も足も出ていない。

私は、自分の胸の中に、冷たい重いものが落ちるのを感じていた。將軍がギンヤに接近するたび、無残な姿と化したギンヤが幻視される。大切なものを失う恐怖に、私は体の芯から震えていた。

私は、無力だ。

私を血筋抜きで見てくれる、私とは違う境遇の人間では初めてともいえる友人の命の危機を見ていることしか出来ない己に、ひどく腹が立った。

力が欲しい。

全て護り通せる力を。全てを壊して全てを殺せる
そんな
力でもいいから。

とにかく今は、力が欲しい。

駆け出したくなる衝動に駆られた私に、戦の前にソフィアと交わした会話が思い出された。

「ギンヤは危ない人です」

「……………唐突に何だい？」

……………危ない人。いや、おそらくギンヤのことを案じての言葉なのだろうが、それではギンヤが危険人物だといっているようなものだぞ？

私の視線で自身の失言に気付いたのか、ソフィアはわたたと両手を振る。その様は女の私から見ても可愛らしい。

「あ、いえ、そうじゃなくてですね！ 危っい、と言いたかったんです」

「危っい……………」

ギンヤの在り方か？ 確かに彼は決して自身を全て捨てているわけではないが、少なくとも蔑ろにはしているだろう。危っい。それは私も感じていたことだ。

「まあ、言いたいことは分かる」

「そうですね……………。私、唐突に不安になることがあるんです」

視線をソフィアに向け、続きを促した。

「何故か……本当になぜかは分からないんですけど。ギンヤは絶対に諦めないし負けたくないと思うんです」

「それには異論を唱えたいところだが……まあいい。続きを」

「負けない、と言うのはありえないだろう。世の中に絶対は無い。

偶然出した一撃が圧倒的強者の命を絶つてしまうことだってあるのだから。」

「続けます。けれど、彼はその為に、自身であればどのような代償でも払う気がするんです」

「それは……」

「言わんとするところは分かる。いや、分かりすぎる。私自身それは懸念していたことだったから。」

「彼は勝利と言う結果……いや、違うか。周りの人間が傷つかなくすむ、という結果を得るためならば傷つくことを躊躇わない。そしてそれは、時に敵対している人間にも適応される。いや、私を助けたのは私が同盟国の人間だったからか？ それはさておき……彼のそのあり方は確かに歪んでいる。優しいと言う言葉では片付けられない、ひどく自身を度外視した在り方。」

「だから、私にはそれが怖いんです。ギンヤは分かってくれているのでしょうか、不安になるんです。彼が傷つけば、私たちは笑ってられないと言うことに」

「……気付いていないかもしれないな。しかし、気付いたところで止めるとは思えない」

「はい、と儚げにソフィアは微笑んだ。それは笑っているのに、泣きそうにも見えた。」

「だから……こんなことをお願いできる立場ではないんですが……。私は戦場では役に立てません。だからシンシア様、もしギンヤがまた無茶をしようとしたら……」

止めてくれ、ということか。それは言われずともやるつもりだった。ソフィアの言葉を遮って彼女の望む答を返そうと思った刹那、私は予想外の言葉を聞くことになった。

「ギンヤを止めないであげてください」

衝撃。

「……………え？」

意味がわからない。私は今何を言われた？ 誰よりもギンヤを案じているだろうこの子に……私は何を言われた？ 止めないでくれと……彼女はそう言ったのか？

「ギンヤは危ういです。見ているこちらが不安になるくらいに」

「ギンヤは優しいです。見ているこちらが怖くなるくらいに」

「ギンヤは強いです。目の前の敵が誰であれ、ねじ伏せられるくらいに」

「……………ただギンヤは脆いです。彼を取り巻く誰かが失われたら……………彼にとってそれはきつと死より辛い」

「……………」

呆然とする私の頭に、ソフィアの言葉が流れ込んでくる。

「だから……。だから。ギンヤにそんな思いをさせるくらいなら、いつそ……………」

彼にとっては、死んだほうがきつと幸せです。

その後のことを、私は覚えていない。どうやって部屋に戻ったのかすらも。記憶が完全に空白となっていた。

私が覚えているのは、ただ……。

微笑みながら涙を流すソフィアの姿だけだった。

だがしかし。私は、このソフィアと言う少女を

悔っていたのだろう。

それは後々わかることであつたが……このとき彼女はそう言いつつも、一つの決意をしていたのだ。

ギンヤにとつて究極の脅しにして、最大の抑止力。彼女は後に、それを切り札としてためらいなく使用することになる。

「ギンヤ。貴方が死んだら、私も死にます」

第10話中編：決闘開始（後書き）

戦闘描写難しいです……。

第10話後編・決着（前書き）

長かった……。

第10話後編：決着

咲いては消える火花は、兵つわものどもの命。

鳴り響く轟音は、昇り逝く魂への歌。

荒野を駆けるは、二人の戦士。

戦場に舞うは 古今無双と世界最速。

剋目せよ。あれから目を背けることは許されない。
心に焼きつけよ。あれが誇りを背負いし者達の戦。
魂に刻みつけよ。あれが我らの。

「黒曜卿伝」127頁より抜粋。

(ちいッ ！)

高速移動後の着地の瞬間という一瞬の隙を逃さず、將軍の刃の切っ先が俺を襲う。先ほどまでの俺の速度を上回る速度での突進力が上乗せされた攻撃に、俺は再び前に出ざるをえなかった。

ガキイーン！！

(あぐっ、重 ！)

斜め前に踏み込むことで、迫り来る突きを「受け止める」ではなく「受け流す」ようにしたというのに、そのような小細工を嘲笑うかのような激しい衝撃が腕に走る。否、そんな生易しいものではなく、その衝撃だけで右腕の感覚が消失した。

(これじゃ、まだ遅いか　！)

俺が最終的に勝つためには、まだ全力の速さを出してはいけない。しかし、どこまで出せば逃げ切れるかも分からない。そのジレンマが一瞬一瞬神経を擦り減らしていく。

距離をとるために苦肉の策として、真っ直ぐ後退する。しかしそれで取った距離などたかが知れている。事実、將軍はたったの三歩で再び俺に肉薄した。

鋭い呼吸と共に、胴を分断する横薙ぎが振るわれる。その広範囲の攻撃に対しては、俺は再び直線的に後退するしか成す術が無かった。直後に追撃として繰り出される、中心線を狙った三連突き。辛うじて避けるも、甲冑の肩の部分が持つていかれた。幸い負傷はしていないが、直撃でもないのに鉄の塊を消し飛ばす剛撃に肝が冷える。

(く、あ　)

古今無双　その言葉の意味が痛いほどにわかる。何をしても防がれ、何をしても防げない。速さだけならトップクラスであるう俺をして完全回避が不可能なのだ。たとえシンシアであっても、この目の前の怪物の相手は無理だろう。

「ああああッ！！」

苦し紛れに短刀を投擲するが、振るう剣の風圧だけで無効化される。そして次の瞬間には、一瞬前まで俺がいたところに大剣が振り下ろされていた。仮に俺が地面に転がって避けなければ、今頃砕けていたのは地面ではなく俺だっただろう。そして吹き上がったのは土煙ではなく、俺の血液だったに違いない。背筋に走った悪寒を無視して瞬時に体勢を立て直し立ち上がると、將軍は剣を打ち下ろしきつた体勢を解いた。

「……………ふむ。中々良く避ける」
「生憎、それだけが取り柄です」

軽口を返している余裕があるように見えることぐらいしか、俺には出来なかった。

（ありえないだろ、本当に…………）

機会は必ず来る。問題は…………俺がそのときまで生きていられるかだった。

Side：隊列は立て直したけどなんか決闘になってしまっているので手が出せないシエリス

決闘は続く。

しかしそれは形式上決闘であるだけの、一方的な展開を見せてい

る。ヴィロウが追い続け、ギンヤが回避する。ヴィロウの圧倒的な破壊によって、もはや地形は変わっていた。

平らだった草原は、広範囲殲滅魔法を連発したかのような有様となっている。最早荒野となった戦場を、2人は踊る。

一つの振り付け間違いが命を奪う、死の踊りを。

絶え間なく交錯し続ける両者。魔力の消費によってその速度は減少するどころか、更に上がって行く。一秒ごとに上の段階に。一瞬ごとに更に速く。

残り少なくなる魔力、消耗して行く体力。その「残りの力」を以下に効率よく使うか、と言う事に対して、この二人はひどく貪欲だった。いや、少なくともギンヤは貪欲であらねばならなかった。

もう息も出来ないほどに、もう瞬きも出来ないほどに。自身の心臓の鼓動すら煩く感じほどに。見入っていた。魅入っていた。私達は、もう身動き一つ取れなかった。目の前の光景は、それほどのものだった。

ただ単純にギンヤが「速い」だけならば、ルーミィ、あるいはシンシアだってギンヤには対抗できるだろう。

しかし、この二人はギンヤに勝てるとは思っていないだろう。私も、勝てるとは思わない。ただ速いだけならば、いくらでも方法はある。

しかし、ギンヤは「ただ速い」だけではない。ギンヤの真骨頂は、速さと、「動きの読めにくさ」にある。

普通なら、戦いに精通したものならば避けるであろう回避方向に進む。自分が決めた最良手を、一瞬の躊躇いも無く打ってくる。それは巧緻なフエイントと化し、相対するものを驚かせる。

まるで素人が速すぎるスピードに振り回されているかのような（実際、ギンヤに限ってそのようなことがある筈は無いのだが）、複雑で読めない動きで、あのヴィロウからすらも逃げ切っている。

けれど、それは「今」はまだ、ということだ。このまま進んだところで、いつかはギンヤは捉まるだろう。それが一秒先か、五分先か、一時間先かはわからないだけで。

一瞬一瞬、ヴィロウはギンヤを追い詰めて行く。
その刃が、少年を斬り殺す瞬間まで

もう決闘の開始から何分経っただろうか。既に日は沈もうとしている。茜色の光が兵の鎧に反射する。その中を、二つの影は駆ける。周りの兵が誰も動かない中で、目まぐるしく動く両者。一瞬一瞬に

速度を上げ、二人は尚も進化して行く。

ギンヤは圧倒的に劣勢なれど、戦いはそれでも永遠に続くような錯覚を見せる。

しかし、全ての物事には終わりが存在する。そしてこの戦いも、例外では無かった。

そして、緊迫し、拮抗したものほど　その終わりは唐突であっけない。

「ふむ。このままでは埒があかな……」

追いかけてこの様相を呈していた決闘のさなか。ついにその状況を打破するような、戦局の動きが訪れた。突如、ヴィロウが止まったのだ。釣られてギンヤも距離をあげ、静止する。

そうして。

「やれやれ、こういうのは苦手なんだが……」

ヴィロウは大剣を地面に突き刺し、両手を掲げ。それにギンヤは怪訝な顔をするも、警戒は解かない。

そして、戦場に魔力が吹き荒れた。

「我が請うは汝が力の片鱗。聖を邪とし邪を聖とする、呪詛反転の詩。我が魔力を捧げ贄とし、理を曲げ詩を願う。我が願うは破壊にあらず、我が願うは破戒に非ず」

そうしてこの決闘で初めて、呪文の詠唱を開始した。しかし、あの詠唱。まずい。あれは、

「ギンヤ！ あれを撃たせるな、止める！」

私より先に気付いたガルフが叫ぶ。そして弾ける様にギンヤは飛び出した。だが、

「我が願うは滅魂の詩。彼の罪人に安らぎを」

時はすでに遅く。圧縮された魔力が牙を剥いた。

將軍の動きが止まったとき、ギンヤは警戒して距離を開けていた。それが逆に仇となった。將軍の持つ上位攻勢魔法は発動し、幾つもの白と黒の光弾が、ギンヤに降り注ぐ。

ギンヤは避け続けた。あれは吸収できないレベルの魔法であり、当たったらよくて大怪我、悪ければ即死だ。それを理解しているだろうギンヤは、更にスピードを上げて回避に徹する。どこにあれだけの力が残っていたのか。今までの中で最も速く動き続ける。

しかし、それでは足りなかった。

魔法が発動してから40秒ほど経過した瞬間、ついに有効打が入った。

それは詰まる所、將軍の顎あごが、ギンヤを捕捉した瞬間だった。直撃は辛うじて避けたのは流石だが、それでも戦闘にかなり支障をきたすほどの怪我だ。

將軍の放った光弾は、確実にギンヤの体に傷を与えて行く。

白と黒の光の弾に吹き飛ばされて行く少年。放たれた魔法は地面を穿ち、砂礫を巻き上げて。

少年を30m以上吹き飛ばしてから、ようやく収まった。

この瞬間、私達は彼の勝利が消えたと感じた。そして、それはつまり。

あの少年の、ギンヤの、命は。

Side: 銀也

体を突き抜けるような衝撃。頭が真っ白になり、意識が遠のく。次いで襲ってくる、全身を巨大なムチで打ち抜かれたかのような激痛。灼熱の炎で全身を焼かれるような熱さの中、それでも敵の姿をばやけた視界で探す。

俺に大ダメージを与えた敵は、右手にその分身を携え、見下すようにこちらを見ていた。

(弾幕ゲーかよ、畜生……。俺は悪をぶっ飛ばす少年探偵でも、巫女服着た人類の決戦存在でもねえぞお……………?)

ああ、ドジッたなあ……。近接戦闘だけかと思いきや、まさかここまで強い魔法が使えるとは思っていなかった。しかし、この実力差は如何ともし難い。既にこのダメージを負った体では、闘争も逃走も不可能だろう。

(今俺、うまいこと……………)
思考すらままならない。打開策を考えようとしても、遠のく意識との戦いがそれを邪魔する。

(仮にするとするならば)
玉砕覚悟の一撃か。けれどどう足掻いても、成功するビジョンが浮かばない。

(このまま、死ぬのかなあ……………)
「死」。そう長くない人生の中で何回もそれについては考えたことがあったが、まさかこの歳でそれを体験する直前の事態に陥るとは思わなかった。いや、そんなものじゃない。今まさにそれを迎えようとしている。

(死んだら、どうなるかなあ……………?)
何も無い、虚無か。あるいは天国、はたまた地獄か。あるいは「

元の世界に」

(あー、あつちはどうなってるかなあー)

両親、はなんだかんで悲しむだろう。特に不仲でもなかったわけだから、先立つ息子の不孝を呪うのは当然か。

詩織、は怒りながら悲しむに違いない。正直、何を持ってしても彼女は泣かせたくないのだが。

無口無表情、だけど俺には懐いてくれた後輩。彼女はどうかだろう。

(なんとなく、泣きそうな気がする……)

無表情のままボロボロと。なにそれかわい。なんだかんで俺は、「あつち」の人には大切にされていたし。

(あつちがこうなら、こっちはどうなるかな)

そこまで考えて。

俺は、全身に氷水をぶっ掛けられたような気がした。

(待てよ)

あつちは、悲しむ。悪く言えば、「悲しむ」だけだ。無論、俺の死を知ればの話だが。しかし、「こっち」は、それだけでは終わらない。

(世界自体は俺がいなくなっても、変わらず続くだろう)
そう。俺が死んでも、このままこの世界は続き

次に、誰かがあの怪物と戦うことになるのか。

(あの、人間辞めるとしか思えない怪物と?)

シンシアが? ガルフさんが? シェリス様? ルーミイだろう
か? あるいは公爵?

將軍はともかく、貴族たちは止まらないだろう。ならば、反乱軍
が向かうのは。こちらが負けた先には

ノイズが走る。

俺から見ても、そんな俺は、余りにも

無様。

認めない。

認めてなるものか。彼女が傷つくなどなど、認めるわけにはいかない。

「星宮銀也」として、それだけは許容できない。何を持って、なにがあっても。

それだけは、絶対に認めるわけにはいかない。

ならば、俺がやるべき事など、とくに

(ふざけるな)

意識が、覚醒する。

(ふざけるな)

手足に、力が入る。

(ふざ、けるな)

頭が、沸騰して

(ふざっけんなあああああああ!!)

世界が、色を取り戻した。

起きろ、俺。寝てる場合じゃ、ないんだよ。

そうだ。起きろよ。こんなところでさ、お前も眠ってるわけには
いかないだろ？

だから……起きろ。

俺の体の周りに、自分でも呆れるほど禍々しい……不吉で膨大な
黒い魔力が顕現した。理由など分からない。ただ今の俺には、都合
がいいとしか思えない。

「はっ、魔法まで使えるのかよ……」

OK。もういいだろう、逃げるのは止めだ。俺はもう、十分逃げ
た。これ以上引き伸ばせば……文字通り何も出来ずに死ぬ。

本来はもう少し今までのスピードを全力だと錯覚させてから行き
たかったけれど……こうなってはやむを得ない。今だってこの状態
では、遅すぎるかもしれないのだ。

「ほう、案外しぶといな。外見からはそうは見えなんだが」
「……残念ながらポロボロだよ。ただ、ね……。ちよっと一人の女の子が最悪な状態になるビジョンが浮かんだら、寝てなんかいられなくなつた」

まさか。もう体調は最悪だ。視界はぐらついて霞むし、手足だつて鉛のように重い。頭だつて大して働かないし、今俺が立っているのかさえ定かではない。

「まったく、吸収しきれない魔法か……。いつたいな、畜生」

こうして息をするだけでも、全身を、痛みを超えた熱さが駆け巡る。しかし、許せない現実が牙を剥いてくる以上、膝を屈する訳にはいかない。

「まだ立ち向かってくるその気概は賞賛に値するが……。とはいえ貴様にも分かつているだろう？」

もう既に、貴様から勝機は消えた。これ以上は無駄だ」

笑わせる。本当に笑わせる。口元に笑みが浮かぶのを止められない。
い。

今までの速度が俺の全力だとも？ 今までの戦いが俺の全力だとも？

なるほど。予想以上にうまくいっていたようだ。

「おいおい、あんた最強とか言われてるのに、歳で呆けたのかよ？」

「何……？」

確かに。確かに勝機なんて見えない。せめて一撃、とは思っているものの、実際は一撃も入れられず死ぬ可能性のほうが遥かに高いけれど。

いつか「無駄だ」と全てを諦めた俺に、幼馴染が高らかに俺に叫んだ言葉。普段冷静な彼女が珍しく熱くなっていたものだから、鮮明に覚えている。

「『無駄なんて、ないんだよ。この世の全てには、価値は無くても意味はある。』」

まあ、まだもうちょっと付き合えよオッサン。この後俺が死ねば、アンタと戦うのはシエリス様やルーミィ、シンシアだ。

そんなか弱い女の子たちが、無傷のごっついアンタと戦うのは、正直どうかと思うわけ。

だからさあ、

せめて腕の一本くらいは、貰って行くぜ？」

やるべき事を、やる。常に最善を尽くそうと足掻く。信じて信じて、最後まで抗ったものにしか、栄光はないのだから。

「さて、いくぜ？俺は正面から向かって行く。せいぜい撃墜^{おと}して見せる、將軍！」

手足に、突然発生した黒い魔力を顕現させる。我ながら禍々しい魔力だと思いが、この際使えるなら何でも良い。文字通り、「最後の一撃」。俺はこの一撃で散るかもしれない。正直、怖い。怖くて怖くて逃げ出したい。死にたくなりたいし、死ぬかもしれない

場所に飛び込んでなんて行きたくない。

だけどそれ以上に、彼女たちを助けたい。彼女たちを守りたい。陛下の願いをかなえたい。せめて、何かを残したい。

だから今は、死ぬことなんて考えない。

「……底知れぬ闇を宿し、されど吞まれず。まったく。貴様が、もう少し早く現れていたなら」

おいおい、最後まで言うなよ。これで終わりじゃないんだ。俺はアンタを生け捕りにして陛下の前に放り出して、あとあとゆっくり話すんだよ。

「良い覚悟だ黒曜卿。その気概に敬意を表し、俺の手でその魂を送ってやるわ」

相手も、構えを変える。大剣を上段に掲げ、足を前後に肩幅ほど開く。

（完璧に、上段からの振り下ろしだなあ……）

真っ二つにされる己が見えた気がしたが、その幻視を振り払う。魔力を限界まで練り上げる。こちらの魔力が洗練されて行くにつれ、相手の威圧感も増してくる。

（うっわ、ビンビン来るなあ……）

これが殺気と言う奴か？まあいい、今は余計なことは考えず、集中するときはだ。

(練って、練って……)

練り上げる。不純物を削ぎ落とし、水を沸騰させるように。そのイメージが、まじよく自分を変える。そして、その張り詰めた自分自身をまじよく

開放。

(もう何も恐くない!!)

狙うは一点、奴の頭

!!

さて、ここで思い出して欲しい。

ひどく速い物体にとって、少しの障害は致命的である。だからこそ電車の置石は危ないし、走っている人の前に足を差し出してはいけない。物体の動きが速ければ速いほど、その物体は少しの障害物で転ぶ、あるいは脱線する可能性が大きくなる。

そしてプラスして、俺は絶賛グロッキー中。視界がふらふらで、どこが真っ直ぐな道筋かもわからない。あっちへフラフラ、こっちへフラフラである。

そのような要因が重なった結果

俺は当初の予定を大きく変え、前につんのめって地面スレスレの低空飛行をする羽目になった。

そう。

止めとばかりに戦いでボコボコになった草原からの、無言の抗議を食らって。

まあ、端的に言えば

躓きました

(ずっと、俺のターン！)

もはや自分でもよく分からないテンションで、地に足が着いた俺は持つ限りの打撃技を繰り出す。

ストリート、ミドルキック、下段回し蹴り、肘打ち、左フック、前蹴り、直突き、圏推、e t c e t c……

無心、というのか。無我の領域、と云えばいいのか。とにかく俺は、もう一切の思考を行っていないかった。思うままに攻撃を打ち続ける。そして、遂に掌が相手を捉え、大きくスキが出来る。これを逃がす道理はない。

(これで、マジモんの最後の一撃！)

これで倒せなかったら、俺は死ぬ。だけどそんな未来は存在しない。何故なら、俺が負けたらソフィアが危ないからだ。

「あああああああああ！」

もはやほとんど残っていない、底をついたはずの魔力を必死にかき集める。集める、集める。これが俺の全力全開。文字通り、「己まりよくの全て」をかき集め、そして

「取り合えず、食らっとけ？」

必殺技じはくその一だあああああああ！！！！

閉幕

。

轟音

命中

「な、何だあれは……!?」

ガルフ殿が叫ぶが……それは誰もが思っていた。

普段の穏やかで優しい彼からは、想像も出来ないほどの怒気と闇。

(あれは……私やガルフ殿の比ではない!)

間違いなく、世界最大の魔力量だろう。しかし、黒い魔力など聞いたことがない。黒闇というのは短慮だろうが……しかし、それは十分に禍々しく、闇を連想させるには十分だった。

「はっ、こんなレベルの魔法まで使えるのかよ……」

動揺する私たちをよそに、ギンヤがふらつきながらも立ち上がりきった。だがその体には傷が刻まれ、その傷からは命の水が滴り落ちていた。

「ほう、案外しぶといな。外見からはそうは見えないんだが」

將軍が意外なものを見た、とばかりに目を開く。魔力の大きさは動じた様子がない。あの程度將軍には何でもないのだろう。

「……残念ながらボロボロだよ。ただ、ね……。ちよっと一人の女の子が最悪な状態になるビジョンが浮かんだら、寝てなんかいられなくなつた」

!

おそらくは……ソフィアのことだろう、その少女は。その彼女が傷つくの思い浮かべ……先の絶叫。

はあ、と私はため息をつき天を仰いだ。いかにソフィアがギンヤを正しく見ているかと言つことが分かったからだ。

(死んだほうが幸せか……。なるほど、そうなのかもしれない)

「ったく、吸収しきれない魔法か……。いったいな、畜生」

おおいてえ、と顔を顰めるギンヤ。

「まだ立ち向かってくるその気概は賞賛に値するが……。とはいえ貴様にも分かってるだろう？」

もう既に、貴様から勝機は消えた。これ以上は無駄だ」

その言葉は、決して大きくない声量なものにも関わらず、戦場全体に響き渡った。それは誰もが感じていたことで。それでも口には出せなかった、冷たい現実。

機動力が突出した、言い換えれば、機動力が命であるギンヤにとつて、このように傷を負って機動力の低下が引き起こされるのは、最悪の事態だ。

加えていまだ將軍は無傷。そう、確かに。もう、勝機は見えなかった。

それでもギンヤは立ち上がった。

「おいおい、あんた最強とか言われてるのに、歳で呆けたのかよ？」

「何……？」

そしてギンヤは、あるうことかこの状況ですら、いつものように不敵に微笑み。

「無駄なんて、ないんだよ。この世の全てには、価値は無くても意味はある。まあ、まだもうちょっと付き合えよオッサン。この後俺が死ねば、アンタと戦うのはシエリス様やルーミィ、シンシアだ。そんなか弱い女の子たちが、無傷のごつついアンタと戦うのは、正直どうかと思うわけ。だからさあ、」

せめて腕の一本くらいは、貰って行くぜ？

そう宣言し、ギンヤは構えを変えた。今まで軽く握っていた拳を完全に開き、顔の前に三角形を開くように掲げる。重心を落とし、腰を低くする。そして、今にも飛び出そうとしたままの、引き絞られた矢のような氣勢のまま静止。

「さて、いくぜ？ 俺は正面から向かって行く。せいぜい撃墜^{おくだ}して見せろ、將軍！」

ギンヤの全身に、漆黒の魔力が溢れかえる。猛々しく禍々しく、どこまでも暗く不吉な魔力。しかしそれは、見る者を魅了する輝きを放っていた。

一方しばし沈黙したままギンヤを見据えていた將軍は、徐にその表情を崩し。

「……底知れぬ闇を宿し、されど吞まれず。まったく。貴様が、もう少し早く現れていたなら」

俺は、このようなことなどする必要も無く、そちらで貴様と笑い合えていただろうに。

その言葉は発せられることは無く。しかし確かに、私達は聞いた。

「良い覚悟だ黒曜卿。その気概に敬意を表し、俺の手でその魂を送ってやろう。」

將軍も構える。大剣を上段に掲げ、足を前後に肩幅ほど開く。今まで数々の名のある武将を屠って来た、「名も無き天下無双の一刀」。將軍もまた、持っている最強の一撃を持って答えようとしていた。

それを
向かい合う二人を、私はどこか人事のように見ていた。

次の一撃が最後になる。ギンヤは言ったのだ、玉碎覚悟だと。それも全ては、次の私たちの為に。

本当は逃げて欲しかった。誇りも陛下の願いも関係なく、逃げて

欲しかった。けれど、彼はそれをしなかった。

だから私も……逃げないと決めた。

鞘にしまっていた剣のナックルガードを一撫でし、抜刀。刀身を地面に突き刺した。

（私は見据える。私は見ているぞ、ギンヤ）

願わくば……この思いが、彼の力にならんことを。

場を支配するのは、痛いほどの沈黙。そして、動けば何かが破裂しそうな緊張感。

その緊張感は張り詰めたまま、両者は力を練り続ける。ギンヤは魔力を。將軍は気合を。両者が己が最善を尽くすために、全ての力を一瞬に注ぎ込む。

そして、遂に限界まで練られたギンヤの手足の魔力が弾け。

次の瞬間には、その場にいた全員が驚愕することとなった。

（……………え？）

何が起きたかわからない。高速で移動した？ 何を馬鹿な、そのような生易しいものであるはずが無い。

だってそうだろう。速いとかそういった問題ではないのだ。
誰が想像出来たろう？

音すら置き去りにする人間が、存在したなどと。

一瞬私には、ギンヤが何をしたのか分からなかった。しかしその後理解した。ギンヤはその、目にも映らない速さで有り得ないほどの低空飛行を行い、將軍の足を取ろうとしたのだ。地面すれすれとは、將軍のもつ技の特性　縦斬りである事から言って、最も速度と体重が乗った一撃が当たる場所だ。

だがそこはまた、最も攻撃が届くのが遅いポイントでもある。そしてギンヤの意表をつく攻撃。一瞬將軍は面食らい、判断が遅れた。だが、その一瞬で十分だったのだ、あの最速を誇る「黒曜卿」には。

迷いの生まれた一撃は、容易くギンヤに躲され。ギンヤはそのまま足を取るように潜り込んだあと跳躍し、宣言どおり腕を折るかのように、將軍の右腕に足を絡ませようとす。しかしやはり、將軍も流石だ。一瞬で、その腕を折る攻撃を止めるために、邪魔になる大剣を捨てる判断をするとは。

だが、その最善を持ってしても、もはやギンヤは止められない。

足を解いて着地したギンヤは將軍の懐に潜り込む形となった。そして、地に足がついた瞬間、次々と見たことも無い体術を使い、的確に將軍にダメージを与えて行く。

將軍とて歴戦の将。無手だろうが、並みの将にすら遅れは取らない。だがしかし、相手が悪すぎた。まったく見たことも無い動きを使い、ギンヤは將軍を圧倒する。奇襲に次ぐ奇襲、奇手に次ぐ奇手が繰り返される。

撃ち出される拳。將軍の胸から鈍い音が響き渡る。

蹴りだされる足。「膝上の靱帯」という、普通は攻撃などしない場所をギンヤは蹴りぬく。

將軍の顔が、苦痛に歪む。

振り出される肘。米神を狙った一撃は、防御した將軍の腕を貫く衝撃を与えて、微かに、しかし確実に視界をぐらつかせる。

もはやほとんど残っていないとはいえず、溢れんばかりの闇を連想させる魔力によって反則的に底上げされた身体能力も、その威力に大きく貢献している。

絡みつくような拳撃。刈り取るような蹴撃。全く見たことの無い攻撃に、將軍は少しずつ、しかし確実に追い詰められて行った。

その一撃は、世界を砕く。
その一撃は、世界を開く。
その一撃は、世界を変える。
その一撃が、結末^{ミライ}を変えた

！

そして遂に。

遂にギンヤの掌底が將軍の顎先を捉えた。鈍い音が將軍の顎先から発され、思わず彼が大きくぐらつく。そして、その隙を見逃すギンヤではない。

そこが決着点となった。

ギンヤの口から、天を割るかのような咆哮が放たれた。そして腕に、魔力が顕現する。先の身体強化ではやほとんど残っていないだろう、底をついたはずの魔力を必死にかき集め。その満身創痍の体を引き絞り、魔力を唸らせて。

「取り合えず、食らっとけ？」

光速の拳撃が、將軍の胸に直撃した。

その技は、いつかギンヤが鍛錬していたらしい技。シェリスが私に語り、できればその予兆があったなら止めてほしいと私に言った、ギンヤが出来れば使いたくないと涙を流していたらしい、尊い一撃。研ぎ澄まされたその技は、遂に「シルヴィアの絶対守護將軍」をも、打ち破った！

宙を舞う將軍の巨体。今まで誰も見たことがないだろう、將軍の敗北する光景。それが、今日の前にある。2度、3度と將軍の体は地面をバウンドし、そして動かなくなつた。それを確認すると、ギンヤもまた崩れ落ちた。

ここに両軍最強の二人の　　ある意味キング同士の決着はついた。

私は自身の口角が釣りあがるのを自覚した。あの恐ろしい闇は分らないが……それでもきつと大丈夫だ。

さて、後は私たちの仕事だ、ゆっくり休んでおいてくれ。大丈夫、あちらには最早ポーンしか残っていないのだから。

そうして。「最強の総大将」を失った反乱軍は、勢いづいたこちらの軍に、圧倒的に敗れ去った。あまりにもあっけない幕切れだと思っただが、そもそも強固な結束も無い、利権に目が眩んだ者達の戦などこんなものだろう。戦闘が専門でない、腐敗しきった貴族たちに、まともな戦ができるわけがない。

長い反乱に、終止符が打たれたのだ。

これで、やっと終わったのだろうか。

私たちは、勝利に沸く兵に指示を出し、目を覚ましたギンヤに近づく。

彼は、一人背中を向け佇んでいた。

「ギンヤ………?」

ギンヤに声を掛ける。

ギンヤは、こちらを見ない。

「ギン………」

今度はルーミィが声を掛けようとして、声を詰まらせた。
こちらに向いたギンヤの背中が、震えていたのだ。

ギンヤは、泣いているのか？

……何故？ こちらの勝利で終わったのに？ 困惑する私たちに
言ったのか、あるいはただの独白だったのか。その後ポツリとギン
ヤが漏らした言葉は、ひどく重かった。

「こんな終わり方しか、無かったのかなあ……………？」

……………それは……………。

ギンヤが何故こんな言葉を言うのか。心当たりが無いわけではな
かった。

ギンヤの視線の先にあるのは、恐らくは戦場の跡。血が溢れ、兵
の死体が幾つも重なり合っている。彼が責めているのは、悲しんで
いるのは、何だろうか。血が流れたことか。戦わなければならな
かったことか。

他の面々は何も言えず、無言で去っていった。ただ二人、その場
にギンヤと。去らずに残った私だけを残して。

S i d e : 銀也

そうして。

奇跡によつて 正確には、草原の將軍に対する報復用アシストによつて 俺は將軍を倒した。……ことに、なっているらしい。本当に偶然なんだが。最後の打撃ラツシュはともかく、そもそもそれを生み出す状況を作つたのは草原ひがしやだし。

そして、後はあれよあれよという間に反乱軍は敗北。しっかりと貴族達は当初の予定通り皆殺しにされたようだ。もうちょっと根性見せるよな。そして、俺は勝利に沸く皆に背を向け、一人草原に立つていた。

「ギンヤ……?」

この声はシンシアか。ごめん、今振り向いたら泣き顔見せるから、無理。

「ギン……」

今度はルーミィ。頼むから放つておいてくれよ。

「こんな終り方しか、無かつたのかなあ……?」

せつかく覚悟、決めたのに。それなりに自分でも中々良かった決意表明だと思っただのに。

(結局最後は、偶然かよ……。っていうか、覚悟決めた直後にずっこけるとか……………)

いや、生き残れたことは嬉しいし。勝てたことも嬉しいけど。何よりソフィアを守りきれただろう事が嬉しいけど。

けど、さ。

お (もうちょっと、格好よく終わらせてくれたって良いじゃんかよ！)

心中で絶叫。そして再び頬を心の汗が濡らして行く。

だって、嫌なイメージ思い浮かべたらなにか暗黒パワーに覚醒して能力飛躍的向上とか……………ないわ。完全に中二病じゃないか。

穴があつたら入りたい。本当に。できればその上から土をかけて、もういっそ眠らせてくれ。

背後から、皆が去っていく気配がした。呆れられているのだろうか。けれど今は、それでも良かった。御願いですから放って置いてください、下手に慰められると情けなくてまた泣くから。

「ギンヤ……………」

シンシアの声。あれ、君は行かないの？いや、御願いだから行ってください。そんなことを思っていると、シンシアが俺の正面に回

りこみ……。

がしっ

抱きしめられた。こう、シンシアの胸に顔を抱きこまれる形で。

え、いや、ちょ!?! 柔らかい、ソフィアとはまた違ったいい匂いがする、シンシアさん意外に着痩せするタイプですね、じゃなくて!!

「いいんだ」

なんとか理性を取り戻し、引き剥がそうとする俺を更に強く抱きしめ、シンシアは言った。

「いいん、だ。今は、泣いていいから」

ああ。

ダメだつてば。

慰められたら、情けなくて泣くって言ったのに、うわぁーん!

男の子である俺が、その情けなさに耐えられるわけも泣く。結局俺は、シンシアの胸で号泣してしまった。

……………なんとというか、ご馳走様でした。

Side…シンシア

私の胸で嗚咽を漏らしながら涙を流す、一人の少年。その涙はなんなのだろうか　私にはわからない。しかしおそらく今、彼は必死に戦っているだろう事は分かる。己の中の葛藤や、悲しみとしかしそんな彼に私が出来るとは、これくらいしかない。

せめて一人にしないようにと少年を抱きしめながら、私は考える。
(それにしても)

この私が、男を、それも同世代の人間を胸に抱く日が来るとは。それも、自分から望んで、抱きしめることがあるなど。

(これは、どういうことなのか　)
彼は、当然友人だ。からかい合ったりもする、悪友かもしれないけれど、だからといって、それだけでこのような行為を男にするなど

いや。認めよう。認めなければならぬだろう。

必死に動く彼の姿に、心の中で声援を送らずにいられなかった。將軍の刃が彼を襲ったび、女々しくも悲鳴を上げなくなった。魔法が当たり、彼が地に伏したときは、何もかも放り出して、助けに行きたかった。彼が勝利をもぎ取ったときには、安堵の余り泣きそうになった。

そうして、今。

彼が私の胸で泣いていることに、羞恥を感じるよりも

涙を流して悲しむ彼に対しては申し訳ないが。嬉しい、と。純粋に愛しいと、感じてしまった。

もうここまで来て、自分の気持ちに気付き、それを認められないほど、私は子供ではなかった。

……はあ。やれやれ、ソフィアは手ごわい相手だな。

ギンヤ、私は、君のことを

。

第10話後編：決着（後書き）

主人公の「黒い魔力」は、自由に使えればチートです。ただ、文字どおり身を削る必要が……発動条件についてはいつか明らかになりますが、そうそう使えるものではないです。

それはさておき、今回の話については感想でギャグなのかシリアスなのかどっちつかずだ、というご意見をいただきました。ごもっともです。正直、將軍を強くしすぎた弊害です。まともな收拾のつけようがありませんでした。作者の力不足です。

これ以降は、戦闘に関して、少なくとも真面目な戦いに関しては、勘違いを介入させないつもりです。心理的なものはあっても、シリアスを崩壊さえない程度のもに抑えるつもりです。

第11話：きな臭くなってきた……………（前書き）

前書きって何を書けばいいんでしょうね。

第11話：きな臭くなってきた……………

「ええと、これが証拠資料かな？」

ガサ入れ入りました！。あれ、入れが入る……………意味かぶってる？

現在俺たちが何をやっているかといえば、敵の本拠地から様々な証拠品を押収しているのであった。

とはいえこれで証拠を押収したところで、何がどうなるわけでもない。すでに反乱に携わった貴族達の処刑は完了している。有名無実の捜査だから、俺のような得体の知れない人間も参加させられているのだろう。仮にこれが重要なものであったなら、得体の知れない俺に参加させる訳が無い。

「なんか色々あるな……………」

「ああ。しかし、私まで参加しているのは何故なのだろうな……………」

他国の人間であるシンシアまで参加しているカオスっぷり。シエリス様は自分を規則でがちがちに縛り付けるような固い人間と思っているようだけど……………きちんと力の抜きどころというか、拘るべき所を心得ている気がする。

「……………君は楽しそうだな」

「あ、わかる？」

ガサ入れって一度やってみたかったんだ。刑事ドラマ的なものの影響だろうか。しかし欲を出せば、ダンボールがないのが悔やまれる。あれがあれば今回のガサ入れの形式美としていい働きをするし、仮にこの先どこかに潜入しなければならぬことが起こったとした

ら、蛇的な意味で隠れることもできるし。

「私はあまりこういった作業が好きではないのだが……」

少々面倒くさそうなシンシア。しかしやることはやっているようだ。時々手に持った資料を見詰めて目が細まるのが怖い。次のターゲットはこいつだ、とでも思っているのだろうか？ いやシンシアさん、既にそいつら処刑されていますので。將軍だけは軟禁状態ですが。

「しかし、見れば見るほど不自然だな……」

「え？ 何が？」

「利権に捕われている以上、誰が最も利を得るか、という事が優先されるだろうし、内部だつて一致団結していたと言いはり難いだろう。そんな纏まりの奴らがここまで大規模な反乱を起こせたのだろうか？ それに、最後のあたりこそこちらが優勢だったが、途中まではそれなりにまともな戦術をしていたようだしな」

「……確かにね。ルーミイたちも大分苦戦……と言わないまでも、厄介な戦術を取られたこともあつたと言っていたし」

「ああ。重ねて言うが、私や君が参戦する前は、それなりにまとも機能していたんだ。だからこそ解せない。まるで……」

「誰かが入れ知恵をしていたみたい？」

「……考えたくはないがな。仮にそうだとするなら、まだこの反乱は……」

しばしの間、二人して無言になる。少々飛躍している発想だともいえるが……確かに引つかかる。

「実際シエリスたちの話によると、処刑される前に貴族達は誰かに助けを求めていたり、罵倒していた様子でもあつたらしいしな」

「協力者に助けを求めていたか、あるいは助けに来ないことに苛立つていたと？」

「そうとも取れるだろう？ それに、助けに来ない……途中から協力者に奴らが見放されたと取れば、突然奴らの戦術が脆弱になったということにも説明が付く」

「その予測、シエリス様には？」

「既に言っている。というか、ライトアーシエント公爵が私の前にその違和感と仮説をシエリスには言っていたらしい」

「……凄いな公爵」

「ああ。正直、彼は絶対に敵に回したくない人間の一人だよ。まあ、彼は私利私欲に走るような人間ではなさそうだし、今回の反乱によって彼が唯一の公爵となつて権力が増大したということを考えれば、それだけでシルヴィアとしては意味があつた反乱だろうな」

そこまで評価するか、シンシア。けれど実際、ヴィロウ將軍の件について皇帝に言われる前に策を練っていたことも考えれば、確かに凄い人だというのはわかる。

まあ俺にとつては気のいいおじさんただけだね。頭がよいということに尊敬はするけど、だからどうしたということでもない。仮にそれが、真つ黒な策謀用の頭でも。

王女様だとか公爵だとか、人の上に立つ人間だとか家柄のいい人間だとか。そういった人たちを、そういった目で見る人は必要だと思つけど、それは誰かに任せます。幼馴染いわく、周りがそういった人間ばかりだといやになるらしいし。俺は俺で、できるだけ等身大の人間、そういった付加価値から離れたその人自身を見るように心がけております。

俺自身そつちのほうが楽しだね。まあそんなことはおいておいて……。

「ただ、恩赦という方法はな。他国の人間である私が口を出すべき

ではないが、少々あからさま過ぎたとは思つ」

「……まあ、それに関しては」

まだ正式に帝位譲渡の儀式が行われてはいないが、既に恩赦は出されている。生き残ったのは目論見どおり將軍ただ一人だけだ。

ただ、あまりおおっぴらに出来るものではない。事実、公爵は更に万全を期すということで、「皇帝陛下の親友であり忠臣であった將軍は、反乱軍の情報を流すために一時的に寝返っていた」というような後付け証拠資料を偽造している。また、流石にそう取り繕っても反乱軍に参加していた人間に再び軍権を握らせるというわけにもいかず、將軍は事実上の引退を余儀なくされた。

まあ、これからは一緒に隠居した皇帝と余生をお楽しみください、ということだ。

「まあ、それはあくまで私も皇女としての視点から言っているだけさ。個人的には陛下のお心を考えれば、最善だったと思う」

「それには同感」

話しながらも、二人共手は止めない。ううむ、しかし……いかにせん資料が多い。どうにもこうにも人手が足りないよな実際……。

ああ、猫の手も借りたい状態とはまさにこのこと。仕事してくれなくてもいいから、俺の癒しとして。ああけど、俺は犬派だよ！

もっとも、猫も大好きだけどね！

「……というか、何故俺は文字が読める……？」

シンシアに聞かせるつもりはない独白。文字は明らかに日本語じゃないのに……意味は理解できる。事実何回かシンシアにこれはこう書いてあるんだよね？ と尋ねると、肯定の答が返ってきた。若干のニュアンスの違いはあれど、9割がた理解できている。

「どじいじいとなの……」

翻訳魔法とかその辺りか？　けどそんなもの掛けられた覚えがないし……。それにそもそも、話し言葉が一緒というのも分からない。どじいじいじいとなのだろう？

（まあ、そういうものだと思うしかないかな）
考えたってわからないことは放棄。無駄だ無駄。
（とりあえずは資料を……。うん？）

再び資料を探そうと動くと、足元に違和感。石の床なのに、若干軋む音もする。これは……。木材、か？

「ねえシンシア、ちょっと」

「うん？　どじいじい？」

ちょっとちょっと、とシンシアを手招きし、カーペットをどけるのを手伝って貰う。

よいしょ、とカーペットをどけると、そこにあっしたのは、そこだけ木で出来ている辺が1m程度の正方形の場所だった。

「「あからさま過ぎる……」」

シンシアと二人して声をそろえてしまったが……。これはひどい。

「シンシア、ちょっと下がって。こつまであからさまだと罨にも思える」

「あ、ああ。気をつけてな」

一応シンシアを安全圏

いや、正確には把握できてないけ

ど　　に下げる。他国の皇女様に傷をつけるわけにはいかないしね……ああ、なんだかこちらの世界に来てからそうだった事をよく考慮に入れられるようになったな。立場だとか、権力バランスだとか。

さて、とりあえずこの板を破らないとな。身体強化をかけ、踵を打ちつける。板が綺麗に割れ、その中の空間からは数枚の羊皮紙がでてきた。

「とりあえず危険はなさそうだな」

「うん。えっと、これで全部か」

スペースの割に出てきたものは少なかった。さらに二重底になっていたりかもしなさそうだったので、取り出した羊皮紙をシンシアと一緒に覗き込むと。

「「な　　！？」」

とんでもないことが書いてあった。

やばい、これが本当なら

！

「シンシア、皆に事情説明よろしく！　俺は皇帝陛下のところへ向かう！」

「ああ、気をつけてな！」

「冗談じゃねえぞ！？」　公爵とシンシアの予想的

中の上、とんでもなくまずいことになってんじゃないか!?

「クソツタレが!! 間に合ってくれよ !?!」

フルバーストで王都に向かう。途中でシエリス様たちのそばを通り過ぎたが、説明している余裕はない。それはシンシアに任せた。一切何も言わずに、俺はひたすらに駆けた。

隠されていた資料。それには戦略の指示やこちらの動きの予測など、明らかに外部からの指示が示されていた。

そしてその中の一枚にあった、看過できない一枚の計画書。

シルヴィア皇帝の暗殺計画。

反乱が終わった瞬間の気の緩みを突き、実行される計画。何故あんなところにその計画書があったのかは分からない。それは分からないが 少なくとも、今現在それが進行していることが判明した。ならば、今やるべきはその阻止、それだけだ。

間に合え!

突然騒ぎが起こった。一体何があったというのだろうか？ 残党でも潜んでいたか？

「シェリス様、御下がりください」

剣を抜いたルーミイが前に出る。何だ、何が起こったというのだ？ 訳が分からないが、警戒するに越したことはない……そう考えて警戒態勢をとる私たちの側を、一瞬で何かが通り過ぎた。

「「は……………？」」

一切状況が把握できず、私もルーミイもただその「何か」が通り過ぎた後を見るばかり。目には映れど、留まらない速さ。そうなる……………

「あれはギンヤでしょうか……………？」

「おそらく……………？」

一体どうしたというのでしょうか？

「ともかく、何かがあったというのは間違いありません。シェリス様、私の側を離れないでください」

「ええ。頼みましたよ、ルーミイ」

長い銀髪を靡かせながら左右を見渡し、ルーミイは警戒している。その睨みつけるような鋭い視線は、些細なことも見逃すまいという気概が見て取れる。

幼少の頃から共に育ったということもあるのだろうか、その背中
は誰よりも頼もしく思える。もし私が敵陣に取り残されたとしても、
かならずルーミイは私を守り通してくれるだろう。

（もつとも、そのような状況にならないように努力はしますが、
さて……）

だからといって私が警戒しない理由にはならない。念のため、私
も剣を抜いておく。するとその直後、向こうからシンシアが走っ
てくるのが見えた。

「シンシア、どうも騒がしいようですが……何があったか知っ
ていますか？」

「ああ。実はな」

そして語られたことは、私たちを驚愕で絶句させるには十分だっ
た。

「だから実質最速のギンヤが全速力で向かっている」

「そうですか、それで……」

「シエリス様……」

ルーミイとシンシアが気遣わしげな視線を向けてくる。しかし、
私は既に、実質の王権譲渡をされた身。毅然としてあらねばならな
い。

「大丈夫です、二人とも、作業の続きをしましょう」

私は既に王なのだ。動揺など見せてはならないし、自信がやるべ
き事をこなさなければならぬ。

それでも……どうかお願いしますと願ってしまつくらいは、良い
のでしょうか？ ギンヤ。

(もつと速く、もつともつともつともつと!!!)
全速力で向かっているが……くそ、じれったい！ これ以上の出力は到着前にガス欠になってしまっただろうし……！ そもそもこれ以上の速度が出ない！

(くそ、もつと速く出来ないのか……!?)
無理だ。魔力が足りない。それこそ、將軍戦の時に出た謎の黒い魔力くらいじゃないと……。

あれはどうしたら出るんだろう？ あれが出れば！
けれど、発動方法が分からない。くそ、またなのか……!?

また、俺に良くしてくれる人が不幸になりかけているのに。
俺は、それを今度こそ許してしまうのか？

(許さない)

そんなことは許さない。絶対に許すものか。せめて自分の周りの人くらい守れなきゃ、必死こいて鍛えてきた意味がないだろう！

しかし、たとえいくら決意をしたところで、状況は好転しない。

(もつとだ！ もつと ！！)

焦燥が胸を焦がす。いくら念じても念じても、今以上に速くは成れない。くそ、くそっ！

間に合え、間に合え！ 間に合わなかったら

！！

そして

唐突にビジョンが浮かんだ。浮かんでしまった。

目の前の光景を、認識できなくなる。

(う、あ)

床に広がる血溜まり。

(ふざけ、るな)

人が、そこに倒れこんだ。

(どうして……)

こんなことを許さないために走っているのに。どうしてこんな映像が浮かぶ？

徐々に、薄暗かったその景色がはっきりとしてくる。

第11話：きな臭くなってきた……………（後書き）

結構な人が黒い魔力の発動条件わかつちやっただかもですね。まあ、まんまです。

第12話：上を向いて歩こう。(前書き)

本当に何を書けばいいんでしょっね。

第12話：上を向いて歩こう。

「はあっ、はあっ、はあっ……！ ぜえッ……！！」

門から入るのももどかしく、城の壁を突き破ったあげくに中の壁すらブチ破って俺は皇帝の寝室に突入した。騒ぎを起こしてしまったことについては申し訳なく思うが……それでも、結果的には皇帝を救えたので、そのあたりはせめてプライマイゼロにして欲しい。

「お、おお、助かったぞギンヤ君……」

「い、いえ……」

しかしギリギリだった……暗殺者がまさに皇帝に襲い掛かっているところに俺は突入した。その勢いでナイフを振り上げていた暗殺者に偶然突撃、結果的に一撃ノックアウト。しかし、もしこの突撃が皇帝に当たっていたらと思うとぞっとした。人間、焦っても常識は投げ捨ててはならないな……。

「お、お怪我はありませんか……？」

「ああ、おかげでなんともない。本当に助かったよ……」

「し、しかし、警備体制は、見直したほうが良いですね……」

「……まあ、今は反乱もあって戦力が分散してしまっているからなある程度ここが手薄になるのは仕方あるまい。既に私よりもシェリスのほうが重要人物だしなあ」

「そ、そういう問題じゃ、ねーでしょう……。もっと、自分を大切にしてください……」

本当に頼むから。そしてようやく衛兵たちが騒ぎを聞きつけてやってきたようだ。

「城内、警備薄いよ、何やってんの!!」
「も、申し訳ありません!!」

つついっい衛兵たちに某艦長のノリで怒鳴ってしまったが……今回ばかりは許されるだろう。

「た、頼みますよ、本当に……!! っっていうか、なんで扉の前に警備がないんですか! おかしいでしょ!？」

「は、はい!」

「ああ、まあその辺りで抑えてくれギンヤ君。とりあえずその少女が私の暗殺を実行しようとした。牢に入れておいてくれ」

「か、かしこまりました!」

そして暗殺者の少女を縛り上げて、数人の衛兵が連れて行った。今は衛兵が二人、俺と皇帝が部屋にいる。

「……はあ。まあ、とりあえずは、ご無事で何よりです……」

「……ああ。重ねて礼を言う。ありがとう」

「はい。……まあ、次からは警備に期待と言うことで……」

一件落着して気が緩んだせいか、急激に疲れが押し寄せてくる。

(あ、まず……)

意識を保てない。視界に霧がかかる。

(魔力切れかあ……)

……まあ、本当に今回は頑張ったし。もう、ゴールしてもいいよね……。

(とりあえずは、皇帝の無事を喜ぼう……。それに収穫もあったし……)

分かった気がするぜ、黒い魔力の発現条件……………。
(けどとりあえず、今は……………)

全てを後回しにして……………眠ってしまおう。

(おやすみ、なさい……………)

お疲れ、俺。

暗転。

5日後。

シエリス様たちが王都に凱旋してきた。既に使者を出して皇帝の無事は伝えてあるので、心配事が無くなったシエリス様は堂々とした態度で帰還した。

(…………シエリス様は自分をまだまだ未熟とは言っているけれど。実際大したものだよなあ…………)

俺より1つか2つしか変わらないだろうに…………あの姿勢。まさしく王にふさわしいだろう。

(こつちの人たちは凄いやなあ…………)
自分のやるべき事を、全身全霊でこなす。本来は、至極当然のことなのだろうし、こちらの皆はそれをやはり当然と捉えていて、自分が凄いと頑張っているという意識はないのだろう。けれど…………。

(カッコいいなあ、ちくしょう……………)
自分のやるべき事に真剣に向き合う姿は…………こつちもカッコいいものだったのだろうか。

自分を封じ込めて、善政を敷いていた皇帝。

それを受け継ぎ、また発展させるべく常に国と民の事を考えて努力するシエリス様。

それを全力で支えるべく奮闘するルーミィやガルフさん、公爵。

俺としてはやり方自体は認められないけれど。自身の命と、それより大切な名誉を投げ捨てて……反逆者と言う汚名を背負ってまで国に尽くそうとした將軍。

友と自国の為に、皇女と言う立場でありながら、常に自身の命を賭して最前線で戦うシンシア。（これは少し自重しろ、と思わなくもないが）

今はまだ、実際に何かは出来ないけれど……それでも人一倍の優しさで民のことを考えるソフィア。

いや、向こうの世界でもそんな人はいたか。幼馴染の詩織はシエリス様のように努力していて、その姿が凄く魅力的だった。

（俺もあなりたい。こんな皆と対等なんだと、胸を張れるくらいになりたい）

俺が出来ること。そんな本気で頑張っている人たちを、支えるために出来ること。

（……………とりあえずは）

強くなりたい。精神的にも、肉体的にも。どこまで出来るかはわからないけど、でも……………。

俺も、自分のやるべき事に、真摯に向かい合おう。

（そうなるか……ここはやっぱり覚悟決めるか）

俺はシエリス様たちに歓声を上げる民衆の中から出て、目的となる場所に向かった。

いい加減、前に歩き出すために。

「…………… やれやれ。それで、後はゆつくりと余生を楽しもうと思
っていた俺を卿は引つ張り出したわけだな？」

「ええ。そっちにとつても、国にとって使える人間が増えるのは悪
いことじゃないでしょう？」

「やれやれ、存外強かだな。いや、今更か……………」

「…………… それについては反論したいところですが…………… まあいいです」

姿勢を正し、しっかりと前の人物を見据えて協力を要請する。

「俺の願いの為に…………… 俺を鍛えてください、ヴィロウ將軍」

「…………… いいだろう。だが、甘くはないぞ？」

「望むところですよ」

「そうか。ならば、俺が持つ全てを卿に伝えよう。しかし分かつて
いるな？力は所詮……………」

「力に過ぎない。そして武を振るうものは、自身が相手を力で屈服
させ、自身の願いを押し通す…………… 最低な人間になることを覚悟
しなければならぬ」

「そうだ。極端な話、力づくで女を犯す男。数を頼りにして弱者を
いたぶり、自らの欲望を満たすもの。俺たちはそやつらと同じ人種
なのだ。力で欲望を押し通す…………… そんな薄汚れた存在だ。

それでも、それを理解したうえで、尚この道を進むというのだな？」

「はい。それが、俺が選んだ道です」

じつと、強い目でこちらを見下ろすヴィロウ將軍。その威圧感に下がりがなくなるが だけどここは、抗う場面だ。

「決して、その力によって屈服させられたものは、卿を許しはしないぞ?」

「もとより、許しなど請うつもりはありません」

「そうか。ならばその在り方は」

ええ、分かっています。

訳の分からないまま、こちらの世界に放り出されて。一人の女の子に出会って、人の命を奪って。その殺人に感謝されて。

守りたい人たちが出来て。助けたい人たちが出来て。俺が心からやりたいと思うことが出来た。

だから、一步を踏み出そう。道は既に決まったのだから。ならいい加減、歩き出さなきゃいけないんだ。

「『悪』。俺は、悪で構いません。恨みからも怒りからも憎しみからも、もう俺は逃げません。」

流れる血と奪う命を対価とし、俺は自分の満足を得ます」

「その意思、確かに承った。ならば俺は、卿から剥奪する光を代償に」

自身の欲を力で満たす、悪として卿を造り上げよう

そして、剣と拳が交わった。

それは、一つの醜悪な誓い。
ある屋敷の中庭で行われた、人でなしたちの約束。
血で汚れた師匠と、血で汚れることを望む弟子の誓い。
力ですべてを押し通す　　そんな存在をまた一人生んだ瞬間。
そんな醜悪な契約の儀式を囲む景色は　　皮肉にも、
優しい光と緑で満ちていた。

こうして。

俺は光を差し出して、その代わりに力を求めた。

血を流させて血で汚れ、そしてその代わりに血を流させない、そんな存在になろうとした。

傷つけることを、壊すことを、殺すことを躊躇わない。だけど傷つけさせない、壊させない、殺させない　　そんな矛盾した存在になろうとした。

悪で構わなかった。存在価値など無くなっても良かった。

俺自身が、俺が最も嫌う存在になっても　　それで良いのだと。

それが望んだことなのだ　　醜悪な俺は胸を張った。

それは嫌だと　　汚れたくない俺は首を横に振った。

それを実現させるのだと　　醜悪な俺は叫んだ。

そんなことはあつてはならないと　　汚れたくない俺は呟いた。

もう戻らない。これが俺の道だ。

「その通りだ」と　　2人の俺が同時に笑った。

「……………それで、この状態ですか？」

「少々張り切りすぎましたな。ははは」

正式に恩赦を告げるために軟禁中のヴィロウ將軍を訪れた私たち（私、ルーミイ、陛下）は、地面にうつ伏せに倒れて痙攣している黒い鎧を見ることとなった。

「う……………腕が……………感覚、な……………もう、む……………」

助けを求めるように伸ばされた右腕は、ガクガクと震えている。

というか全身がガタガタピクピクして……なんというか、正直……。

「面妖な……………」

隣のルーミイが漏らした呟きに、私は心中で盛大に頷いた。

「あかん……………ほんまにもうあかん……………いつてまうでえ……………」

よく分からない言葉を呟きながら、ギンヤは震え続けている。陸に打ち上げられた魚を髣髴とさせる黒い鎧は、事情を知らないものが見たら衛兵を呼ぶこと間違いなしの怪しさを放っている。一瞬ルーミイは剣を抜きかけていましたし。

「ほれほれ、どこに行くこうというのだ？　そこに行くのは置いておいて、とりあえず次のメニューだな。ほれ、立て立て」

「お、おおう……………」

フラフラビクビクしながら立ち上がるギンヤ。う、動きが、気持ち悪……………。

「……………シエリス様。御気持ちは分かりますが、さすがにそれはこやつが不憫ですぞ」

私に向かって、ヴィロウが諭すように言った。た、確かに、失礼かもしれません……………。

「ほれ、次は持久走だ。とりあえず王都の周りを10周。行って来い」

「ういーっす……………」

おぼつかない足取りでギンヤは走り出した。先ほどまでの様子では、王都を10周というのは無理なのでは……？

「……出来るのですか？」

ルーミイも同じ疑問を抱いたようだ。

「いえ、無理でしょう」

即答だった。

「……無理なことが分かっているのに？」

「限界だと思ったところからが真の鍛錬なのですよ。さて、アーシ

エ

「……なに？」

ヴィロウの声に答える幼い少女の声が、背後から聞こえた。え、な、いつの間に背後を！？

ルーミイもまったく気付かなかったようで、動揺を露にしている。そんな私たちに目もくれず、ヴィロウはアーシェという少女に言った。

「ギンヤは7周くらいで倒れるだろうから……見ていてやってくれ」

「！……………分かった」

そして次の瞬間にはいなくなっていた。灰色の短いツインテールの少女の影は、既に無い。

「……………今の少女は一体……………？」

なんという隠密行動能力だろう。あのような人間は見たことが無い。

「先ほどの子は、私を暗殺しようとした子だ」

「なあ……………!?」

陛下の言葉に、ルーミィと二人して絶句した。い、今の子が……………!?

「反乱に関わったもので、現時点で生きているものについては恩赦。そうになると、あの子も該当したのだよ」

「な、なるほど……………」

し、しかし……………。

「まあ、良い子だぞ。あの子は、暗殺者として育てられた、普通の子だ。まあ最も、ギンヤ君に懐く速度は異常だったがなあ。彼は子供に好かれるようだ」

「そうですね……………」

色々と言いたいことはあるが……………正直、殺されかけた陛下が孫を見るような目であの子を見ているので、もう何も言えません。

そして私たちは、そのアーシェと言う子に連れられた衛兵達が倒れたギンヤを運んでくるまで、談笑していたのだった。

なんなのでしょうね、この状況は？

第12話：上を向いて歩こう。（後書き）

強化フラグ。けれど、そこまで強くはなれません。それをしてしま
うと、勘違い要素が……。ああけど、政治的なもので勘違いさせれ
ばいけるか……？

第1部最終話・麗剣帝（前書き）

これにて第1部閉幕。

第1部最終話：麗剣帝

反乱は終結した。これにより、シルヴィアの止まっていた時間は動き出す。

しかし戦士達には休息も必要だ。今しばらくは時間が止まったまま、国は勝利の美酒に酔うことになるだろう。

しかし、それはあくまで兵士や民のみ。統治する側の人間達は、既に次を見据えて動き出していた。

「以上です。このように明後日には、陛下はシェリス様に帝位を譲られることとなります」

シルヴィア王都。王の居城の会議室では、これからの国を担う中核の人間が一堂に会していた。

各大臣や今回王家側についていた上級の貴族達。現在はライトアーシエント公爵が進行役となり、禅譲についての議論が行われていた。

「ご苦労様です、公爵。何か質問や異論のあるものは？」

次の王

私の言葉に対して、一つ上がる手があつた。

「……………どうぞ。ジグラット伯」

「は。やはり、ヴィロウ將軍と暗殺者の恩赦には、納得がいきません！…！」

「……………何度言えば良いのです？ それについては、もう決まったことです。暗殺者の少女は洗脳されましたし、將軍は情報をこちらに流すために向こうについたに過ぎない。これでどう彼らに罪を問えというのですか」

「しかし！ それでもやったことがやったことです！」

はあ……………。

私は表情に出さず、心中でため息を吐いた。公爵も無表情だが、あれは相当に苛々しているだろう。ガルフアルーミイは目を瞑って腕を組んでいるが、爆発寸前なのは明らかだった。

このジグラット伯は、正直相手側についてくれたほうが有難かった。百害あって一利なしを地で行く人物なのだ、実際。今回だって、まっとうなことを言っているように聞こえても、心の中では軍権の多くを陛下から預かっていたヴィロウが妬ましくてしょうがないのだろう。

「兎にも角にも！ 將軍だけでも処刑すべきです！！ 示しがつきませんぞ！」

將軍を対象を限定している時点で貴方の内心は明白です愚か者！

そして示しがないのは貴方の態度ですこの低脳！

既に決まったことに対して、真に国を思っただけならともかく、己の自

尊心を満足させるためだけにぐちゃぐちゃと

！！

「……………はぁ」

しかし、その良く動く舌は、一人の少年が漏らした多分に苛立ちを含んだため息によって凍りつくこととなった。

全員の視線が、そのため息の主に注がれる。言葉すら発することなく邪魔者を黙らせたその少年　　ギンヤは、静かな声でゆっくりとジグラット伯に言葉を放った。

「……………少々落ち着かれたほうがよろしいかと」
「くっ……………」

その声は、決して大きくは無かった。しかし、その普段より低く怒りを孕んだ声は、口だけの小心者を屈服させるには十分だった。当然だ。他人を羨んで、血統を自慢することだけを考えてきた人間と、常に最前線で戦って勝利を収めてきた、反乱鎮圧最大の功労者とは、立っている場所が違いすぎた。

「……………では、この件についてはもうよろしいですね？」
「……………はっ」

随分と苛立たしげな様子を見せる伯爵だったが、その場にいる伯爵以外の意見は一致していた。

即ち　『苛ついているのはこちらだ』と。

結局そのあとは順調に進み、明後日に正式に帝位譲渡、ということとなった。

ギンヤは、伯爵を黙らせた後は、口を出さずに目を閉じていた。何も言わなくても、私たちが助けて欲しいときは助けてくれ、大丈夫と思ったら見守ってくれる。自身はシルヴィアの間人ではない、

だからこそ、これには余り口を出さないほうがいい。そう聡明なギンヤは考えたのでしよう。ここまでの姿を見せられて、もう彼を疑う必要は無いのかもしれない……。

とりあえず……よくやってくれましたギンヤ。

Side:銀也

うつ……ああ……眠い、疲れた……死ぬ……。

いくらなんでも……スパルタすぎるよ……將軍……。

鍛えてくれとは言ったし、それなりに覚悟はしていたけれども……人間には物理的限界があつてですね……。

俺は今……なにやら重大な話し合いの席に……います……。

今の俺は……かなりのグロッキー状態で……かゆ……うま……

……じゃなくて……辛いです……。

そんなときに……ヒステリックに叫ぶおっさんとか……もう……勘弁してくださいあ……。

ため息も……出てしまうというもの……だって……男の子だもん……。

「はあ……」

おお……？　なんか黙ったぞ……やったね……。勝利ッ……！

圧倒的……勝利ッ……！　何に勝ったのかとか……お前が一体何をした、という意見は無視して……この機会を逃さず……諭すの

だギンヤ……………！

「……………少々落ち着かれたほうがよろしいかと」

やった……………。黙った……………！俺は……………自由だ……………！さあ……………後は、話をまともに聞ける状態じゃない俺を邪魔するものは無いだろう……………。俺は、運命に勝ったのだ……………！

じゃあ……………俺は寝ます。おやすみ……………。……………。ごめんなさい……………真面目な話し合いで……………洒落にならないことは分かっているんだけど……………意識が保てません……………お許しを…………………………！

結局、会議終了直前に俺は目を覚ました。そのまま解散した流れで、ソフィアとシンシア、アーシェのところへ向かう。最近は4人でお茶をしたり町に出たりすることが自然になっていった。

ソフィアやシンシアは、妹が出来たようだと言んでいた。皇帝の命を狙った元暗殺者だと知っても、態度が変わることは無かった。まあ、洗脳されていたことにしてあるしね。

それに、事実今のアーシェにもう殺意は無いし。無害な存在……………どころか、暗殺者やら罫やらにやたら敏感な、一種の猟犬と化している。超絶ハイスペック裏工作力ウンターヒューマンウエポナーシエ。語呂悪いけど、マジばねえです。

彼女が早々に馴染んだ理由としては、まだ10歳くらいの子をそ

うそう憎み続けられないというのもあるだろう。お菓子をばむはむ食べる姿に、あのシェリス様やルーミイすら溶けていたからなあ。萌えは世界を救うね、うん。

そんなことを考えていると、皆が集まっている場所にたどり着いた。

「やつほー」

「あ、おかえりなさいギンヤ」

「遅かったな。会議が長引いたか？」

「ああうん、そんな感じ」

実はほとんど聞いてなかったから……内容あんまりわかんないや？

「……………おかえり」

「はい、ただいま」

駆け寄ってきて、ぽふ、と足に抱きついてくるアーシエ。何この可愛い生き物。

ちなみにアーシエ、というのは元の世界で言うタンポポのことを言うようだ。灰色の髪はともかく、金色の瞳は確かにそれっぽい。ちっこくて可愛いし。

「……………それで、どうなったギンヤ？」

「シェリス様の即位式は明後日。予定に変更は無いよ」

「……………そうか。彼女も、本当の意味で国を背負うのだな……………。私は弟が居るし、私自身がそういった立場になる可能性は少ないだろうな」

何やらシンシアが感慨深げだ。ううん、けどそれはちいと違いますぜダンナ。

「国はみんなで背負うものだと思います、シンシア様」

ソフィアに一票。何も、一人が全部背負い込むわけではないんだ。王様をみんなで支えて……それがきつと、家臣とか、そういった人たちののだと思う。

「……そうだな。その通りだ」

柔らかい表情で、シンシアはアーシエの頭を撫でた。くすぐったそうだが、アーシエも僅かに頬を綻ばせる。

それにソフィアの手が加わった。俺の手も加わった。今度は、アーシエもはつきりと微笑んだ。

新皇帝即位当日。群集が押し寄せる中、ついにその人が姿を表した。

被った王冠よりも豪華な金髪を靡かせ、一步一步威厳に溢れた姿勢で歩を進める。藍色の瞳は真っ直ぐ前を見詰め、国のあるべき姿を映し出していた。

爆発していた歓声は、彼女が姿を現した途端に一瞬で静まった。彼女が掲げた右手にあるのは、王家に伝わる宝剣、天剣「シルヴィアエッジ」。磨きぬかれた白銀色の刀身が、光を反射し煌いた。そして頭上に掲げた剣を、右斜め下に振り下ろし、新皇帝は誓いの言葉を紡いだ。

『親愛なる我が民の皆……私が、新皇帝シエリス「シルヴィア」です。いまだ一人前とは言えぬ私が帝となることに、不安を覚える者も少なくないでしょう。

確かに私は、未熟な身です。色々と至らぬ点もあるでしょう。

しかし私は、それを許してくれとは言いません。

要望があれば、設置された上申箱に投書なさい。

不満があれば、堂々と意見なさい。

私が失敗を犯したのなら、大声で罵りなさい。

あなたたちの夫を。子供を。戦争に引きずり出すときには、この命すら狙いなさい。

それら全てについて、私は決してそれを罪には問いません。

それら全てを受け止め、私は平和をもたらしましょう。

わが身朽ちるまで

髪の毛の一本から爪の一枚まで、我が愛しきシルヴィア、そして我が愛しき臣民に捧げましょう。

皆の幸福と安寧を実現することを確約し　ここに私は即位を宣言します』

シルヴィア暦138年、5の月太陽の日。

第5代皇帝、『麗剣帝』シエリスⅡシルヴィア即位。

後にシルヴィアの金剛統治時代と評される、平和な時代が幕を明けた。

しかし、その平和に至るには

多くの犠牲を必要とした。

第1部最終話・麗剣帝（後書き）

最終回っぽい……？ いえ、まだ続きます。
しかしある意味での1区切りですね。

番外編1（前書き）

投稿遅れて申し訳ありません。今回の地震に伴う色々で手間取りました。

このような時に小説書いていて良いのかなとも思いますが、出来れば自分達は普段どおりに（様々な意味ですね。物資をいつも以上に買わないことなども含めて）いようと思えます。

なので色々意見がある方はいらっしやると思いますが……とりあえずはそういったことです。

番外編 1

「やはり活気があるな……良い街だ」

「そうだね。バリツの帝都はどんな感じなの？」

「ううん、そうだな……負けてはいないが、勝っているとも言えないね。治安はあちらのほうが良いが、民の笑顔が多いのはこちらかな……」

ああ、そういう視点で見るか。シンシアも次の統治に関係あるだろう人間だ、そういう視点で見ってしまうものかもね。

「そういった統治者目線ではなくて……シンシア個人としてはどう？」

「私個人かい？ ……なら、やはり慣れているからか、あちらのほうが好きだね。もっとあちらの方が空気がきっちりしているというか……」

「ふむ。シンシアは根っからの軍人気質なんだね」

「まあ、育ちが育ちだからね。……そういった女は嫌いかい？」

「大好きです」

「そ、そう……」

目の前の皇女様は頬を染めた。照れ屋だねえ。そういうきつちりした芯の強い人は好きなのですよ。

今俺たちは二人で街を歩いている。ソフィアを含めたシルヴィア首脳陣は大会議中で、暇をもてあましたので出てきたのだ。俺は出なくていいらしい。ま、一応は他国の人間扱い？ だしね。ただ、かと思えばソフィアが出ないような会議に出たりもするので……本当、立ち位置が良く分からない。

ちなみにアーシェはお昼寝中。寝る子は育つのだ。

「……何か考え事かい？」

シンシアの声に意識が浮上する。うづん、暇つぶしに付き合ってもらってるのにこづいづいののは良くないな。反省反省。

「ああ、ごめん。付き合ってもらってるのにな」

「いや、それは気にしないでいいよ。それで、何を考えていたんだい？」

「うづん、いや、なんというか……。自分の立ち位置をね」

「……ああ、なるほど。確かに君はよく分からない位置にいるね」

「そうなんだよね。安定しない居場所に、よく分からない情勢。頼れるものはなんなのか……」

「少なくとも、ソフィアは信じてあげなよ」

急に真面目な顔と口調になるシンシア。その雰囲気から釣られて、俺も足を止めてシンシアのエメラルドの瞳を直視する。取り巻いていた喧騒が、どこか遠くなっていった。

「彼女は君を守ろうと必死だよ。公爵は娘を守るための駒と思っている部分が少しはあるだろうし、シエリスやルーミイ、ガルフ殿は立场上素性の分からないものは疑わなければならない。命を賭して戦った君としては腹立たしいかもしれないけど……それでも、ソフィア以外の人は確かに君に完全に心を許しているわけじゃない」

「……そりゃあね。権力の中枢に位置する人間の周りに、正体不明の人間が出れば疑うものだろう」

それが普通だ。それについては、別に腹立たしいとは思っていない。それはそれ、これはこれなのだ。異世界人と言うことを話さない俺にも非があると言えるだろうし。

「けれど、ソフィアは違う。彼女は全面的に君を信じている。彼女だけはきつと、君の事を丸ごと受け入れているよ」

「……それをシンシアが言う？」

「……どうということだい？」

「君だつてさ。ソフィア並みに信じてくれてるじゃんか」

「ああ、そういう意味か。それはそうさ。命を助けてくれた相手をいつまでも疑うことは義に反するからね」

「……その考え方は、少し危ないんじゃないかな？」

「それは分かっているさ。少なくとも、仕組みられたものについてはその限りではないよ」

「ならいいんだけど」

俺は自分で言うのもあれだが、そういった……信頼や敵意といったものには敏感なのだ。シエリス様たちはなんだろう、敵意と言うには弱すぎるかな。警戒……というレベルでも最近はなくなってきた。強いて言うなら俺の素性などについて素朴な疑問を持っている……というレベルか。なんにせよ、そこまで強い敵意ではない。

しかし、そうであっても……決して頼れるような味方ではない。少なくとも、俺にとつては。ソフィアが絡んできたりすれば話は別なんだろうけど……やれやれ。いっそシンシアが皇女であるバリツに亡命したほうが気楽かもしれない。コネと言うこともあるし、バリツの兵士の人たちはシンシアの命を救った(らしい)俺にはかなり好意的にしてくれているし。

まあ、多分ソフィアがいる限り俺がシルヴィアを離れることは無いだろうけれど。

「それはそれとして……人目はどうにかならないものか」

「無理だろうね、こればかりは。君は一般兵士や市民から絶大な

支持を持つ『黒曜卿』だし、私は私で同盟国の王女であると顔が知れている。流石に注目されないのは無理と言っものだよ」

苦笑した後、訓練ごっこでもしていたのだろう（あるいは本気で訓練していたのか）、木剣を持った少年少女達にシンシアが手を振った。すると子供達が大喜び。

「武を志す人には大人気だね、シンシア……」

「あはは、こんなのでよければいくらでも見本にしてくれ。ほら、君もやってみるといい」

「ほむ……？」

俺がやっても……ねえ？ 誰だあいつ、ってなるだろうに。

「いいから、ほら」

「うづむ……ほいさ」

真似してみた。すると今度は更にえらい勢いで嬉しがり始めた。ええ、これは一体……？

「君は君が思っている以上に有名だよ。一騎打ちでヴィロウ將軍を破った実質最強の将だとね」「ええー……」

過大評価にもほどがある。あれはまあ、なんとというか……一時的な暴走と、被害を受けた草原のアシストによるものだ。

「そういえば……その、答えづらいことなら答えなくても良いのだけれど……」

「ん？ なに？」

そこでシンシアはしばらく躊躇う様な素振りを見せた。

「……君のあの、將軍との戦いで見せた魔力は………」

来たか。

正直、今まで突っ込まれなかった方がおかしかったのだ。あれは、一応自分なりに発動条件が分かっているような気がするけれど……シンシアが聞きたいのはそういうことじゃないだろう。分かっていることは話すべきなのかもしれない。けれど……

「ごめん。言いたくない」

我ながら驚くような硬い声が出た。けれどそれは当然だ。あんな……あんなモロに中二病なものについて説明するなど……！

「す、すまないっ………」

それによってシンシアが気まずそうな顔をしている。本当にごめん。けどあればっかりは………。

何故俺にあんなものがあつたのかは不明だ。だから答えたくないというのも正しいし、答えられないとも言える。ただ分かっているのは、あれは俺が嫌な想像をした時……それも、相当に精神的ダメージを負うような代物によって発動するようだという事だけ。

あれは確かにかなり強力そうで、使えば相当に戦力の強化が見込めるだろうけれど……。

(そんな身を切るような真似できるかよ………)

真性のどMでもない限り、あんなのはごめん被るだろう。半端じ

やないのだ、あの精神的ダメージ。陰鬱な気持ちと激しい鼓動をしばらく引きずってしまっただけに。元々俺は精神的には打たれ弱いのだ……勘弁してください、本当。

これならいつそ煩惱で強くなるゴーストスイーパーの能力の方が、個人的には羨ましい。

ただ、もし本当それを使わなければならないのなら、それを使うことに躊躇いは無い。上手く想像できてしまえばの話ではあるが。そうなるかと普段からそうだったイメージトレーニングをしておいたほうが良いのだろうか。こんな自爆能力をいつでも使おうと思えば使えるように……か。そうなるかと毎日毎日甚大な精神的ダメージを受ける必要が……？ それもそれで……ねえ？

はあ、とついたため息をひとつ吐いてしまった。それは喧騒に紛れて、消えていった。

正体が分からない、反乱軍の背後に居た敵。安定しない居場所に精神を削る発動困難な、切り札とはいえない不確定な手札。そして隣で沈んでいるシンシアへのフォロー。やることや考えるべきことは山積みだ。

とりあえずは……最後のものから片付けますか。

王都の中心に位置する庭園では、多くの人が思い思いに平和を満喫していた。出来ればこの光景が日常になってくれればいいと、切に思う。それがきつと、死んでいった兵達の望みだろうから。反乱を起こした貴族？ あんなやつらの願いなど知らんよ。俺は誰かの思いを踏み躪って、誰かを幸せにすることを選んだのだから。敗者には文句を言う権利が無い。そしてそれは、いつか俺が敗者になつたときにも当てはまることだ。そんなのは御免だ。だから俺は俺が敗者にならないために、俺が文句を言いたくなるような未来を生み出さないために、今までも殺して　　そして、これからも殺し続けるのだろうか。

「……ねえシンシア」

「うん？　なんだい？」

隣で自然が溢れる光景を優しげに見詰めるシンシア。彼女もまた、この世界での俺の大切な人で、幸せになって欲しい人の一人だ。

「シンシアは、今………幸せ？」

唐突な俺の問いかけ。なんかあれだな、「あなたの幸せを祈らせてください」というような宗教勧誘？を思い出した。怪しいな俺……。

「そうだね……概ね、かな」

少し頬を染めながら、悪戯っぽく笑ってシンシアは答えた。……い、今、ハートにキュンッて来た！　元が異常に良いだけに、この破壊力。シンシア……恐ろしい娘ッ……！！

気を取り直して。概ねとはどういうことだろう？

「何か足りないものがあるの？」

「ああ。大抵の人がきつと、皆して欲しがるものだよ」

「へえ……。正直な話、シンシアは大抵のものを手に入れている気がしたけど」

優れた容姿、高貴な家柄。武の才能。この世界なら、完璧といえるのではないだろうか。気を許せる友人は少ないかもしれないけれど……シエリス様にソフィア、ルーミイだっているだろうし。

まあ、人それぞれ幸せは違うだろうしね。シンシアには欲しい幸せがまだあるというだけなのだろう。

「そっか、まだ欲しいものがあるんだ」

「うん、まだあるね。あと一つ」

「そう。それって何か、教えてもらうことが出来る？」

「ううん……。まだ、決心がつかないから内緒だ」

決心とな？ ううん、予想もつかないな。まあいいけど。

「もしさ」

「うん？」

「もし、その為に俺に出来ることがあったら言ってよ。出来るだけのこととするから」

その、自分でも少々気恥ずかしい発言に
シンシアは噴出した。

「うっ、確かに自分でもクサイ台詞ではあったと思うけど、そこま
で笑わないでよ……」

「い、いや、すまない。あはは……」

そうして、しばらくシンシアは笑い転げていた。あー恥ずかしい
……。

ただ、気恥ずかしいけれど、これは本心だ。シンシアに限ったこ
とではなく、俺の周りに居る人たちには幸せになって欲しい。

そして欲張りかもしれないし、そんなことを願う資格があるとは思
わないけれど、それでも俺は先程も思ったとおり、こころも思っ
てしまう。

俺が踏み躪った、（あくまで善良な）人たちの願いも、出来るだ
け叶ってくれと。

夕日が世界を優しく照らす中、シンシアがそろそろ帰ろうといっ
た。俺はそれに頷いた。黄金色の庭園の出口で、俺は一度だけ振り
返った。

庭園に溢れる平和な光景を目に焼きつけ、願う。

願わくば　　この平和のために犠牲になった人たちの命の対
価として相応しい世にならんことを。

番外編 1 (後書き)

まあとある日の一コマ、ですね。次はソフィア ver も書きたいな
……。

第2部プロローグ：ほんのすこしのむかしばなし。（前書き）

第2部始動です。大まかなプロットは変わりませんが、新しい気分で楽しんでいただけるように頑張りたいと思います。

のっけからなんかアレな（言い表せません）話なのは、導入と言うことでご勘弁を。

ちなみにこれから最後まで展開は、「超展開乙」と言われること覚悟です。批判覚悟です。「作者の頭はワープゾーン」と言われても仕方が無いかもしれません。

しかしできれば、これ以上プロットを変えるための改訂はしたくないッ
！

いえ、あんまりにも不評なら考えますが。とりあえずは楽しんでいただけるよう頑張りたいと思います。

第2部プロローグ：ほんのすこしのむかしばなし。

女の子は泣いていました。

男の子は笑っていました。

女の子は広い部屋で眠ります。

男の子は普通の部屋で眠ります。

女の子は大きなベッドで寝ます。

男の子は小さなベッドで寝ます。

女の子はドレスを着ます。

男の子は子供服を着ます。

女の子はいつも皆に褒められます。

男の子はたまに怒られます。

女の子の家はお金持ちです。

男の子の家は普通の家です。

女の子は大変頭が良いです。

男の子は普通です。

女の子は大人に囲まれています。

男の子は子供に囲まれています。

女の子は独りでした。

男の子には友達がいました。

男の子は笑っています。

女の子は、沢山の負の感情を溜め込みました。

男の子が両親に連れられて、女の子のところに行ってきました。
女の子と男の子が出会いました。

女の子は男の子と遊びました。

男の子は女の子と遊びました。

女の子と男の子は友達になりました。

それから二人は、何度も何度も遊びました。多くの時間を共に過ごし
ました。

男の子は必死でした。自分の前では泣き虫な、独りぼっちな女の子
を笑わせようと必死でした。

男の子は辛いことや悲しいこと、我慢できないことを感じて、
それを表に出さないようにしました。それを女の子が見たら、女の子
が悲しむと思ったからです。

女の子は経験した辛いことや悲しいこと、我慢できないこと。そ
れらを男の子に吐き出しました。

男の子はそれを黙って聞いていました。

女の子が溜め込んだ、負の感情が徐々に減っていききました。そしてそれらはいっしょに無くなりました。

男の子は、我慢して我慢して、負の感情を溜め込み始めました。

女の子は良く笑えるようになりました。

それを見て、男の子も笑っています。

しばらくの時間が流れました。

女の子は、時々隠れて色々な人を救っています。男の子はそれには気付いていません。

女の子は本当に多くの人を救っています。けれどそれが男の子に気付かれることも無ければ、褒められることもありません。

しかし女の子は、男の子からの賞賛など欲しくありませんでした。いいえ、むしろ、男の子をできるだけ『そういったこと』から遠ざけようと必死になりました。

男の子の持っている不思議な力。それが明るみに出してしまえば、男の子の身に危険が迫るかもしれないからです。聡明な女の子は、そう思いました。女の子は、その後に関係から引き合わされて三人で良く遊ぶようになったもう一人の不思議な力を持った女の子と一緒に、必死に男の子を『そういったこと』から遠ざけました。

男の子は気付きません。自分の力にも、自分の幼馴染の女の子達の力にも。

それで女の子は満足でした。

女の子は思いました。自分は多くの人を救う力を持っている。そしてそれを使い、多くの人を救うのだと。

男の子も、無意識のうちに世界の安寧を保っていました

意識して女の子のように、『そうだったこと』に飛び込む必要は無い。彼は、たった独りの自分を救ってくれた。

その私をもっと頑張れば、それで男の子はもっと世界を守ったことになる。それで良いのだと。

そうして15歳のとき。女の子は両親から真実を告げられました。それを聞いた女の子は、自身が生を受けたのは、彼を守るためだったのだと。 歓喜に打ち震えました。それこそが彼女の存在意義。それこそが『夜籬』の存在理由。そしてその瞬間に、本当の意味で『夜籬詩織』が産声を上げました。

夜籬詩織は星宮銀也を守ります。星の宮に住まう人を人の目から

隠すには、星が目立つ夜を薙ぎ払ってしまえばいい。

夜薙詩織は戦います。星宮銀也を脅かす、ありとあらゆるものから守護せしめんために。

夜薙詩織は戦います。星宮銀也がいつまでも幸福でいられるように。

夜薙詩織は戦います。自分が好きな、星宮銀也の笑顔を守るために。

夜薙詩織は戦います。

星宮銀也が夜薙詩織を救うために溜め込んだ、負の感情に気付かぬままに。

女の子は笑っています。男の子も笑っています。
けれどそれは、果たしてどこまで同じ笑みなのでしょうか。

第2部プロローグ：ほんのすこしのむかしばなし。（後書き）

なんともいえぬ。なんともいえぬ。大事なことから（ry。そんな感じのお話です。

さすがにこれだけでこれからの展開がばれるとは考えたくない……そんな感じのお話です。いえ、超展開なので読みきれぬ人は居ないと信じてますが。

不安になりましたが、超展開って一応貶し言葉ですよ？

夜雑詩織、通称しおりんは、主人公の中で何度か出てきた「幼馴染」です。一応幼馴染はもう一人居ます。その子も今回、ちよろつと一行だけ出演しました。

前話までに出てきた幼馴染は、すべてしおりんのことです。念のため。確か、確かそうだったはず！

第2部第1話：変化が加わった日常……みたいなの？（前書き）

遅れて大変申し訳ございません。ついでに話は今回も進まないとい
う……なんとも。

進めようとするの説明で丸々1話使ってしまったいそうでした……。お
詫びの意味も込めまして説明回るときは番外編でも一緒に投稿しよ
うかとも考えています。

第2部第1話：変化が加わった日常……みたいなの？

兎にも角にも忙しそう。今の皆の状態は、そりゃあひどいものである。ええそりゃあもう。

書類の束を投げ渡すなんて現場、初めて見ました。いやあ、修羅場ってますねえ……なんて冗談でも漏らそうものなら即座に袋叩きにされそうなくらいに皆殺気立っている。

なぜこんな状況になったかというところ、新王即位に伴う新たな人事や、大方針の転換によって色々なところで様々な変更が起こったせいだ。産みの苦しみを体現した状況になっている。

そんな中で、真逆な様相を呈しているのが俺たちだ。俺、ソフィア、シンシア、アーシエと將軍。俺とシンシアはお客さん扱い、ソフィアはまだ政治に携わっていない、アーシエは子供に何をさせると、將軍は引退した身。

我ら暇人戦隊……と名乗りながらガルフさんとかの所に行こうかとも思ったけれど、ソフィアに全力で止められた。さもあらん。わざわざ魔力弾ガトリングの的に行くべきではない。

まあ、その中で一番忙しいのは俺だったりする。主に鍛錬で。あと、厨房の人たちと料理研究もしている。後者に関してはソフィアとシンシア、アーシエも一緒だ。

ソフィアは慣れた手つきでこなしていくし、シンシアも材料を切るのには上手い。ただ彼女は調味料を秤でいちいち計って味付けをしていく。まあ、変なアレンジ加えるよりはましだけど、そこはかとなく中学校の理科の実験を思い出させる。

アーシエは……隠密としての訓練しか受けてこなかったわけだから、今後に期待！今はまだ、しょうがないよ、うん。10歳だし。

まあソフィアと厨房の人たちの頑張りによって、まがい物ではあるものの和食っぽい何かが出来てきた。これは俺には嬉しい。やつ

ぱり故郷の味って言うのは大事だね。異世界に飛ばされて改めて実感した。

そして今日はソフィアとアーシエが合同でお菓子を作った。まあクッキーだ。それを今みんなでシエリス様たちに届けに行くところなのである。アーシエも上手く出来たようで、無表情の中にもそこはかたなく満足げな気配が漂っている。

俺と手を繋ぎながら歩く彼女を横目で見ながら、俺はこの子と出会ってからのことを思い出していた。

アーシエを倒した後の再会は、牢の中だった。幸い恩赦のこともあったので、情報を聞かれることはあっても手荒な真似はされていなかったようなのを見て安心したのが最初だった。それが後になつてじわじわと心配になっていったのだ。

だからその傷の無い身体や良好なような健康状態を見て、ついつい安堵のため息を漏らしてしまった。そしてそれが、彼女が俺に興

味を持つきつかけとなったようだ。

安堵のため息を吐いた俺に、それまで沈黙を保っていたアーシェが話しかけてきたのだ。

「……………どうして」

「ん？」

「……………どうして、安心したようなの」

「ああ、それはねえ……………君が捕まるきつかけを作った張本人が言うのもなんだけどさ……………心配だったんだ。手荒なことされてないかな、とかさ」

「……………なぜあなたが心配するの？」

その金色の瞳には、純粹な疑問の念があった。

「なぜって……………うつん、なんていうか……………」

そう。ただ単に

「子どものことは……………やっぱり心配だよ」

「……………あなた、私のお父さん？」

「ああいや、そういうことじゃなくてね……………」

うつむ、純粹だ。子どもというのをそう捉えたか……………。

「なんていうか、うつん。自分の子どもじゃなくても、心配なんだ。

これは、理屈じゃないから……………上手く説明できないや。ごめんね」

「……………理屈じゃないの？」

「うつん」

「……………うつん」

再び沈黙が降りた。目の前の子は何かを考え込んでいるようだ。その姿は、例えば彼女が隠密として、あるいは暗殺者として訓練を受けてきた存在であっても可愛らしい存在だった。だからつい、手を伸ばした。

髪に触れた。頭を撫でた。

それからの変化は劇的だった。無表情だった顔に驚きが浮かんで、呆けた様にこちらを見詰めた。それがあまりにも劇的で……こちらまで驚いた。い、嫌だったかな？

「あー……、ごめんね、嫌だった？」

返って来たのは、首を横に振る動作。

「嫌じゃない。……今まで、そんなことしてくれる人、いなかったから……驚いた」

「そっか。……うん……そっか」

ならもう一度だ。うりうり。

そしてその撫で撫でアタックを受けたアーシエは、ほんの微かにだけ……笑ってくれた。そして　驚くことに、これがきっかけでアーシエは簡単に俺に心を開いてくれるようになった。

それが俺にはどうしようもなく嬉しかったのと同時に……どうしようもなく悲しかった。

10歳の子が、頭を撫でられるのが初めてだという。俺がしたのは……俺がしたのは、ただ頭を撫でるだけだ。それだけ。本当にそれだけで……本当に、それだけだというのに。

ただそれだけの事をこの子にしてやる人が……この子の周りにはいなかった事実。ただそれだけのことで、心を開いてしまえる事実。嬉しさで悲しさや悔しさがごちゃ混ぜになって……自分でも訳が

分からなくなつたけど。とりあえずは、これからが大事で。これからこの子が今まで味わえなかつた幸せをしつかり感じられるようにって思つて、周りの人にこの子を受け入れてくれって……必死に頭を下げて駆けずり回つた。

ソフィアとシンシアは、簡単に賛同してくれた。ガルフさんも即断即決だった。意外なことにルーミイもだった。一番骨が折れたのは、シエリス様だった。なんといつても実の父親を殺されそうになつたのだし、それは当然だ。

けれどシエリス様も優しい人だから……事情を話して実際に会わせてごめんなさいさせると、シエリス様もアーシエを受け入れてくれた。シエリス様は物事の道理が分からない人ではないし、二回目になるが優しい人だ。この子がそれしか知らなかつたのなら、これから色々学んでいけば良いでしょう。そういつて、最終的にはアーシエの頭を微笑みながら撫でてくれた。

将軍のところで初めて会つたときには両者に会話が無かつたし、アーシエが一瞬でシエリス様の前から消えたから、事実上の対面はそのごめんなさいの時だった。どうなるかと思つたが、丸く収まつたよつで良かった良かった。

そしてそれに安堵のため息を吐く俺に、アーシエは聞いてきた。

「……安心した？」

「うん。そりゃあねえ……」

「……子どもだから？」

「そう、子どもだから」

そのやり取りの後に……今度はしつかりと笑つてくれた。

さて、突然話は変わるが……女性は子どもが関わると鬼となる。
俺はそれを、今回学んだ。

アーシエの経歴を本人の口から語らせるとソフィアは威圧感のある笑みを浮かべながら、公爵にどうかしてアーシエを「教育」してきた人間を全力で探してもらえるように頼むと言うし、シンシアはその夜に無表情で剣をブンブン。ルーミィは髪の毛が逆立っているかと錯覚するような、控えめに言っただけの超怖い表情を浮かべながら剣の柄をカチャカチャさせていた。

けれど一番怖かったのは、一番説得に時間がかかったシエリス様。「何としてもその肩を探し出し、しっかりと『お礼』をしなければなりませんね………」と言いながら、口元には酷薄な笑みを浮かべ、目は背筋に来るキレのある睨みを中空に向けていた。冗談抜きでマジ怖かった。比喻でも誇張表現でもなく、体感温度が一瞬で氷点下に達した。まさか城の中で凍死するかもしれないと本気で怖くなるときが来るとは思わなかった……。

そんなこんなで、シルヴィア女性陣 + の本気の怒りを目にした俺は、それ以来元々上がらなかつた頭が更に上がらなくなってしまったのである。めでたしめでた……くねえよ畜生。

その夜は、俺が女性陣怖い女性陣怖い……と呟いているのを発見したガルフさんに飲み連れて行かれた。ちゃんとこの世界では俺は酒が飲める年齢ですので悪しからず。

とりあえず、男同士の友情は深まったと思う。どっとはらい。

「……………どうかした？」

思い出に浸る……………と言うほどのものでもないけれど、少し回想をしていた俺を、手を繋いだアーシエの声が現実に引き戻した。いつのまにか、シエリス様たちの仕事部屋の近くまで来ていたようだ。

「ん、いや。なんでもないよ」

そう答えて、空いているほうの手でアーシエの頭を撫でた。それにくすぐったそうに笑うその顔に、俺はもつとこの子が笑顔でいられる時間を長く作りたいと　心からそう思った。

こちらを優しく見ていたソフィアも同じことを考えたのか、温かい微笑みを向けてくる。そしてアーシエの、反対側の空いている手を取って繋いだ。アーシエは一瞬驚いたようだけれど、すぐにより深い笑みを浮かべた。

そしてアーシエが真ん中になって、3人で手を繋いで並んで歩く。会話はなかったけれど、それは心地よい時間だった。

この時間を守ることも、俺の戦う理由になる。その思いをしつかりと噛み締めながら、俺は歩いた。3人で、温かくて優しい大切な人たちのいるところへ向かって。

3人でその場所まで、ずっと。

第2部第1話：変化が加わった日常……みたいな？（後書き）

次こそは……次こそは、番外編でソフィアverも……！
けどシエリス様の方が話しに絡めて書けると言う。なんとというジレ
ンマ。

出来れば今月中にもう1話は投稿できるように頑張ります。出来れば、
ですが……。

第2部第2話：新たな一歩（前書き）

また時間が空いてしまった……。もう言い訳はいたしません。これから先も出来る限り、時間を見つけて早めに投稿できるように頑張つて生きていきます。

第2部第2話：新たな一歩

澄んだ空気が満ちる、日が昇り始めたばかりの早朝。ソフィア・ライトアーシェントの姿は、厨房で朝食の準備に追われて働く料理人達の中にあつた。

「塩と砂糖を少し混ぜて、あとは少し柑橘系の果物を……ですね」

作っているのは、所謂スポーツドリンクに似せたものだ。塩分や糖分を水分と一緒に補給するのが良いと、これを届ける人間に言われたため、挑戦してみようとしている。

「味は、悪くないですけど……大丈夫でしょうか？」

出来上がった試作品を少し舐めて呷く。味は悪くないし、彼が言っていた通りの材料も入っている。とりあえずがっかりされることは無いだろう……と思いたい、正直。そんな思考の末、ソフィアはこれを届けることに決めた。

厨房にいる周りの料理人たちから注がれる、微笑ましげな視線に、顔を真っ赤にして慌てふためきながら。

ソフィア・ライトアーシェント。今となつてはシルヴィア王国最大の貴族の家の娘。反乱以前でも、かなりの地位にいる父親を持つ

ため、貴族達にとってはよい政略結婚の相手だった。

ソフィアの父親であるライトアーシェント公爵は誇り高き貴族であり、領民や国のためならば自身を犠牲にすることは厭わないし、娘が貴族であることの責務から目を逸らすことも許しはしない。だから、ふさわしい相手が居るならば、ソフィアに政略結婚をさせただろう。公爵は娘を愛しているし、だからこそソフィアには幸せになってもらいたいと思っっている。しかし、これとそれとは切り離して考えなければいけない問題でもあり、政略結婚といえども、ふさわしい相手が居たならば結婚させただろう。そう、ふさわしい相手が居たならば。

反乱以前のシルヴィアには、ソフィアと年齢が釣合うような年代には、私利私欲しか頭に無い人間が多すぎたし、そうでなくとも、決して有能、かつ釣り合う身分の人間は　　公爵家を将来背負って立てるような人間は居なかった。それが、18歳前後と言う、普通は結婚しているのが　　最低でも婚約している　　年齢であるにもかかわらず、シエリスやルーミー、ソフィアにそういった相手が居ない理由でもある。

だからこそ、今までソフィアは政略結婚とは無縁でいられた。国に人材が居ないのを嘆くべきか、娘を政略結婚に差し出す必要が無い大義名分ができてくるのを喜ぶべきか、というのは公爵の悩みの一つでもあった。それを議題にガルフ隊長と何度飲み明かしたことが……と、その話題に触れると黄昏れるほどに。

さて、話は変わるが、ソフィア自身その政略結婚と言うものは気にしていた。そしてそれを知っていた故に、持ち前の聡明さと直感によって、自身に近付いてくる人間に「そういった」目的を持つ人間が多いことも気付いていた。特に男に、そういった人間が居ること。だからこそ、ソフィアは若干男性恐怖症の気があった。勿論それを表面に出したりはしないし、そういった害意の無い、老人や子供、あるいはよく知る人間であるガルフやヴィロウ將軍には非常に優しく穏やかに接していたが、それでも、まったく他の男と接しようとしなのは気にされていた。

そのソフィアが、最近同年代の男性と非常に仲が宜しいらしい、という噂が国中を駆け回っていた。これは政治的にも大事件であるし、本人も否定しないので、実はかなりの話題となっている。そして何にも増して、その相手が突如として現れた救国の英雄というのだから、シルヴィア全域の話題となることは当然だった。そして話題の中心人物は、その噂通りにその男性のところへ向かっている

「ギンヤは……いつものところですよ、きっと」

足取りも軽く、ソフィアは目的地へ向かう。手には先ほど作った液体を入れた水筒。護衛が必要な距離ではないし（そもそも前皇帝暗殺未遂事件により大幅に警備が強化されている）、アーシエもぐつすり睡眠中なので、向かうのはソフィア一人だ。軽い足音を響かせながら、朝の澄んだ空気と優しい日差しを全身で感じて歩き続ける。そしてたどり着いた目的地に、やはり銀也はいた。

裏拳、追い突き。前蹴り、猿臂（肘打ち）。足刀、掌底、逆突き。ローキック、三日月蹴り、目突き金的蹴り、フックアップパー。いくつもの技を一つ一つ丁寧に、かつ全力で放っていく。

イメージする相手は、常に自分。自身の雑念を、鍛錬と共に打ち払っていく。

現在の銀也のスタイルは、古流空手と近代格闘技をミックスしたものだ。基本は武器を持つ相手も想定し、ルールが無く相手を倒すことを至上とする古流空手。それに、こちらでは初見殺しとなる可能性を秘めている近代格闘技の技も取り入れる。

向こうの世界でよい師匠に恵まれ、本人も必死に毎日鍛錬しているからこそ、同年代の人間とは比べ物にならない技量を持っていることは事実だが、決して達人というレベルではなく、また命を実際に賭ける戦場ともなると勝手が違う。だからこそ、正当な技に交えた奇手奇策。僅かでも勝率を上げるための、ひたすらに実践性を求めた結果だった。

生き残るために？ 守るために？
否。

ただ、傷つけて殺すために。

大層なお題目など不要。確かに、確かに根底にあるのは周囲の、大切な人を守りたいという思いだ。しかし、だからといって、他者を傷つけることが許されるわけではない。悪であることを自覚し、手を汚すことを覚悟したところで、傷つけられる人間にとっては知ったことではないだろう。他者を傷つけるものが、正義であつてよいわけが無い。そんな、人を傷つけることを許容する真理が許されるわけが無いし、それが真理な訳が無い。

だから、理由など語らないし、掲げない。ただ戦つて傷つけ殺す、それに対する弁解も大義も不要。第一、例え何であれ、人を傷つけるものが正義であるはずが無い。真理と言う意味ではなく、一般的に正義とは、勝つた方を指す言葉ではないだろうか。銀也はそう考えている。

そのために 自身と大切な人たちを悪としないために高みを目指し続ける。例え単調でも、地味でも、自分勝手な浅ましい願いだとしても その鍛錬と信念こそが、自身の背中を押してくれる。それだけが、今の彼にとっての全てだった。

そうしてひたすらに目の前の自分に技を放ち続けるが、背後から慣れ親しんだ足音が聞こえたので、手を止めて振り返る。そこにはやはり、想像通りの人物がいた。

「おはようございます、ギンヤ。……………その、お邪魔してしまいましたか？」

真剣に申し訳無さそうに言われてしまう。実際に、別にそろそろ止めるつもりでもあったので構わないと真実を言ったところで信じられるかどうか。そうは思ったが、正直に言うことにした。

「いや、大丈夫。元々そろそろ止めるつもりだったし。別に気を遣ってる訳じゃなく、ほんとに」

「そうですか。良かったです」

どうやら事実を言っていると感じてくれたようで、一安心する。ソフィアは気を遣いすぎるからなあ……と、表情には出さず銀也は考えた。

「それで……どうしたの？　こんな朝早くに」

「あ、はい！　この前ギンヤが言っていた『スポーツドリンク』というものを作ってみたのですけれど……」

「……わぁお」

まさか実現させるとは。俺材料言っただけだよな？　ああでもそんなに難しいものでもないか。材料入れて混ぜればいいだけだし。いくつかの文章が頭を流れて行ったが、水筒を差し出されたので、銀也はやがて考えることをやめた。

差し出された水筒を受け取り、中の液体を一口。

「あ、普通に美味しい……」

「本当ですか！？　それは良かったです……」

ほう、と安堵のため息をつくソフィア。まあ、彼女の味覚は非常に鋭いので、味見さえしておけばまず大丈夫なのだが。自覚が無いのは本人ばかり。

「うん。冷たすぎないし、その意味でも有難い。ありがとっね」
「どういたしまして」
「……………さて、それじゃ戻ろうか」
「そうですね。そろそろ朝食の時間でしょうし」
「本当、朝早いよね、ここの人たち……………」

さて、軽く汗を流した後（実はシャワーがあったりする。魔法万歳）、朝食を摂って一日が始まった。今からシエリス様たちに呼ばれて、会議である。俺の立ち位置が正式に決まる会議らしく、非常に重要なものだ。鍛錬中は忘れていたけれど、今更ながら緊張している。いやあ、厄介払い的なこともあるかもしれないし……………ああ、怖い。

ま、多分それは大丈夫だと思うし、ソフィアの側にいられるならたとえどんな役目でもやって見せるさ。

もう人殺しという最大の禁忌を犯しているのだから　今更
仕事内容とかはどうでもいい。汚れ役上等。手を汚して、汚して
そしてその手で俺は、ソフィアやアーシエと手を繋ぐ。それで汚れることを　きつと、彼女たちは厭わないだろう。というかそれを理由に遠ざけたりしたら、むしろそちらの方が彼女たち

を悲しませる気がする。

俺の勝手な解釈かもしれないけれど、間違っではないと思うのだ。さて。。。

大きな木製の扉の前で立ち止まる。ここを開ければ、もうきつと容易くは戻れない。俺はこっちの世界の存在となり、帰る方法があっても、あっちの世界には安易に帰れなくなる。だけどそれでも

きつとこれが今、俺のやるべき事だから。

自身のやるべきことに全力で向き合い、それを成し遂げようとする
そんな人間に、俺もなりたいから。

再びこの世界の皆に恥じないような人間に成ることを誓い、一つ
息を吐いて
俺は扉に手をかけた。

「申し訳ありません、遅くなりました」
「構いませんよ。皆今来たところですから」

それなりに大きな円卓には、すでに面子がそろっていた。シエリス様、公爵、ルーミイにゴルフ隊長。そのいつもの顔ぶれに加えて、二人の見たことの無い人たちが座っていた。

一人は女性。藍色の髪に、オレンジ色の瞳。瞳には苛烈な、しかしルーミイやシンシアとはまた違った意思の光を秘めている。凛々しい美しさ、というのがこれほどまでに似合う女性はそういないだろう。その雰囲気は、例えるならば、達人の握る刃そのものだ。触れたら切れる、ではなく、触れても切らないことが出来る、といったような。難しいニュアンスではあるが、やたらと鋭いわけではないとも言えればいいか。とにかく、只者ではないのは間違いない。

もう一人は男性。俺より少し年上であろう、決して大柄ではないがかなり鍛えこまれている肉体を持つ、金髪金目の見るからに武人な人。目力といい立ち居振る舞いといい、まさしく騎士を体現したかのような人だ。また、この場において腰に剣を帯びている。帯刀を今許されているということは、中々信頼されている人のようなだ。

「ギンヤ、そこに座ってください」
「わかりました」

シエリス様に促され、空いている席に座る。それを見届けると、公爵が口を開いた。

「さて、今日集まっていた理由は承知のことと思います。黒曜卿　ギンヤ・ホシミヤの立ち位置の問題です。まずは私から、現状を説明することとします」

そこで咳払いを一つして、公爵は続ける。

「現在新陛下の下、新体制を構築している最中ですが　皆さんご承知の通り、現在問題が起こっています」

ぐるりと辺りを見回す公爵。皆頷いているが、俺は知りません。美人さんも首を捻っている様子。男性は……分かっていてるみたいだ。

「ああ、ギンヤ君とシュテラ君は知らないだろうから、きちんと説明はする。実は　」

「公爵。それは私から説明します。全ては私の至らなさが理由なのですから」

「シエリス様……分かりました」

そしてシエリス様が話を引き継ぐ。なるほど、俺の隣に座っている美人さんはシュテラさんと言っらしい。んで、逆隣の短い金髪のがっしりしたお兄さんは誰なの？

「自身の恥部を晒すようで苦しいですが……実は今、この国では、武官と文官の対立が起こっているのです」

「対立……ですか」

「はい。何と言うか……新体制の中で、どちらが主導権を握るのか、という争いです。両者が両者とも、そのほとんどの人間が私欲ではなく心底国のために争って争っている……上から押さえつけますと」

「裏切られたと感じ、忠誠心が反抗心になる可能性がある、と……」

「……」
「その通りです」

ううん……反乱軍と違って、国のために動いている人間だから返って難しいかな……。

これは、皆が頭を抱えるわけだ……。言葉で言っても、今回の場合はその争っている人たちに心から納得してもらわないといけないのだし……。ううん。

「……中々、厄介なことだ」

「そうですね。そしてそれが、あなたの役職にも関わってくるのです」

「……つまり、どういうことですか？」

「救国の英雄であるあなたを、文官武官、どちらか一方のみに所属させますと……」

「うっわ……」

俺が救国の英雄とかいうことへのツッコミはおいておいて……なるほど、俺はパワーバランスな訳ですね。

つまりそうなるか……。俺の役職は文武両方、あるいは第三の所属とでもなるのだろうか？

「そこで、あなたにやっていただききたい役職ですが」

「表舞台で治安を守りつつ、裏側でも活動、ねえ……」

結果を言うなら、俺はその役職を了承した。もとより、どのような役割でも果たそうと思っていただけだから、当然だけれど。

シエリス様たちの説明をすると、これから先やはり裏側で汚れ役を引き受ける人物がいる。しかしその人間の正体を他国の人間に掴まれるわけには行かない。だからこそ、俺とのことだ。

俺はなんだか將軍と一騎打ちをしたり（暴走です）、民衆以外のところ（敵兵だけのところ）に突っ込んでいたりしたこと、敵陣の中で公爵令嬢を救い出したこと（誤解です）などから、他国にも「騎士の鑑」として名が知れはじめているとのこと。正直、「ねーよ」と思ったが、他人の評判というものはどうこうできるものではないと言うことを思い知っていたので、反論はしなかった。もう面

倒くさい。

話を戻そう。つまり、そういった人間である俺が裏側の人間であるとは誰も思うまい、と言う理由らしい。安直過ぎるのではないか……と思っただが、公爵が反対しない以上、大丈夫なのだろう。あるいは、それが露見することも含めて何か手を打ってあるのかもしれない。どちらにせよ、俺を捨石にする感じではなかったから、問題ないのだろう。

そんなこんなで、俺の役職は、警備隊長兼・隠密部隊長となった。隠密と言うことは、当然裏で策謀系のこともしなければならぬらしく……つまりは文官武官両方やってるじゃないか、という何とも強引な理屈の結果だったりするらしい。首脳陣は本当に大変だなあ……。

さて、仕事を受けたは良いけど……隠密って、何やれば良いのさ？ 警備だって……本格的にやるのなら、ノウハウとかがないと出来ないよ？

そのもつともであろう俺の疑問を解決してくれるのは、俺たち以外誰もいなくなった会議室（仮）の中、俺の目の前で直立不動なシユテラさんと名も知らぬ男性だった。

「この度ギンヤ様の副官に任じられました、元隠密部隊長・シユテラ＝ノイアースです」

「同じくギンヤ様の副官に任じられました、元警備隊副隊長・カイン＝ヘイルノートです」

『以後、よろしくお願いいたします。我ら両名、御命令とあらばこの身が碎けても成し遂げましょう』

この二人が。以後、予想以上に長く付き合っていくことになる、俺の最初の部下となった。

そして、俺はこれからこの二人、そして俺の部隊の人たちと共に、予想以上の慌しさに、きりきり舞いになりながらも、前に進み続けていく。そんな未来の到来を、予感していた。

第2部第2話：新たな一歩（後書き）

今回、なれない三人称で前半部分を書いてみましたが……いや、辛い。けれどこれから先三人称もいっぱい出てくるかもしれないので、極力おかしくないように書けるようにしないと……。いや、まだ一人称視点も未熟ではあるのですが。

第2部第3話・仕事の準備とあれやこれや。(前書き)

はい、本当にお久しぶりです。詳しくはあとがきで懺悔を。

第2部第3話：仕事の準備とあれやこれや。

「…………ふう。警備に隠密、ね」

役職への任命を言い渡された後、俺は宛がわれた執務室で、過去に俺が今後担当する隊が過去にやっていた職務内容に関しての書類を読んでいた。今週は副隊長2人がそれぞれのトップとしてまだ動いてくれるから良いけれど、来週からは俺がトップである。この一週間は、うん、引継ぎの為の猶予期間なのだろうね。来週から本格的に動く為にも、事前知識は持ち合わせておかないと……………

「しかしまあ分厚いことで」

…………いけないのだけれど、ちよっぴり心が折れそうだ。机上の中心にでんと置かれた、広苑もびっくりな厚さの書類の束が、その事前知識を得るための道具らしい。こんなに机に向かうのがいやになるのは、大学受験の成績停滞期の勉強時以来だ。

「まあ、嘆いてても仕方ないってことで……………」

とりあえず始めようか。案外始めてしまえば後は続くものだしね。そして俺は、来週からの仕事の為に、一ページ目を開いて書類を読み始めた。

その後、どれくらい経ったのかは分らないが　　コンコン、
という乾いたノックの音で意識を引き戻された。どうやらだいぶ入
り込んでいたらしい。読んでいると興味深いところも多々見受けら
れたので、時間を忘れて集中してしまった。

「はい、どうぞー」

しかし、誰かな？

「失礼、します……」

「あれ、アーシエ？」

予想だにしない客人だった。なんでアーシエが？　彼女はライト
アーシエント邸でソフィアの母親さんやメイドさんたちにネコ可愛
がりされていたはずだけど……？

「ギンヤ、今度から、裏側の仕事もするって、聞いたから……」
「……………誰に？」

さあて、口の軽いお方はどなたかなー？　そんなにあちこちに、
隠されるべき仕事をする人間広めちゃだめでしょー？

「ルーミィ、に」

「何やってんだあの銀髪巨乳」

よりによって口軽いのかかなりの重役じゃねえか。大丈夫かよこの

国？

「ギンヤは裏の仕事の経験ないだろうから……教えられることがあったらお願い、って」

「あー、なる……」

善意100%かあ……いや、それでもその辺の区切りをつけるべきではあると思うのだけれどね。というか、それ以前に……アーシエにはもう、こういったことには関わらずに平穩に生きていって欲しいのだけれどなあ……。

「あのさ、アーシエ……君は、なんていうか、もう自由なんだよ。

だから、こっちに、こんな仕事に、関わる必要は無いんだ。別に君の助力が有難くないとか言ってるんじゃないか？ やっぱり……」

「けど、どのみち、私はもう関わっちゃった……。きつと、今までやってきたことだって、無かったことには出来ないよ……？」

「……いや、まあ、そうだけれど……」

俺の言葉に、言葉とは異なった有無を言わさない迫力を持って、アーシエは答えてきた。

「今までやってきたことは、消せない。今まで私がやってきたことは、やっぱり私自身の、罪だから……きつと、逃げれない、よ……？」

「……そうだね。逃げられるもんじゃない。忘れたとか、振り払ったとか、そういつても……きつと、巡り巡って立ち塞がる。そういうものだろうね……」

それはそうだ。アーシエの言うとおり、命令されたとはいえ、最終的に実行するという決定を下し、手を染めたのはアーシエ自身だ。

罪が誰にあるといわれれば、アーシエにまったく無いなどとは言えない。

けれど、それでも……彼女が今まで人を殺してきたこと、それで悲しんだ人がいたかもしれないことを踏まえて、それでも俺はもうアーシエには、関わって欲しくは無いのだ。今更遅いとか、そういう問題じゃないはずだから。

「別にさ、無かったことにしよう、全部忘れて幸せになれって言うんじゃないんだよ。むしろ、今までのそれを踏まえて、これ以上罪を重ねないことが大事だと思うんだ。今までのことを自覚して、きちんとそれに向かい合った上で、それで……」

「……今までは、何も、思わなかったのに。最近自分が良くないことを、してたんだって、分ってきた気がする。だから、本当に、それと向き合うのが、怖いのに……ギンヤは、ひどいね……。ひどいこと、言ってる」

そうなのだろう。目を逸らす事を、こんな小さな子に許さないのだから。だけど彼女がやってきたことは、きつと、年齢どうこうで許されるものじゃないから。これから先のこともある。このことは彼女の周りにいる、一人の年長者としては、きつちり見据えていかないといけない。まあ、俺もまだまだ全然幼いだけだ。ガキのくせに偉そうなこと言ってるよ、とは自分でも思うから、突っ込まないで欲しい。

「ひどいことを言っているね。その通りだ」

「……………」

アーシエは何も言わない。けれど、別に俺を恨めしげに見たりしているわけではない。単純に、俺を見ているだけだ。ただじつと、灰色の瞳が俺を見詰めている。

しばらく無言で見詰め合っていると、アーシェが再び口を開いた。

「……ギンヤは」

「ん？」

「ギンヤは、それを実行してるよね」

「……一応、そのつもり。でも、どこまで行っても、結局は……」

どれだけ罪を見詰めても。どれだけ罪に苦しんでも。奪った命の上で、命を奪った人間が幸せになっている。その構図は、変わらない。何をどう思っても、何をどう考えても、何がどう変わっても、それだけは、きつと。

「……でも、守りたいんだよね？」

「うん。それに、偽りは無いよ」

「私も、同じだよ？」

「え……？」

「私は、ギンヤが好き。ソフィアが好き。シンシアが好き。シエリスも、ルーミイも、ソフィアのお母さんも、メイドの皆も、好き。優しくしてくれたみんなが好き。だから守りたい。それじゃ、駄目なの？」

「……だから、自分も出来ることをしたいってことかな？」

「……うん」

「そっか……」

ばふ、と革製の椅子の背もたれに身体を預けて、考える。

もうアーシェに裏側の仕事に関わって欲しくない。それは、俺の思いとしてはある。けれど、どうなのだろう。それでアーシェの気持を拒絶することは、正しいのだろうか？

今回の選択には、ベストはないのだろう。どちらをベターと考えるかだ。ううん、どうしようかな……………。

まあ、何も裏側のお仕事でも、全部が全部悪事って訳でもないし…………。アーシエの初めてのわがままを、潰すのも忍びない。俺が悪事で無い仕事の中から、頼れそうなことを探して頼む。まあ、この辺りが落としどころかな。

「じゃあ、わかった。こうしよう。いけないことじゃないことの中から、俺がアーシエに頼めそうなことを探すよ。そしたら、それを手伝って欲しい。それでいいかな？」

無表情が、微笑みに変わった。ん、なんとか納得してくれたみたいだ。

「うん。がんばる…………」

「そのときはお願いね。ところで、ソフィアたちは何してるか知ってる？」

「……………ううん、知らない」

「そっか」

妙に沈黙が長かったけど…………まあいいか。出歩くのなら護衛とかはきちんと付けるだろうしな。ただ、一応アーシエも…………。

「アーシエ、これから何かやることある？ ないならいつもどおりにお願いしたいんだけど…………」

「わかった。じゃあ、どっちかを探しに行く」

「お願い」

「……………いつものように、と言っているのは、アーシエがソフィア

やシンシアたちに付くことだ。仮に正面からの襲撃や、ある程度の奇襲にならソフィアについているような護衛やシンシアでも対応できるが、完全に暗殺を狙われると中々辛いものがある。なので、基本的にそういったことに強いアーシエに付いてもらっている。こう考えると、元々アーシエには出来ることをやってもらっていたな。ま、裏の仕事じゃないけどさ。

「……あ、そう、だ」

「ん？」

出て行く直前、アーシエは何か思い出したようで振り返った。そして、俺にとっては割と重要な話をしてから出て行った。

「……公爵から、伝言。『正式な仕官によつて、これで君は正式な重要人物となったから、妬む人間も出てくるだろう。その覚悟はしておけ。ちなみにシルヴィアでは命を奪ったり深刻な負傷をさせなければ、決闘は可だ』だって」

アーシエがいなくなると、再び部屋には静寂が訪れた。半分以上消化した書類読みを再開しようと思ったが、何だか手につかない。アーシエ言い残した公爵の言葉が気になっていたからだ。素性の知れない人間に高い役職が与えられたのだから覚悟はしていたが、やはり面倒くさいなあとか、謀略に関してはちよつと俺は専門外だからまずいなあ、などといったあまり喜ばしくない考えが頭を占める。結局5分ほどうんうん考えた。結局、このまま続けるのは嫌だったし、今日終わらせなければならぬものでもなかったので、体を動かすに行くことにした。

兵隊さんたちの姿も多く見受けられる、錬兵場の一角。そこで城下町の職人さんに作ってもらったサンドバッグに、蹴りを打ち続ける。前蹴り回し蹴り三日月蹴り足刀足刀後ろ蹴り。手技を使わないのは、手を使えない状況を想定してのことだ。滅多に無いかもしれないが、出来る限りのことはやっておくべきだろう。

「ふう……」

しばらくして、俺はそれをやめた。一段落した訳ではない。ちょっと、少しばかり、気になる集団がこちらに歩いてきたからだ。じつとこちらを睨みつけながら、歩いてくる集団。服装は華美とい

うか下品であり、お世辞にも俺に友好的な雰囲気を抱いている感じではない。というか、あからさまに結構な敵意を向けてきている。公爵の伝言を思い出した。もしかしてアレはフラグだったのか？ だとしたら、少し恨みます公爵。

集団が目前で立ち止まる。基本的に派手な服装の集団の、その中でことさら派手な人間が口を開いた。

「お前か、黒曜卿とやらは」

「まあ、そんな風と呼ばれてはいますが」

あーめんどくせー。

「……ふん。どこの馬の骨とも分らん男が」

はい。その通りです。

「取り入るだけは上手い様だな。どのようにして陛下達に取り入ったのか、おい、その手法をぜひ教えてくれよ」

そしてその言葉に反応して、笑い始める周りの男たち。あれ、今笑うところあった？

……ま、正直、いい気はしない。けれどまあ傍からはそう見えるのも分るので、黙っていた。

「……ちっ」

すると、どうも俺の反応がお気に召さなかったらしく、舌打ちをする頭領（推定）。その取り巻き連中もこっちを見ているが、そいつらはニヤニヤしている。やれやれ。

兵士さんたちも結構こつち見てるし……まあ、一見すると一触即発だしね。それは気にもなるか。俺のせいじゃないけど、迷惑かけでごめんなさい。こちらのことは気にせず、どうぞ続けてください。つて、あ……………」。

「おい、聞いているのか！」

ああああめんどくせええええ！ どういう反応しろつてのさこのタコ！ このタコ！ ちょっと黙れお前！ そしてお前達の背後から近付いてきている人たち、その集団の中心人物二人に気付け馬鹿者！

「ええ、聞いていますが……………」

空返事を返しながら、俺の目はその、近付いてくる人物たちから離れない。というか、離せない。だってなんか、近付いている集団の中のその二人、凄いオーラ発しながら近付いてきてるんだもの。むしろなんでこれに気付けないのか。

「ええい、訳の分から「何をしている？」……………」

因縁をつけてきた人間達の背後から、とんでもない威圧感を感じさせる声が聞こえた。そしてそれを聞いたエネミーズは黙った。まあ、そりゃあそうですよねー。俺もあんな声が背後から聞こえてきたら黙る。というか、その前に多分気付いて逃げてる。なんというか…………… 本当にお疲れっばいですね、公爵。目の下の隈が凄いです。けど怒りのせいとかすごいキラキラした目をしてるし…………… いや、本当に怖い。

そしてそのバーサク状態な公爵の隣で、見たことも無いきつい目

でエネミーズを睨みつけている娘。つまりはソフィア。我が親愛なる少女。

「兵士達からの証言は取れている。貴様たちが一方的にギンヤ君に絡んでいったとな。その理由などどうでもいいが、一つ覚えておけ。彼は先程、王家並びにライトアーシエント公爵家の庇護下に置かれる事となった。ギンヤ君が何かおかしなことをしでかしたなら両家も擁護する気はまったく無いが、そうでない場合は……。これ以上はもう言う事はあるまい。消えろ」

公爵のめつさ低い声での爆弾発言に、集団は絶句。のち、蜘蛛の子を散らすように逃走。俺は絶句、のち硬直。ソフィアは相変わらず睨んでいた。美人が怒ると迫力あるよね、本当。

じゃなくて、え、どうということ？

「まあ、そういうことだ、ギンヤ君。詳しい説明はソフィアから聞いてくれ。私が説明するべきなのだろうが、すまない。疲れていてな……」

「あ、はい。お気になさらず、ゆっくりお休みください」

「すまない。ではソフィア、後を頼む」

「分りました」

護衛を引き連れて、公爵は去っていった。後に残ったのは俺とソフィアと静寂。なんというか、ちょっと展開が速すぎて正直何が何だか分らない。わけがわからないよ。ただ、この駆け足な展開をソフィアが説明してくれるようなので、視線をソフィアに向ける。その視線に頷くと、ソフィアは話し始めた。

反乱終結以降、何回も行われていた
せられていた会議の全貌を。

俺に内容が伏

第2部第3話：仕事の準備とあれやこれや。（後書き）

前書きでも述べましたが、お久しぶりです。実を言うと、今回はそこまで時間がなかったわけではありませんでした。話の流れも、出来上がっていました。

しかし、とにかく納得行く文章が書けませんでした。この話、白紙から5回書き直しています。次の話も出来ているので、調子が戻れば連続で更新出来ると思ってもいましたが、今回の話が本当に上手く行きませんでした。たいした実力も無いのに、スランプなるものに陥っていました。そのような事情で、今回のように間が空いてしまいました。申し訳ありませんでした。

次回更新は一週間以内出来る……と思います。遅くても二週間以内には。ただ、それ以降は、調子が戻るかどうかの問題です。もしかしたら、リハビリがたら別のものを書くかもしれせん。申し訳ありませんが、その辺りご了承ください。

最後になってしまいました。待っていてくださった方々、本当にお待ちして申し訳ありませんでした。

正直今回の話も、掲載出来るような出来かどうか自信がもてずビクビクしております。どうか皆様、お待ちさせた身分で心苦しいですが、率直に感想を下されると嬉しいです。

お知らせと言つべきか、言い訳と言つべきか……

こんにちは。今回はお知らせです。

前回の投稿で、現状スランプで筆が進まないと言つ報告をいたしました。

そして、話が固まっているにもかかわらず、二週間で投稿すると言つた次の話さえ書きあがっていない状況です。

やる気がなくなつたわけではなく、また完結させると言つ気持ちが揺らいだわけでもありません。

ですがこのまま書き続けていても、どこか先が見えなくなつてしまつているのも事実です。

また、このままでは、自分の気持ちも書くのが嫌になつていくのではと言つ危惧もあります。

なので、今回、思い切つて一旦休んでみることを決めました。

休みの期限は未定です。再開の時期も決まっています。

誠に勝手な話であることは理解していますが、今回は自分のわがままを押し通そうと思つています。今のままやつていても、きっとどこかで投げ出してしまつてしまうでしょうから……。

なので、きちんと最後まで終わらせる為に、今回はお休みをさせていただきます。

再開時期は前述の通り決まっていますが、半年から一年以内には戻つてきたいと思つています。

待つていてくださる方には大変申し訳ありませんが……理解していただきたく思います。

執筆自体は、続けます。この作品以外のものを書きながらリハビリして行こうと思います。公開するかは分りませんが……。

そのような感じで、少しの長い休みに入らせて頂こうと思っっています。また、このままエターするつもりは決してないことを明言しておきます。

それでは皆様、また再会のお時まで。失礼いたします。

第2部第4話・固まる足場、乱れる心（前書き）

お久しぶりです。仮復活？とも言えはよいのでしょうか。本格的な復活でないのは、まだ更新が一ヶ月に一回とかになるかな、といった状況だからです。それでもやる気が戻ったので戻ってきました。お待ちいただいていた方がいらっしたら、大変お待たせいたしました。再びよろしく願います。

第2部第4話：固まる足場、乱れる心

星宮銀也は、異邦人だ。

実際のところは、国が違うなどと言うものではなく、彼は住んでいた世界すら違う人間だ。

彼が世界を超えた人間であると言うことを、彼の周囲は知らない。彼は別の国の人間だ、というだけの認識に留まっている。それは当然だ。

姿形がまったく同じものを前にして、それが自分達が居る世界とは別の世界の存在だ、などと誰が思えるだろう？

ところで話は変わるが　　彼がシルヴィアと言う国に出現し今に至るまで挙げた功績は、どれほどの物だろうか？

敵地から公爵令嬢を助け出し、攻撃魔法や防御魔法が使えないにもかかわらず、敵の心の支えの一つであった特務魔道師を薙ぎ倒した。

戦況を崩壊させかねない裏切りを未然に防ぎ、同盟国の皇女の命を、その身を挺して救った。一般民衆や女子供の混じった部隊に対し、その大将のみを討ち取って見せた。

世界最強といわれる將軍から、正面からの一対一の戦いで勝ちをもぎ取った。そしてそれに付随し、当時の国王の心を救った。同時に国王の命を暗殺者の手から守ってみせた。

彼の功績を列挙してみれば、何の冗談だ、と思うような離れ業の羅列となる。これがもしシルヴィアの人間が行ったことであれば、

その人物は高い地位と役職を与えられ、名実ともに英雄と認められただろう。

しかし、現実はそのようではない。星宮銀也は異邦人だ。それも、
素性が知れないというレベルの、だ。そのような人物に、地位や
役職は与えられない。それは当然だ。

では、金銭はどうか？ 実を言えば、これも与えにくい。彼は功
績を挙げすぎたからだ。彼のやったことを国内の人間がやった功績
として 国内の人間への報酬と同等かつまともに評価した場
合、その金額が莫大になってしまう。シルヴィアの国庫にかなりの
損害を出す上、やはり素性の知れない人間に莫大な金を渡すとい
うのは、賄賂などに悪用される可能性も考えるとこれまた危険な行
為なのだ。

ではどうするべきか？ 排斥するか？ しかしシルヴィア首脳陣
の中で、これは真つ先に却下された。その理由は、人道上の問題で
はない。

その理由は、仮にそれを行おうとした場合 シルヴィア側
の被害も甚大なことになるだろうからだ。

一つ目の懸念事項は、彼個人の武力。かの世界最強を正面から打
ち破れる人間だ、それを打倒せんと思ふのなら、果たしてどれほど
の犠牲を許容しなければならぬだろうか。

正面からではなく暗殺という形を取ろうにも、向こうにはアーシ
エと言うそちら側の「天才」が居る。子供とはいえ単体で王城の警
備を出し抜き王の暗殺直前まで行けた人間だ、当然そのようなもの
に対する対抗手段も持ち合わせているだろう。彼女は仮に彼とシル
ヴィアが対立するというなら、彼の側に真つ先につく人間だろう。
それを考えれば、まともにやり合おうとは思えない。

もう一つの理由は、彼の人望と国の面子の問題だ。彼はシルヴィ
アの中でも兵士や平民の中では中々に人望が厚い。彼が居たから内

乱が早く収まった、血が更に流されずに済んだ。そう考えられてもいる。その功労者を無碍に排斥しようとするならば、まず人望を集め国の基礎を固めることが重要である現在において、つまりは全く害にしかならないことをしなければならなくなる。功績を挙げすぎた人間を謀略により排斥するというのは古来より使われてきた方法だが、それを行ってなお国として安定できていた国は、国の中の結束が強かった国だ。それが圧倒的な力による恐怖政治でも、まともりはまともりだ。今のシルヴィアは、その力が無い。ただ単に逆効果なだけとなる。

では、結局シルヴィア首脳陣は彼に対してどういった処置をしたか。それは排斥とは対極的な、しかしまた古来より使われてきたもう一つの手法。困い込みだ。

排除できないのならば取り込む。それは当然の帰結であった。具体的な方法としては、王家と公爵家と言う二台巨頭の庇護を受けさせることによって、彼の気分をいたわずらに害しようとする輩に対しての牽制を行う。また、十分な地位や褒賞を与え、人間なら多かれ少なかれ持っているだろう欲を満足させる（最も、今回の対象である彼はあまりそういった欲が無い人間のようなことから、効果の程は不明だったが）。

それが今現在取れるベストな方法だろう、とシルヴィア首脳陣は結論を出して実行した。

その判断はどうやら早速功を奏したようだった。賄賂や不正が発覚し地位を追われた『元』警備隊長とその取り巻きたちが、彼の逆鱗に触れる前に事態を沈静化させることに成功した。

彼が王家と公爵家の庇護下に置かれたことは近日正式に国中どころか同盟国であるバリツに広く布告される。その上、今回起こった

小競り合いは、多くの兵士達が目撃している。

それは多く噂される話となるだろう。従ってその事実を知らずに彼に手を出す愚か者はいなくなり、逆にその事実を知って尚彼に手を出そうとする、出せる人間は国内には今のところいない。

不安定で揺らいでいた彼の立場は、これにて固まったのである

というのが、今までギンヤを除いて何回も行われた会議での決定でした。そして今回、ギンヤには自分が王家と公爵家の庇護下に置かれた真の理由が話されることはありません。

ただ、あなたは庇護下に置かれました、と。それだけです。私は説明役を命じられましたが、教えてよいのはそれだけです。

それについて理解は出来ず。しかし、納得は出来ません。なぜ、まだギンヤはここまで危険視されるのでしょうか？

確かに、大きすぎる力は国にとって危険　　ですが、それを恐れて過度に警戒しようものなら、忠誠心が強いほどその者はやる気をなくしてしまうでしょう。

私は、臣民としてそれを危惧します。勿論、個人としても、大切な人に対しての仕打ちには納得行きません。

しかし　私は、その意見を表明することが出来ませんでした。臣民としての提言さえも。それは、果たして私にそのようなことを主張する資格があるのか　それが分らなかったからです。陛下も、ルーミイも、ガルフ隊長も、お父様も……あの場にいた皆は全員、今まで自分の何かを犠牲にして国の為にそれぞれの戦場で戦ってきました。

私は、そのような人たちの決定に異を唱える資格があるのか……それが、分らなかったのです。私がああの会議の場にいたのは、ただ、今のところギンヤに最も近い国内の人間というだけの理由であり、『私自身』が必要とされたわけではありません。今の私には、何かを言う資格など、きつと。

思考に沈んでいきそうな私を、ギンヤの声が引き戻す。

「ふーん、まあ、色々と了解。まあ、本当はもっと裏のごちゃごちゃした理由があるんだろうけど、まあいいや。それは別に俺に関係ないし」
「……………」

ギンヤは頭の回転が速い。あの歳でいやなかなか、とあのお父様も陰で褒めていたくらいだ。だから今回も本当は大体のことを察しているに違いない。

けれどそれには関係ないと言い切ってしまう。それは、おそらくは自信の表れ。何が降りかかろうと、全て対処尽くして排除尽くしてみせる　そんなことを迷い無く言い切れる、芯の強さ。

おそらくこういつた面が人を惹き付け、そして恐れさせるところなのでしょう。

ですが、同時に彼は非常に脆い一面を持ち合わせていることも知っています。それは当然です。強いだけの人間などいません。だから彼の心の弱いところを守るように　　そう、思っていました。

けれど具体的に、自分が何をしてこれたか……それを考えてみれば、結局何も出来ていません。いえ、してこなかった、とさえ言えるでしょう。勿論機会が無かったということもあります。

しかし、そもそも　　私が彼をそう支えられる状況と言うのは、彼が揺らいでいるときです。それを考えれば、支えたいと望むのは揺らいで欲しいとも取れます。なんて浅ましく身勝手な願いでしょうか。

自己嫌悪が身を蝕みます。

けれど　　そう。けれど。けれどそのような自己嫌悪に浸っていて良い訳は、そして資格のあるなしを恐れて発言しなくて良かった訳はないのです。

例え陛下やお父様たちに叱責されようが　　命を賭けて力になった人たちにさえ信頼して貰えずに、一人孤独に佇む目の前の人を、私は支えなければならなかったのに　　！

「わたし、は、……………」

「……………ん？　どうしたの？」

「わたしは……………」

視界が霞む。私は泣こうとしているのでしょうか？　それこそまさか……………そんな資格があるとでも？

命を助けられて。

何度も助けられて。

心すらも助けられて。

何もかもを助けられているのに

何も返せていない。

何も出来ずに、無力なままで、なのに
弱さを見せようと？

今もなおこうして、

感情を押し殺す。それを、目の前の彼に見せてはいけない。

「……ソフィア？」

「はい？」

きよとん、と。そう見えるように。心を隠しながら振舞う。

「どうかしましたか？」

「……ん、いや、なんでも」

「どうしたんですか？ 変なギンヤですね」

くす、とわざと微笑む。感情に蓋をして。内心を殺して、「わたし」を偽って演技をして。それは、こんな私を大事にしてくれる目の前の彼への、更なる裏切りだ。しかしそれでも、もうこれ以上に彼に弱さを見せてはならない。

もう彼に甘えてはならない。それは、絶対に、許されない。

だけど。

だけどこれ以上いたら、きっとまた私は彼の優しさに溺れ、そして甘えてしまう。

そんな私は、今、ここに居てはいけない。だから、彼の目の前から、私は居なくならなければならない。

「っと、それですね、説明が終わったら、私も行かなければならないところがあるので……」

「……ん？ ああ、了解。気をつけて行ってらっしゃい」

「こちらを気遣ってくれる、合いも変わらず優しい言葉が、胸に刺さる。優しいまなざしが、穏やかな声が、暖かな雰囲気、全てが私の胸に痛みを走らせる。

だけど私は

その痛みも見せずに、また微笑んで一礼し

ギンヤに背を向け逃げ出した。

そして全力で走りながら、私は他人事のように考えた。

…。
> <こころして、何も弱音を吐かず、強くあれば、いつか……………

第2部第4話：固まる足場、乱れる心（後書き）

若干鬱展開？入ってます？

でもきつと、あのお方なら何とかしてくれます。ただ剣振って魔法撃つだけの人じゃないので。

以降若干、ソフィアとあのお方中心のお話になるかと思えます。主人公？ 誰それ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5626/>

彼の非日常な生活、彼女たちの日常生活

2011年12月26日01時01分発行